永遠のフィレーナ 2

光への脱出

作／首藤剛志
絵／高田明美

AM JuJu



永遠のフィレーナ②光への脱出



首藤剛志

昭和24年８月18日、福岡県生まれ。脚本家。シリーズ構成も担当したテレビアニメ「ゴーショーグン」(56年)「ミンキーモモ」(57年)が代表作。「ゴーショーグンシリーズ」などで、小説家としても活躍中である。



高田明美

昭和？年３月31日、東京生まれ。「クリィミーマミ」「うる星やつら」などのキャラデザイナー。最近はイラストの仕事が多いが、アニメの次回作も準備中だ。









永遠のフィレーナ2
光への脱出

首藤剛志

デビス帝国の刺客・黒い悪魔の手により目に傷を負ってしまったフィレーナ。ネストの友人・キルの手で手術は受けたものの、目が回復するにはあと1か月かかるという。目の見えないフィレーナにジリ、ジリ、と迫る新たなる敵の影。フィレーナの決死の脱出行がはじまった。次々と倒れていく仲間たち。そして盗賊の首領・ラリスとの運命的な出会い。フィレーナの戦いの道は、はたしてどこへつながっているのか？

故郷・フィロセラの再興を目ざし、強大な敵・デビス帝国との戦いに生きる美しき女戦士・フィレーナ。その鮮烈な生き様を描く好評シリーズの第2弾。

主な登場人物



フィレーナ

デビス帝国に滅ぼされた国・フィロセラの唯一の生き残り。男として育てられた闘技士（バトラー）である。



リラ

フィレーナの名目上の妻。フィレーナが実は女だという秘密をただひとり知っている。



ネスト

闘技のシナリオを書く闘技作家。フィレーナの生き方に興味を持ち、なにかと力を貸している。



ミリカ

闘技試合で、夫を殺されたことをうらみ、フィレーナの命をねらいつづけている踊り子。



ラリス

ひそかにデビス帝国に反抗している山の民・ラリテニアンの首領。剣の腕はフィレーナと同等以上。

口絵・本文中さし絵／高田明美



目次

プロローグ

兵団名はバラバ

デビス新暦五一年……（注）新暦とは、デビス帝国が全世界を制覇した以後の暦号である）

デビス帝国の地方都市ドラの郊外にある闘技士養成所で起こった原因不明の大爆発は、武器用のエネルギー貯蔵庫の事故と判明……なお養成所の周囲二キロにわたり、生存者は確認できなかった。

犠牲者のほとんどが養成所で育てられた闘技士見習いだが、著名人としては、偶然その場に居合わせた闘技演出家のバラバ氏、作家のネスト氏が事故に遭遇したと見られる。

なお、バラバ氏とネスト氏の関連する試合スケジュールは別の試合に差し替えられ、この事故によるドラ市の闘技試合への影響は、ほとんど見られなかった。

また、闘技試合関係としては、新人闘技士として注目されていた、通称「のみのフィレーナ」別称「兄殺しのフィレーナ」は、闘技練習中、誤って死亡……闘技賭博関係者を残念がらせている。

（帝国日報（デビスニュース）地方版）

闘技士養成所（バトラーファーム）を、人の命はおろか、草も木もない荒地に変えたあの事件も、フィレーナの脱走事件も、ドラ市民に報道されたのはこれだけだった。

なにも真実は伝えられなかった。

そして、市民の誰一人として、この事件を深く追及するものはいなかった。

もともと、命の数には計算されない奴隷（クレチア）の闘技士が何人死のうと、市民にとってものの数ではなかった。

ただちに別の養成所（ファーム）から奴隷は補充され、今日も競技場は、血に飢えた観客の歓声で、いつものように沸きかえるだろう。

だが、この事件を無視できぬ者もいた。

帝国機密情報兵団……通称「黒い悪魔」だ。

ドラ市庁舎からそう遠くない公園の向かい側に、大理石で創られた白亜（はくあ）の建物がある。

「デビス帝国医学大付属ドラ支部病院」と門にはそう書かれている。

帝国医大は帝国のあらゆる都市に系列病院を持つ、帝国最大にして最高の医学組織で、政財

界はもとより、帝国の有力者と呼ばれる者のすべてが、なんらかのかたちでこの医学組織を利用していた。
このドラ市も例外ではなく、ドラ支部病院の治療を受けられるのは帝国人民の上流階級であり、いわばこの病院はドラ市のステイタスシンボルでもあった。
そして、この病院の最上階のすべてをしめる特別病室No.1は、いつも閉ざされ、面会謝絶になっている。
どんな患者が入院しているのか、病院の医者すら知らなかった。
帝国の有力者がドラ市を訪れた際に健康を管理するために利用するもので、本当は誰も入院してはいないのだ、という噂もあった。が、誰も真偽は知らなかった。
なにしろ、地方の田舎都市のドラに、帝国の有力者といえるような人物が訪れたことなど一度としてないのだ。
だが、闘技士養成所の事件が起こった一時間もたたぬうちに、この部屋の中に二人の男がどこからともなく現れ、テーブルに向かいあった。
二人は黒い鎧を着て、兜の中の互いの顔すら見せなかった。
「帝国機密を探りだそうとした闘技演出家と、その関係者を秘密裏に抹殺する……。これは、そう難しい仕事ではなかったはずだ」
黒い鎧の一人が口を開いた。
もう一人が頷く。

「その通りです。だが、現実には三人の黒い鎧を失い、ドラ支部としては切り札ともいえる、集団抹殺用の黒い竜まで出動させなければなりませんでした。これが、どういうことを意味するかお分かりですね」

兜の中で溜め息がもれた。

「少なくとも名誉なことではないな、黒い悪魔としては……」

「それどころか、あやうく養成所の闘技士や一般市民にまで、黒い悪魔の存在が明らかになりそうでした。もしも、この事実が中央本部の心証を害し、我々の責任を問われたとしたら……」

「それはならん。とりもなおさず、黒い悪魔ドラ支部の解体と、我々ドラ支部上層部の死を意味するからな……。わたしは死を恐れはせぬが、五十年続いたドラ支部を、他の土地の黒い悪魔の手には任せたくはない」

二人の黒い鎧は、壁のビジョンに映るドラ市の地図をじっと見つめた。

この病院の最上階は、「黒い悪魔」ドラ支部の司令室だったのだ。

黒い悪魔の主な目的の一つに、帝国中枢部の指令に刃向かう者の暗殺があった。

かりに、その人物が地方の有力者であった場合、暗殺が市民の不審をかい、動揺を起こすようなものであってはならなかった。

そのためには、病死が最も当たり障りのない暗殺方法だ。

だからこそ、帝国のあらゆる都市に網羅された帝国医大付属病院に黒い悪魔の支部があった。

事実、ドラ市のこの病院で起こった有力者の病死のほとんどが、黒い悪魔の仕業といってよ

かった。
「この街は、たいした事件も起こらぬ田舎の小都市だったのに……」
黒い鎧が呟（つぶや）いた。
「だが、どんなに小さな街でも、小さな事件でも、黒い悪魔には失敗は許されません」
「失敗とはいえまい。抹殺は成功したのだからな」
「とはいえ、この事件で、将来に禍根（かこん）を残すわけにはいきません。すでに、調査を開始いたしました」
ビジョンに、バラバとネストの資料が映しだされた。
「問題の闘技演出家（バトルディレクター）と闘技作家（バトルライター）です。なぜ、彼らは、禁じられた『帝国機密』に興味を持ったのか？　彼らの出身は、それぞれ政治家と軍人の名門です。今は、いささか畑違いの仕事をしているものの、帝国の強大さを誰よりも知っているはずです。それが、なぜ、帝国に刃向かうような行動を取ろうとしたのか？　疑問はまだあります」
フィレーナの資料が映し出された。
「二人が最後に共通して手掛けた新人闘技士（ニューバトラー）です。フィレーナという名です」
「フィレーナ？」
黒い鎧の一人が訊（き）き返した。
「もはや使われなくなった海洋民族の言葉で……海の魂を意味します」
「海の魂……」



「実は、ありふれた呼び名なのです。海洋民族系の属国人や奴隷に多く名付けられる、男女共通の名前です。デビス帝国でも、フィレーナと名付けられた奴隷は三百万を下りますまい。もっともその名付け親も、名付けられた本人も、その言葉の意味は知りますまい。むしろ、問題は、その名前よりも……この男の闘技士（バトラー）としての不可解な行動です。競技場にデビュー以来、三度の闘技試合に勝ち、さらに最上級中央闘技士を目指していた男が、なぜ、逃亡を計ったのか。調査する価値はありそうです」

「だが、調べようにも、バラバという男も、ネストもフィレーナも、もうこの世にはいない」

「確かに、報告はそうなっています……ですが、我々黒い悪魔が直接手を下したバラバとネストはともかく、城壁から堀に落ちたフィレーナは、本当に死んでいるのでしょうか？　死体はまだ見つかっておりません。もっとも、黒い悪魔が相手なら、我々が消滅させたのですから、死体がなくても当然ですがね……しかし、フィレーナは違う。フィレーナと闘ったのは城壁警備兵（ウォールガードナー）です。残念ながら我々ではない。あなたは田舎都市の正規兵の実力を信じられますか？」

「気掛かりの種は摘み取るに限るな」

「それも、徹底的にです」

「分かった。この事件専任の情報兵団を組織しよう」

「すでに、人員は揃（そろ）えました」

ビジョンに十人の兜（ヘルメット）が並んで映った。

兜（ヘルメット）だけでは、男女の差さえ分からなかった。

十人は、お互いの顔も名前も知らなかった。
これが黒い悪魔の間では、当たり前のことだった。
情報活動や暗殺は、味方同士に惑わされることが多いからだ。
機密保持には、それが最良のやり方だった。
彼らの得た情報は、直接ドラ支部に収集され、分析の結果、それぞれ別々の指令が下される。
彼らは、一般市民の中に、軍隊に、政治の世界に、いや奴隷の中にさえ紛れ込んだ。
彼らはその場に応じた偽名を使い分けたが、黒い悪魔の間では兵団名と番号で呼ばれた。
「今回の兵団名はバラバ……、それぞれの悪魔名はバラバ1からバラバ10です」
兵団の名は、もちろん、演出家のバラバの名前からつけられた。
だが、それが黒い悪魔にとって正しい判断であったかどうかは疑問だった。
名称はあくまで便宜上のものであって、ネストの名でも、フィレーナでも良かったのだ。
だが、フィレーナの名は奴隷の名としてあまりに多く、煩雑になるのを避けたのと、黒い悪魔の呼び名に、なにも、昔滅ぼした民族の名を使うこともあるまいという、帝国人民らしいこだわりがあった。
だが、もしも、兵団の名がフィレーナだったら、黒い悪魔がこの事件の持つ意味に気づくのも早かったかもしれない。
なぜなら、フィレーナの名を聞くたびに、黒い悪魔達は耳をそばだてたろうし、それならば、男として育てられた少女フィレーナを素早く見破ることができたかもしれないのだ。

フィレーナは闘技士と呼ばれなくなっても、男のときも、そして女のときも、ただの一度もフィレーナの名を捨てなかった。

フィレーナは、いつもフィレーナだった。

そして、いつまでもフィレーナの名は人の心に残り、永遠にフィレーナであり続けた。

だが、今は、誰も、フィレーナ本人も、そのことに気づいてはいないだろう。

黒い悪魔、ドラ支部の上層部は、朝を期して兵団名バラバの活動を開始させることにした。

すでに空は白み、その朝ははじまりかけていた。

第1章

視界なき戦い

汚水の流れる音が絶え間なく続いている。
じめじめとした黴の匂いが鼻につく。
一瞬のうちに灰と化した闘技士養成所……、その付近の湖の、ドラ市の汚水を吐き出す下水道の排水口の中に、泥まみれになって身を寄せ合う四つの人影があった。
かろうじて生き残ったフィレーナ、リラ、ネスト、そしてミリカの四人だ。
外はもう朝のはずだが、陽の光はここまで届いてはこない。
ミリカが投げつけた毒薬で、フィレーナの目は光を失ったままだが、この闇の中ではさして不自由は感じなかった。
闘技士の訓練で、闇の中の気配を探る癖はついていた。
だが、いつまでも、ここに隠れ続けるわけにはいかなかった。
なにしろ食物がない。
湖の周りは焼け野原で、動物はおろか、木も草もなかった。
それに、黒い悪魔達に全滅させられた無人の養成所のあたりをうろつくのは、わざわざ殺し

て下さいと胸元を開くようなものだった。

「どうなってしまうの？　私達……」

ミリカが身体を震わせて誰に聞くでもなく頷いた。

「知らないわ、な、こと。知るわけないでしょ。だいいち、私達なんて呼ばないで欲しいな……」

リラは怒っていた。

今さら言ってもしようがないことかもしれないのだが、分かっていながらも言ってしまうのがリラらしかった。

「だいたいね、あなたがいけないんですからね。フィレーナを逆恨みして悪さなんかするから、こんなハメになっちゃったのよ。もしも、フィレーナの目が治らなかったら、あんたの目を抉り出してスープにして食べちゃうからね」

そういったとたん、リラのお腹がグーッとなった。

必死に逃げ回ったせいか、リラのお腹はペコペコだった。

「あーあ、本当に食べたくなっちゃいそう」

溜め息をつくリラに、苦笑してネストが、

「こんなときまで明るいな、リラは……」

「いいえ！　わたくしことリラちゃんは暗いんです。わたしゃ、ほんとにこの人にあったたまきてんですからね」

リラはミリカをにらみつけて見せた。

もっとも、下水道の中は暗すぎて、そんな顔は見えるはずもないが……。

だが、ミリカは低い声で呟いた。

「わたしも忘れない。フィレーナは夫のフィコスを殺したわ。それだけは確か……。忘れないわ、どんなことがあっても」

リラはポカンと口を開けた。お腹に空気しか入ってこないから、なおさらムカムカと腹が立ってる。

「こりとらん。この期におよんでなんちゅうことを……。よろし……。フィレーナの代わりに、今、ただちに私が勝負してあげるわ」

リラは袖をまくり上げた。

「やめようよ、こんなときに争いは……」

それまで黙っていたフィレーナだ。

「今は、あのわけの分からない奴らから生きのびなきゃ。僕、あいつらにだけは殺されたくない。何のためにしろ僕らを見境もなく殺す奴らに、ミリカさんも殺されちゃいけない」

「えっ？」

ミリカはフィレーナのうずくまっている方を見た。

「僕とミリカさんのこと、いつかケリをつけるよ。でも、今はお互い、生き延びなきゃ……ね」

「それは……、そうかも……」
ミリカは声をつまらせた。
……この男はなんなんだ。この男の優しさは……。でもこんな気持ちに負けちゃいけない……
ミリカはフィレーナへの恨みを持ち続けるのに必死になろうとした。
「ともかく」
ネストが落ち着いた口調で言った。
「これからどうするかを決めねばなるまい。このままどこか他の土地へ逃げるか、それとも……」
フィレーナがさえぎった。
「その答え、持っているんでしょ、ネストさん」
「どうして、それが分かる？」
「僕らを助けに来たからです。逃げられる計算がなければ、あんな無茶をするはずがない。先を見越すのが作家なんでしょ？」
「まあな。だが、見越しても三文作家の台本では上手くいくことは少ないがね」
「でもさ、確かに私達、まだ生きてる。いわれてみれば、このおじさんのおかげかもね。うん！」

リラがそう言って頷いた。
「この俺が……、三十を過ぎたばかりで……」
「十分、十歳分離れてるもん、わたし達と……」
ネストは苦笑して、
「その帝国人民のおじさんを、お前達は信じられるかね？……」
「ここにいるのは帝国人民でもなく奴隷でもなく、黒い悪魔とかいう奴らに襲われた人間の中の、たった四人の生き残りです。他に信じられる誰がいます？」
フィレーナが答えた。
ミリカは耳を疑った。
……やはりこの男はどうかしている。闘技士は、どんな手段を使ってでも相手を倒し、生き残ろうとする連中だ……。人を信じることなどもっとも遠い人間のはずなのだ……。この私だって夫のフィコスの他は誰も信じなかった……。けれど、この男は……
ネストはミリカの気持ちを知ってか知らずか、
「ま、信じる信じないはお前達の好きにすればよいがね……」
「これから、どうするつもりです？」
即座にフィレーナは答えた。
「早い話がドラの街に戻るしかない」
「ドラ!?　逃げ出した街へ戻るですって？」

リラが目を丸くした。

「そう。おそらく、お前達は他の街や他の属国へ逃げることを考えていたのだろうが、それは甘い。都市間の交通の要所の警備は厳重だ。通行証（ロードパス）のない者は通れない。それに、目の見えない少年と女二人を連れた四人は、あまりに目立ちすぎる」

「待って……。なにも四人一緒で逃げる気はないわ。私、フィレーナ一人なら、なんとかしてみせます」

リラが口をとがらした。

「もう一度言うが、目の見えない少年と小娘……人が見たら何と思うかな」

ネストの口調は、子供に教える教師だ。

「ネストさんのいう通りだ……。リラの気持ちは嬉（うれ）しいけど、現実の僕らは逃げられやしない」

フィレーナが素直に認めてしまうから、リラは唇をかみしめるしかない。

「我々にとって都合の良いことが一つだけある。それは、誰も我々が生きているのを知っていないことだ。いわば、生きている死体だ。そんな、生きている死体がごろごろしているところに紛れ込めば、気づく者は少ない」

「生きている死体？　どういうことです？」

フィレーナが訊（き）き返した。

「帝国人民でありながらまともに働きもせず、誰にも関心を持たれず、関心を持たず、ただ何

もせず一日を過ごす帝国社会の落ちこぼれどものことさ。彼らは自分のことを浮き草(デラシーナ)と呼んでいるがね。早い話が、帝国浮浪者だ。一応、帝国人民だから、奴隷にすることも出来ず、市庁も手を焼いている。そんな奴らのたむろする居住区の中に紛れ込めば、生き延びられるかもしれない」

「そんなところがドラにあるんですか？」

奴隷管理局(クレチアマネジメントオフィス)に登録されていて、いつも生死を管理され見えない鎖(くさり)で繋(つな)がれているフィレーナ達には、「生きている死体」という言葉自体が信じられなかった。

奴隷にとっては、生きて帝国人民のために働くか、死んで忘れ去られ家畜のエサになるか、二つに一つしかなかった。

何もせずに生き続けることなどあり得ないことなのだ。

ネストはフッと微苦笑して、

「俺も何度も浮き草(デラシーナ)の地区に足を踏み入れた。永住は出来なかったがね。人間は何もやりたくなくなることがよくあるのさ……、死ぬことも出来ずにね……」

ネストは一瞬、遠い何かを見つめるようなまなざしをして黙った。

「僕はそんなところに長居はしたくない。何もしないで過ぎていく時間なんていらないな……」

フィレーナがぽつりと呟いた。

「これから何をしようとしているのか知らんが……」

ネストがフィレーナの肩に手を置いた。
「その目の見えぬ間は何もできまい。すべては、その街へ行ってから考えることだな」
確かに今は、行くところもなかった。
この目の状態では、滅ぼされたフィロセラの再興どころか、デビス帝国の首都ボーに行って、再興の鍵を握る剣鍛冶（つるぎかじ）のウトという人物に会うことすら夢のまた夢だ。
フィレーナは剣を支えにして立ち上がった。
「行こう、その浮浪者の街へ……」
あわてて、リラはフィレーナの肩を抱いて支えた。
「うん。こうなりゃ、出たとこ勝負よね……。それに、何か食べなきゃ。せっかくシェイプアップしたところが、萎（しぼ）んじゃうもんね」
「行くといったって、街の中へどう行くっていうの？……ドラの街は城壁に囲まれているのよ。駄目よ。無理よ」
ミリカはかぶりを振り続ける。
「あーら、私達とご一緒するおつもりなんですか？　殺し屋おばさまは……」
リラはミリカをのぞきこんで茶化した。
ミリカは、きっとリラをにらみつけた。
「離れるもんですか。フィレーナを殺してやるまでは、決して離れやしないんだから」
だが、その言葉に、今までのような毒気は感じられなかった。無理もない。ミリカも他の三

人を頼るほか、生き延びる方法は考えられないのだ。
　ミリカの台詞は、懸命の突っ張りだった。
　フィレーナは、ミリカの気持ちを察してフッと微笑した。そんな自分を甘いとも思うのだが……、仕方がないと自分自身を笑うことにした。
　……そういう性格なんだから……、僕は……
　フィレーナは、ミリカに明るく言った。
「ドラの街に行く方法は、ネストさんが、きっと知っているよ。そうでしょ？」
　ネストが頷いて答えた。
「なんでも見通しているんだな……」
「闘技は先を読まなければ勝てない……、でしょ？」
「そういうことさ」
　ネストは懐ろから、蠟燭と紙で作られた地図を取り出した。
「この地図には、下水道の配置図が書かれている」
　ネストは蠟燭に火を点けた。
「蠟燭？……ずいぶん古風なんだ」
　リラが、ネストの手元をのぞき込んで呟いた。
「電気エネルギーを感知されると困るからね」
　フィレーナがネストの代わりに答えた。

「そのとおりだ」
ネストは地図を広げ、
「下水道はまるで迷路だが、上手く辿れば浮き草地区の下に出られる」
「地図を見せられても、僕には見えない」
フィレーナは肩をすくめた。
「任せます。僕らを連れていって下さい」
「よかろう」
ネストは地図をたたむと、フィレーナ達の先頭に立って歩き始めた。
だが、フィレーナはすぐに下水道の中の気配に嫌な予感を感じた。
フィレーナが城壁の下水道から湖へ逃亡したとき、下水道の中は飢えたネズミの群れであふれていた。
だが、その気配が今はすっかり消えうせている。
ネズミがいない。
あれほどたくさんいたネズミの姿が見えない。ということは……。
「みんな、気をつけて……」
フィレーナは剣を構えた。
フィレーナには、下水道に何が起こっているのか見当がついていた。
ネズミが恐れる何かが下水道の中にいて、ネズミの群れは息をひそめて隠れているに違いな

い。
「ネストさん……、僕らとは別の何かが……」
ネストはもう剣を抜いていた。
軍人の家系に生まれ、武器の心得のあるネストだ。
フィレーナが詳しく説明しなくても分かっていた。
「わたしにも何かちょうだい」
リラも、フィレーナが剣を構えれば、何も聞かなくても事態を把握できた。
だが、ドラの街を脱出するとき、出来るだけ身軽になろうとしたフィレーナは、余計な武器は持っていなかった。
「これを使うがいい」
ネストが硝子ナイフをリラに手渡した。
「あのう……、図々しいかもしれませんけど、スペアがあったら、もう一本……、ね……」
「ん？　あることはあるが……」
リラはネストから、もう一本の硝子ナイフを受けとると、ミリカに差し出した。
「はい、これ……」
「えっ？」
戸惑うミリカを、リラはじっと見つめて、
「するでしょ？　あなたも参加……。でも、それでフィレーナを刺しちゃいやだかんね」

ミリカはコクリと頷いた。
「少なくとも、このナイフでは狙わない……」
「了解……」
リラは、人懐っこい笑顔を作った。
ミリカもつられて、思わず笑い返した。

＊

四人は、下水道の中を蠟燭の明かりを頼りに、慎重な足取りで進んでいった。
やがて、四人は排水口が三ツ叉に分かれている場所にやってきた。
真ん中のひときわ大きい排水口は、フィレーナが逃げて来た城壁の堀に繋がる穴だった。
「こっちだ……」
ネストは右側の穴を指した。
そのときだった。
真ん中の排水口の奥が、ボッと赤く燃え上がった。
明らかに、それは火炎放射器の炎だった。
炎はどんどんこちらへ近づいてくる。
「急げ！」
ネストは、いきなりフィレーナを両手で抱きかかえた。

「!!」
フィレーナは、思わず息を飲んだ。
男にはおろか、人にこんなことをされたのは、幼児のころ、闘技指導員のゼナに抱き上げられたとき以来初めてだった。
「アッ」
思わず口をポカンと開けたのは、リラも同じだった。女奴隷だったリラだって、今まであんなことを人にされたことはない。
なのに、男を装っているフィレーナが……。
「よしてくれ、僕は男だ……、一人で歩ける」
フィレーナは、ネストの腕から飛び下りようとした。
「馬鹿！　男も女もあるか。お前は目が見えないんだぞ！」
ネストは、もがくフィレーナを抱いたまま、猛然と浮浪者地区へ通じる右手の下水道を走り出した。
我に返ったリラとミリカは、慌ててネストの後を追って下水道に飛び込んだ。
次の瞬間、今までいた下水道は、あっという間に炎に包まれた。
確かに、まごまごしていたら、たちまち四人は焼き殺されていたはずだった。
「やってられないぜ。昼間っから心は闇だぜ」
炎の後から男の声がした。

炎は、下水道清掃局がネズミ駆除用に使った火炎放射器だった。
火炎放射器を持った清掃員を先頭に、数人の清掃員が殺菌剤を撒きながら、先刻、四人が駆け込んだ穴のあるところへやって来る。
「それに、いくら放射器をぶっ放したって、ネズミ一匹いやしねえや」
「ネズミだって、考えてらあ。今さら、そんなもんで殺られるドジなネズミがいるもんかい」
清掃員は、予定外だった城壁の堀から湖までの下水道のネズミの駆除と消毒を、今朝、いきなり命令され、いささか腹を立てていた。
もちろん、清掃員のほとんどは、この命令が黒い悪魔が陰で指示したものだとは知らなかった。
当然、黒い悪魔の狙いはネズミ駆除ではなく、もっと大きなネズミ……、フィレーナだった。もし、フィレーナの死体が下水道を流れていったなら、必ずこの中のどこかに死体があっていい。
仮に、飢えたネズミに死体を食われたとしても、せめて骨ぐらいは発見できるはずだ。
とはいえ、黒い悪魔達が暗い下水道の中で明かりをつけ、邪魔なネズミを追い払うために火炎放射器など使えば、市民に気づかれる恐れがある。
だから、清掃局を利用し、フィレーナの生死を確かめようとしたのだ。
もちろん、清掃員の一人には黒い悪魔の情報員、正式名、バラバ10がなりすましていた。
バラバ10は火炎放射器で焼かれた下水道をくまなく探したが、人間らしい死体や骨すら見つ

からなかった。

……ここまで来て死体がないとは……。湖まで流されたのか？……

バラバ10は、三つに分かれている下水道を見つめた。

……それとも、他の下水道に紛れ込んだのか？……いや、水の流れは全て湖に向かっている……。死体が水に逆らって街の下水へ入っていくはずがない。しかし……、生きていたとしたら……。馬鹿な。街を脱走しようとした男が、再び街へ戻るなど、さらにあり得ないことだ……

バラバ10は、街へ通じる残り二つの下水道を交互に見つめた。

四人は、右手の下水道の中を走り続けた。

フィレーナは、ネストに抱えられたまま、どうしたら良いのか分からなかった。

体はネストの腕の中で激しく揺れる。

……ずいぶん手荒く運んでくれるな。まるで、力較べの俵レースだ……

……これじゃ、こわれものは運ばせられないな……。あれ？　僕はなんてつまらないことを考えているんだ……

と、フィレーナは思う。

だが、そう思いながら、こんなことでも考えないと辛いのだ。

人からこんな格好で助けられて逃げなければならないなんて……。仮にも闘技士だった僕



男だ……
が……。そりゃ、リラにはずいぶん世話になっている。でも、今、僕を抱きかかえているのは
そこまで思って、フィレーナは、はっと体を硬くした。
ネストに勘づかれては困る。
……僕が女だということを……、なぜ？……僕は、もう今は、男でなければならない闘技士
ではない。女と分かっても構わないよな……。いや、困るんだ……。なぜって……、ともかく
困る！　僕は男として生まれ、育ち、祖国フィロセラを再興するんだ！……
フィレーナは、肘を胸の脇でしっかりと組み、身を硬くした。
出来るだけ胸の膨らみをネストに感じとらせまいとした。
そのとき、ネストの走りが急カーブして止まった。
下水道が曲がり角になっていたのだ。
ネストは放り出すように乱暴にフィレーナを下ろすと、壁に張りついた。
ネストの後を走っていたリラとミリカを、壁に引きずり込むようにして止まらせる。
「静かに！」
低く囁くと、今きた下水道の方を窺った。
清掃員達の持つランプが遠くにぼんやりと見える。
清掃員達に動く気配はない。
どうやら、三ツ叉のところで休憩を取っているらしい。

「勘づかれずに済みそうだぞ」
ネストと同じ言葉を胸の奥で呟いて、フィレーナはフッと息を吐いた。
助かったことも溜め息の理由のひとつだったが、それより、どうやらネストが走ることに夢中で、抱きかかえたフィレーナの性別に気づく余裕はなかったらしい――。
……よかった……。
傍らでは、リラとミリカが荒い息を吐いている。
リラが、手の甲で額の汗をふいて呟いた。
「ん、も、泥まみれ、汗まみれ。サウナより健康にいいことしちゃって。でも、きっと、お化粧がめちゃめちゃ……。暗くてよかった」
ミリカは、そんなリラに少しだけ打ち解けた気分になった。
「これで汗を……」
ミリカは、腰ひもに下げたハンカチを出そうとした。だが、走り出す前にリラから手渡された硝子(クリスタル)ナイフも、そこにはさんだのを忘れてしまっていた。
ハンカチとともに、腰ひもからナイフが飛んだ。
下水道の床に落ちたナイフの柄には、白熱光のスイッチボタンがあった。
スイッチボタンには安全装置がついていて、ただ押しただけでは、殺傷能力を持つほどの白熱光は出なかった。
だが、このナイフの白熱光には別の用途があった。

通常に押したとき、ナイフのクリスタルは懐中電灯程度の光を出し、合図灯の役目を持つのだ。
柄の方から落ちたナイフのスイッチが、床に触れた。
一瞬、光がナイフを走った。
「!!」
ミリカもリラも、思わず声にならない悲鳴をあげた。
素早く、ネストがナイフを拾いあげ、スイッチを切った。
清掃員達の様子を窺う。
別にとりたてて動きはなく、誰も気がついた気配はなかった。
「やはり、女に刃物が似合うのは台所だけなのかな」
ネストは誰に言うでもなくそう呟いて、ナイフをミリカに返した。
ナイフを落としたミリカを咎める言葉は、一言も言わなかった。
「さあ、先を急ごう」
ネストはそれだけ言って、先頭に立って歩き始めた。
だが、左右の下水道を交互に見ていたバラバ10は、左から右へ目を移しかえた一瞬、目の片隅に何かが見えたような気がした。
小さな、小さな光だった。
気のせいかもしれないが、気になって仕方がなかった。

バラバ10は、懐中電灯を右の下水道に向けた。
電灯の明かりだけでは奥まで見通せなかった。
バラバ10は下水道の地図を開いた。
右手の下水道はしばらく行くと曲がり角になり、その先は幾重にも分かれ、ドラ市の地下に迷路のように広がっている。
もし、さっきの光がフィレーナに関係あるとしたら、早く追わなければ見失う危険がある。
「どうした？」
清掃員の一人がバラバ10に声をかけた。
「ん？　いや、こっちの方にネズミが隠れているんじゃないかと思ってね」
「そりゃそうさ。この広い下水道のどっかに、うじゃうじゃネズミが隠れているなんぞは分かっている。そっちの穴にいても不思議はないぜ」
「俺、ちょっと様子を見てくるよ」
「よせやい。俺達が命令されたのは、こっちの下水道だ。余計な仕事をしても追加手当は出ないぜ」
「なら、俺一人で行ってくるよ」
そう言って右手の下水道に入りかけたバラバ10の肩を、清掃員の一人が摑んだ。
「まてよ。上手いこと言って、サボる気だな。そうはさせないぜ」
もう一人の清掃員も頷いた。

「誰だって、下水道掃除なんてご免なんだ。抜け駆けはさせないぜ」
バラバ10はいらだった。
ぐずぐず言い合いをしていれば、見つけられるはずの相手に追いつけないかもしれない。
バラバ10の清掃員を見つめる目から表情が消えた。
「どうしても行かせない気かね」
「当たり前よ。同じ給料、同じ仕事だ」
「そういうことなら……」
バラバ10は、いきなり火炎放射器を持っている清掃員の前に進み出た。
その瞬間、放射器の清掃員の目がカッと見開かれた。声もあげず倒れる。
その胸には短剣が突き立てられていた。
バラバ10は無造作に火炎放射器を摑むと、清掃員達に向けた。
「俺の邪魔する奴は、誰も生きられない。君達は火炎放射器の事故で、全員、焼死することになる」
後ずさりする清掃員の一人が喚いた。
「俺ぁ、邪魔なんかしねぇよ」
「遅い。その台詞はもう通じない。今はこれだ」
いきなり、火炎が下水道を覆い、清掃員達は誰一人として生きていなかった。
バラバ10は、燃え上がる炎の中に放射器を投げ込んだ。

放射器の燃料が爆発する。
バラバ10は顔色一つ変えず、さっき光の見えた右手の下水道に入っていった。

*

ネストを先頭にした四人は、蠟燭の灯だけを頼りに闇の中を進み続けた。
目の見えぬフィレーナは、リラの肩に手を置いて、リラの歩くままについていくよりなかった。
だが、それでもフィレーナは、絶えず周りの空気の感触に気を配っていた。
……もし、このまま一生目が見えなかったら……。いつまでもリラを盲導犬のように使うわけにはいかない……
いつか、目の見えないまま一人歩きしなければならない日が来る。
今から視力のないまま生き抜く訓練をしても遅くはない。
しばらくすると、下水道の澱んだ空気の中を進む四人のかき乱す空気の動きがフィレーナにも分かるような気がしてきた。
動くものの作り出す空気の流れで、相手の位置、大きさを知る……。洞穴の中に住むこうもりは、目が見えなくても自由に飛ぶことができる。
犬や猫は、視力はまるで弱いが、臭いと聴覚で、人間以上に相手の姿形が判断できる。
人間が動物の感覚を持つなんて、無茶な話なのは分かっている。

だが、フィレーナはやる気だった。

……動物にできて、人間である僕に出来ないはずはない。まして、僕は闘技士として、野獣になるように訓練された奴隷だったのだから……

実際、闘技試合で、目の判断力に頼っていては到底間に合わぬ素早い動きを必要とされたのだ。

日常のすべてが闘技試合だと思えば、視力などなくてもやっていけるはずだ。

フィレーナは、そう思い込むことで、目の見えぬもどかしさを打ち払おうとした。

フィレーナは全身の肌を、味覚を知る舌の上のように敏感にし、鼻先をかすめる匂いを頭の中いっぱいに拡大し、かすかな音でもすぐにその方向が分かるように耳をすました。

最初は、下水道の水の流れる音と四人の歩く音しか聞こえなかった。

……だめだ。これでは、目の見える人間と同じじゃないか……

さらに耳をすます。

「元気？」

いきなり、耳元でリラの声がした。

フィレーナは、いきなりつんのめりそうになった。

まるで、大爆発が目の前で起こったような声だ。

「な、なんだよ……、いきなり」

「だって、みんな、黙りこくって歩いているんだもん。本当なら、歌でも歌って元気よく行き

たいところよね」
気がつくと、リラはかなり小さなヒソヒソ声で話していた。
だが、それがとてつもなく大きく聞こえるのは、それだけフィレーナが耳に神経を集中しているからだった。
「下水道の中には誰がいるか分からない。黙っているにこしたことはないさ」
「そりゃ、そうだけど。分かっちゃいるけど……」
「じゃあ、黙って……」
フィレーナは、つっけんどんだった。
一を言えば百は戻ってくるリラのお喋りは、若干、口数の多さに閉口しているとはいえ、決して嫌いではなかったが、今は一人だけの目を使わぬ訓練を邪魔されたくなかった。
リラは肩をすくめると、黙って歩き始めた。
迷路のような下水道の中で、蠟燭の灯だけで道を探し出そうとするネストには無駄口を喋る余裕はなかったし、ミリカも、こんな緊張した情況では、吹き出す汗はあってももらす言葉はなかった。
長い沈黙の中、四人は歩き続けた。
カサッ！　カサッ！
……ん、これは？……
フィレーナは眉をひそめた。

研ぎ澄まされたフィレーナの耳に、水音と足音以外のものが聞こえ出してきたのだ。
それは、四人の着る服の布が擦れる音だった。
……分かる、分かるぞ……
ネストのゆっくりだが、力強い歩みに擦れる布の音はいかにも武骨だ。
リラの柔らかい肌に触れる薄布は、小川のせせらぎのようだ。
汗のせいか、ミリカの布の音はねっとりとじめついている。
そして、僕の服の布は安物のせいか、カサついている気がする。
四人の音は、確かにそれぞれ違っている。
音だけではない。匂いも四人それぞれだ。
一様に、下水道の泥臭さとカビ臭さは持っているものの、昨日今日ついたものではない、深い匂いが感じられるのだ。
ネストは、フィレーナがよく知っている闘技士達の持つ体臭に、アルコールの香りが感じられた。
ネストはここのところ禁酒しているのだが、それでも、フィレーナの鼻は匂いを逃さなかった。
そして、タイプライターのリボンの匂いがほんの少し……。
……最近、あまり書いていないんだな……
仕事より酒が優先する、作家のネストらしい匂いだといえた。

リラの匂いには、甘ずっぱく、若い刺激があり、いくら香水で隠しても、ミリカにはどこか乳臭さがあった。
もちろん、ミリカが子供というわけではない。それは、子供を生んだことのある証拠だった。
そして、なにより痛感したのは、フィレーナ自身が女だということだ。
男として育てられたフィレーナが、どんなに男のように振るまって生きてきたとはいえ、明らかにネストとは違う匂いをしていた。
それは、リラやミリカに共通する匂いだ。
僕は女か……。
フィレーナは、当たり前のことを、改めて認めるしかなかった。
これでは、どんなに見せかけても、目の見えない人の前にフィレーナが立てば、女であるのを見破られてしまうのかもしれない。
目に見えないものは、目を閉じたとき見える。
そんな台詞（せりふ）を、昔、フィレーナは聞いたことがあった。
たしか、今のフィレーナの体験とは違う意味で使われる言葉だと思ったが、その台詞を、今、フィレーナは現実に体で感じている気がした。
そのときだった。
……これは？……
フィレーナは足を止めた。

もう一つの別の匂いが飛び込んで来たのだ。
血のにおい……、そして火炎放射器の燃焼……、焦げた肉……、どれもフィレーナが闘技士として経験した匂いだ。
しかも、匂いは新しい。
その匂いが付いたのは、ほんの少し前だ。そして、その奥に深く滲みついた血の匂いの重なり……。
この匂いの持ち主は、ずいぶん、血を見ている。
フィレーナは、匂いのする方を振り返った。
「どうしたの、フィレーナ」
リラが囁いた。
「シッ！　誰かがいる」
フィレーナが見えない目で睨む方に向かい、三人はそれぞれの武器を構え見た。
蠟燭の灯の届かない闇の中……、三人には何も見えなかった。
だが、フィレーナには確かに見えていた。
いや、感じていた。
誰かのいる位置は、こちらからは見えないだろうが、蠟燭の灯を持つ四人は相手からはまる見えのはずだ。
下水道の空気が揺れた。

そこにいる誰かは、フィレーナ達が立ち止まるのを見て動き始めている。
いったい、何をしているのか。
ビーン――。
フィレーナの耳に、弦の伸びていくような音がゆっくりと聞こえる。
この音は……。
聞いたことがある。いや、闘技士なら、いつも聞いている音だ。
そうか！
フィレーナは、一瞬のうちに音の正体を思い出した。
弓だ！
あいつは弓矢をつがえている！
僕達を撃つ気だ。
フィレーナは、黙ってリラの持っているナイフをもぎとると、いきなり弓の主に向かって投げた。
カシーン――。
乾いた響きが聞こえ、何かが下水に落ちる音がした。
ナイフが弓を弾き落としたことは確かだった。
ヒューッ――。
火の玉のようなものが飛んできて、フィレーナ達の頭上の壁に張りついた。

それは、吸盤で張りついた火薬を使う発火灯だった。
下水道の中が、昼のように明るくなった。
四人の前に、一人の男がゆっくりと姿を現した。
清掃員の服を着た、バラバ10だった。
「やはり生きていたのか、フィレーナ。しかし、黒い悪魔が殺したはずの闘技作家まで生きていようとはな」
バラバ10は、剣を抜きながら無感動な声で言った。
「黒い悪魔か……。それにしては、お馴染みの黒い鎧と兜がないな」
ネストが、フィレーナ達を庇うように進み出て言った。
「お前達に、お馴染みになってもらっては困るのだ」
「そう。お前達は市民には秘密の存在だ。だから、ここでは、鎧兜に仕組まれた電子兵器を派手には使えない。エネルギー反応を地上に感知される危険があるからな。なにしろ、ドラの地下工事はお手軽だ。下水道に沿って連絡回線や電算回線、エネルギーパイプ、ありとあらゆる回線が一緒に放りこまれてあるからな。特に反応しやすい。お前が、エネルギー反応の出ない旧式の発火灯を使うのもそのためだな」
……そこまで考えていたのか……
フィレーナは、ネストの話を聞きながら舌をまいた。
下水道に逃げ込んだのは、黒い悪魔への対策でもあったのだ。

「よくご存知のようだ。こんな地方都市にはもったいない作家だな。だが、電子兵器が使えなくても結果は同じだ」

いきなり、バラバ10は剣を振り上げ、飛びかかってくる。

ガシン！

ネストの剣が、しっかりと受け止めた。

一瞬、バラバ10の顔に動揺が走った。

ネストが、かなりの使い手であることを知ったのだ。

……馬鹿な……、作家が武術を！……確かにこいつは軍人の家系だ……。だが、平和な今の世の中に、軍人だからといって武術に秀でているわけではない……。しかも、こいつはヤワな作家になり下がった男だ……

ネストは、そんなバラバ10の思いを見すかしたようにニヤリと笑った。

「武術とは、人知れず身を鍛えるものだ」

ネストはバラバ10を押し戻すと、鋭い気合で、二度、三度、たて続けに剣を打ち込んだ。

バラバ10もまた、見事にネストの剣を受け止めた。

二人は同時に飛びすさると、互いの顔を睨み合った。

これだけで、二人は互いの実力を知り尽くしていた。

力は互角だ。このままでは、いつまで戦いが続くか分からない。勝敗を決めるのは体力。疲れ果てた方が負ける。

フィレーナも、肌に感じる二人の動きからそれを知った。
時間は刻々とたっていく。
二人は身動きもせず、睨み合いを続けた。
だが、戦いを長びかすわけにはいかないのだ。
ここはドラ市の真下の下水道だ。いつ、なんどき、人が入ってくるかも知れない。
どちらも人に見られては困る存在なのだ。
特に、バラバ10には知られてはならない黒い悪魔という組織がある。
フィレーナにさえ勘づかれなかったら、行き先をつきとめて、支部に報告し、指示を仰ぐつもりだった。
だが、ネストを甘くみたこともあって、思わず戦いを挑んでしまったのだ。
バラバ10は、次第に焦り始めていた。
……突破口を開くには……、相手の動揺を誘う……。ネストの動揺を誘うには……
……連れの三人を……、特に女を……
バラバ10は、いきなり三人に向かって走り出した。
リラかミリカが的だった。
……そう……、そうするに違いない……。僕も、この男なら……
フィレーナは、バラバ10の気持ちは読めていた。
ミリカは後ずさり、リラの足はすくんだ。

フィレーナは、剣を構えた。
フィレーナは、この男とネストの戦いの気配から、まともに戦って勝てる相手ではないのを分かっていた。
おそらく、フィレーナが競技場で戦ったどの闘技士より実力は上だ。
まして、今のフィレーナは目が見えないのだ。
だが、フィレーナは落ち着いていた。
フィレーナは、跳躍靴を使ってジャンプした。
壁の発火灯を、燃える音を頼りに斬った。
宙を飛んだ発火灯は、下水道の中に一瞬、さまざまな影を作り、水の中へ落ちて消えた。
バラバ10は、フィレーナが逃げたと思った。
だから、おざなりに、バラバ10の剣は、フィレーナを追って宙を払った。
フィレーナを斬った手応えはなかったが、おそらく、あのジャンプから見れば、十数メートルは遠くにいるはずだ。
だが、灯の消えた下水道は真っ暗闇で確かめようがない。
それより、目の前には立ちすくんでいるリラがいるはずだ。
確かに気配がある。
バラバ10は剣を振り下ろした。
空を斬った。

「!!」

不審に思う暇もなく、バラバ10の心臓を剣がえぐった。

心臓は止まったが、まだ頭は考える余裕があった。

……いったい、何が起こったのか？……

だが、答えを見つけぬうちに、意識は遠のいていった。

フィレーナは、気配で、バラバ10の心臓はおろか、体の隅々までの死を確認してから言った。

「ネストさん、蠟燭を点けて……。リラとミリカさんは見ない方がいい」

ネストの握る蠟燭が燃え上がった。

フィレーナの剣は、柄までバラバ10の胸を突き通していた。

フィレーナは、宙に飛んだ発火灯の作り出す影に紛れて、リラの目の前に着地したのだ。

目の見えないフィレーナに、自分の姿を影がくらましてくれたかどうか、分かるはずがなかった。

だが、やるしかなかった。

そして、次の瞬間、バラバ10を襲った闇の中で、フィレーナをリラだと思い込んだバラバ10の剣を避け、懐ろに飛び込み、心臓の鼓動めがけて剣を叩き込んだ。

空気の肌触りと匂いと音だけが頼りだった。

だが、闇の中では一番有効な武器だった。

「できるとは思わなかったのに……。本当です……」

フィレーナは肩を落とした。

助かった喜びよりも、視力を失ってすら、人を殺せる力のある自分がやるせなかったのだ。

「お前って奴は……」

ネストは、優しくフィレーナの肩に手を置いた。

それから、バラバ10の死体を見つめて、

「急がなければなるまい。この男をここで殺した以上、黒い悪魔は、我々が生きていることはおろか、ドラ市内にいることも気づくだろう」

「わかっています」

フィレーナはきっぱりと答えた。

そして、剣を盲人の杖代わりにして、一歩一歩、歩き始めた。

まるで、前方の暗闇にたった一人で立ち向かっていくように見えた。

リラが駆け寄った。

「わたしがいるわ。ね、そんなものに頼らなくても、わたしがいるんだから……」

「もち、分かっているよ」

「うん」

リラは、強引に剣をもぎとると、フィレーナの腕を肩にかついだ。

「さ、スクラム組んで、街へ行こ！」

「うん、行こう」

フィレーナは、力強く頷いた。

リラが後ろを振り返って、ネストとミリカに言った。

「さ、みんなも早くぅ……。私、お腹減ってんだから……」

四人をとりまく情況は、さらに悪化していたのに、リラはあくまで明るく振るまっていた。

ネストとミリカには、リラの、そんな笑顔がまぶしかった。

第2章
浮き草の街

バラバ10が下水道で行方不明になったという報告は、ただちに黒い悪魔の司令室に伝えられた。

下水道の中で発見された黒焦げの清掃員達の死体は、明らかに一体足りない。
とすれば、迷路のように入りくんだ下水道のどこかで、バラバ10は死んでいる。
黒い悪魔の規律は厳しい。
定時に報告がないときは、その情報員が死んだことを意味していた。
とすれば……。
バラバ10が探していたフィレーナは生きている。
しかも、バラバ10を殺せるとしたら、到底フィレーナクラスの闘技士では不可能だ……。誰か他の人間か……、もしくは数人の仲間でバラバ10を倒したに違いない。
では、誰なのだ。その仲間は……？
黒い悪魔の上層部はいろめきたった。
もしかしたら、闘技士養成所(バトラー・ファーム)の戦いで生き残ったものがいたのではないか……。そして、そ

の人間達は、この街のどこかに潜入している。
彼らが潜入できるとしたらどこか?……
答えはすぐに出た。
浮き草地区(グラシーナ)——。
だが、浮き草地区に住む帝国人民の浮浪者の数は多い。
その中から、フィレーナとその仲間を探し出すには時間がかかるだろう。その間に、黒い悪魔の噂は街中に知れわたってしまうだろう。
なんとかしなければならない。
上層部は、その日一日中、会議を続けた。

*

浮き草地区のとある狭い横丁——。
そこにあるマンホールの蓋(ふた)が静かに持ち上がり、中から二つの目があたりを窺(うかが)う。
ネストの声がして、マンホールの蓋が開けられた。
「よし、大丈夫だ」
ネストが出て来て、フィレーナの手を持って引きずりあげる。
路上に出たフィレーナは、あたりの気配を感じて身構えた。
人の気配を感じたのだ。

それも一人でなく、かなり多くの数だ。
「気にしなくていい。こいつらは今、人間じゃない」
ネストの言葉にフィレーナは首をひねった。
……人間じゃない？　どういうことなんだ？　気配は確かに人間なのに……
フィレーナに続いてマンホールから首だけ出したリラが、思わず息を飲んだ。
しゃがみ込んだ女が目の前にいて、リラの顔を見つめていた。
「構わんから出ておいで」
ネストの言葉は落ち着いている。
恐る恐る出てきたリラは、横丁を見て目を丸くした。
リラに続いたミリカも、呆然と立ちすくむしかない。
その路地には、無数の人間が建物の壁によりかかり、または路上に倒れ、眠っているように動かないでいた。
「まるで生きていないみたいだ」
フィレーナが呟いた。
「そう、こいつらは生きている死体さ」
リラは、マンホールを見つめている女の顔の前で手をひらひらさせた。
ぼんやりと見開かれた女の目はうつろで、反応を示さない。
「なんか、みなさん、元気がなさすぎるみたい」

「夜になれば起き上がる……、異常なほど元気になってな。今は薬につかれて眠っているだけだ」

「薬？」

そういえば、先刻から、妙にざらついた臭いが鼻につく。

「そう、酒では酔いきれない奴らが飲む麻薬だ。麻薬に体が耐えきれなくなると、こうやって雨風を少しでもしのげる路地で体を休める。そして、また夜になれば、麻薬を求めてさまよいだす」

「家はないの？　これじゃ、奴隷(クレオナ)以下だわ」

リラがネストに聞いた。

「この地区全部が彼らの家なんだ。多分、彼らにも昔は、家も社会的地位も、それなりの付き合いもあったんだろうが、今はすべてを捨てて、この街で薬に溺(おぼ)れながら気ままに暮らしている」

「せっかくの暮らしを捨てて、奴隷並みの生活をするなんて、なんか贅沢(ぜいたく)……」

「そう、贅沢といえば、これほど贅沢な生き方はないだろうな。彼らは、ああ見えても、芸術家だと自分では思い込んでいる」

ネストは路地を歩き始めた。

「ここにいる連中は、画家や音楽家や彫刻家や、ミリカ、君のような踊り子や役者もいる」

「それは奴隷の仕事ですわ」

「そう、奴隷の方がすぐれた仕事をしている。だが、帝国人民の中にも、芸術を作りだしたいと思う連中もいる」
四人は大通りに出た。
体に塗料を塗り付けた一団が、路上で踊り狂っている。
いたるところに、何を描いているのか分からない奇怪な彫刻が置かれている。
建物の壁には、これもまた、さまざまな絵画が描かれている。だが、どれもこれも何が描かれているか分からない、抽象的なものばかりだ。
「見るがいい。薬に酔い切れぬ者は、こうやって芸術をやっている」
「これが芸術?……まるで、子供の遊びね」
さして芸術に詳しいとも思えないリラにすら、一刀両断できる出来だった。
「そう、帝国人民は何もかも、属国人や、奴隷より秀れていなければならないはずだった。だが、芸術だけは、残念ながら、見ての通りだ。美しさも、優しさも、厳しさもない。芸術の中で誇れるものといったら、戦いや暴力に関するものだけだ。それが芸術と呼ばれるものならね」
「闘技とか戦争とか?……」
フィレーナが呟いた。
「そう。だから、闘技演出家や闘技作家は、帝国人民の芸術家として評価される。だが、あとはクズだ……。クズと分かっていても、やりたい奴はいる。才能がなくても芸術をしたい気持

ちだけはある。だが、何も生みだせない。生んだ気持ちになろうとする。それには何かの力を借りるしかない。酒の力では到底追いつけぬ。薬しかない。薬の中の幻しかない。薬の力を借りたとき、もう何も他のことは出来なくなる。ここでは芸術が麻薬で、ここには麻薬しかない」

突然、仮面をつけた女達が建物から飛び出し、踊り出した。

「デビス！　デビス！　デビスに祝福あれ……。神女(ミメ)の踊りをめしあがれ」

口々に歌っている。

ミリカは立ち止まり、食い入るように見つめている。

「どうした？」

ネストがミリカに訊(き)いた。

「あの踊りは？……見たこともない振り付けですわ。それに、あの踊りは決して下手じゃない。踊り子(ダンサー)だった私には分かります」

「奴隷のお前が知るはずもなかろう。あれはデビスの神(ミ)の祝宴の踊りだ。そう、あの踊りが芸術だと呼べるなら、帝国が生み出した唯一の芸術舞踏だな……。あの踊りは、年に数回、三日月の日が近づくと、帝国の女達の間で自然発生する、一種のヒステリーだ。子供を生めぬ処女の間で起こるのだが、いよいよ三日月の日になると、デビス神女団(ミメズ)と称する集団となって街を出ていく。

そして、彼女らなりの順路(ルート)をたどって帝国内をさまようんだ。やがて、彼女達は首都ボーの





街へ辿り着き、神殿の巫女神女になる。巫女になった女は、二度と姿を人前には現さない。文字通り、神の女になる娘達だ。デビスの神女団に加わると決めた女は、仮面をつけ、男に顔を見せない。もっとも、男が見たくもない顔の女が多いだろうがね。帝国人民の女で子供が生めぬというのは、男がいないという意味もある。帝国の男にとって、快楽のためなら、それの得意な奴隷の女がいる」
「おかげで、いろいろ教育されたもんね。教育だけはね……」
リラが頷いた。
「子孫の繁栄のためなら、美しく、しかも体が強く、頭の良い女と結婚した方が良い」
「好きな人とは結婚しないの？　帝国の人は……。ミリカさんみたいに、好きな人と一緒になるなら、命がけで駈け落ちしようとする人はいないの？」
「相手を好きだけで結婚し、子供を生む帝国人民はいない。優生保護学上も、帝国の今後の繁栄のためにも、一定の規準以上の男女でなければ結婚は難しい。禁止した法律はないが、生まれた子供の程度次第で子供の将来も決まってしまう。それは、知的上層階級、知および労的中層階級、身体使用的下層階級だ。軍人の世界でいえば、指令系統幹部生、実戦指揮生、普通兵士の三種類に、生まれたときから分けられてしまう」
「は～あ、帝国人民の人達も、生まれながらに差ァつけられるんだ。楽じゃないのね、人民やるのも」
リラは、妙に同情した。

「そう。だから、生まれてくる子供のことを考えれば、おのずから結婚の相手も決まってくる。それに、結婚は、好きだの愛だのでは長続きせん」

「ネストさんも、そう思っているんですか？」

それまで黙っていたフィレーナが、ぽつりと言った。

「ん？」

ネストはフィレーナを見た。

「いえ、何でもありません。ただ、ネストさんは変わっているから……」

「そう。軍人の家出身が闘技作家……。他の作家になろうとしたら、今ごろ、この街でのたれ死んでいるかもしれん。というより、ここでのたれ死ぬ勇気がないから、闘技作家になったのかもしれん」

「そーいうことじゃなくて、フィレーナの言いたいのはさ……」

リラがわりこんだ。

「分かっている。私は独身主義だ。結婚など考えたこともない。だから、答えられない……」

そこまで言って、ネストはふっと笑った。

「まるで、俺は帝国人民の暮らしを教えている教師のようだな……」

「ほんと。奴隷の私達には関係ない世界なのにねえ……。変なの……。でも、知らないものは、知りたかったりするもん……、でしょ？」

リラが、小首をかしげるような素振りでネストを見た。

「うん、まあな」

ネストは、リラの屈託のなさが好ましかった。

この娘は、帝国人民と奴隷の垣根を、いとも簡単に飛び超えて喋っている。

帝国人民に対する恐れも、まして媚びもない。子供といえば子供だが、それでも接待用女奴隷の教育は受けているはずなのだ。

それが、どうして、これほどのびやかなのか？

ネストは、フィレーナがこの娘と結婚したわけが分かったような気がした。

それとも、普通の女奴隷だったリラを、フィレーナが、こんな好ましい娘に変えてしまったのか？……

少なくとも、この二人は、お互いがいればこそ今まで生きてこれたのだろう。

こんな二人を、どうしても守ってやりたい……、ネストはそう思う自分がおかしかった。

奴隷を守ろうとする帝国人民……、ま、そんな変わり者が一人ぐらいいてもおかしくはなかろう……、とネストは苦笑する。

だが、そんな変わり者を、黒い悪魔は許してはくれない……、それも確かだ。

……次に、悪魔達はどう出てくるのか……。もし、俺の思う通りに奴らが動くとすれば……。

俺は急がねばならない……

ネストは足どりを早めて、フィレーナ達を大通りから横丁へ連れていった。

＊

横丁の建物の入口に、茣蓙をしいて、薄汚れた白衣を着た男が眠っている。無精髭だらけの顔で、年齢はほとんど分からない。

ネストはその男の前に立つと、いきなりその横腹を蹴飛ばした。

リラとミリカは仰天したが、フィレーナはその音で、ネストが手加減して蹴ったのがよく分かった。

「ウグッイッ！　効いたなあ……」

男はぼんやりと目を開けた。

「こうでもせんと目を醒まさんだろ、この薬中毒医者め……」

「ほう、殺し屋作家か……。殺し稼業からも、とうとう見放されて、舞い戻ってきたか……。だが、アル中プラス薬中じゃ、確実、あの世だ。それとも、書くにつまって、自分の死ぬ台本でも書いたのかな」

男は白衣を叩きながら立ち上がった。

白衣の埃が宙を舞う。

「お前、ニュースを見んのか？　この俺がどうなったのか知らんと見えるな」

「最近、ニュースは死人の話ばかり、医者は関係ないのでな」

「その死人が、お前に頼みがあって、地獄から舞い戻って来た」

「死人を治す薬はない。麻薬でも飲んで酔っ払ってろ……」
「治して貰いたいのは俺ではない」
　男は焦点の合わない目で、フィレーナ達を見た。
「二人の女の子は、疲れと空腹、食っちゃ寝で治る。栄養剤なんぞいらない……。もう一人の坊やは……、フーン、時が解決するな。何年か先、目が見えるようになるかもしれんし、ならないかもしれん。毎日毎日、悲しい思いをして涙を流すことだな。いつか涙が毒を洗い流してくれるかもしれん」
　フィレーナは驚いた。
「俺の目が毒のせいだって分かるんですか？　触りもしないで」
「こいつは、こうみえても、昔、帝国医大の医者だったんだ。腕は一応確かだ」
「どうかな？　俺ぁ、助かるはずの患者をずいぶん殺した。闘技士と違って、殺すつもりではなく、助けるつもりで殺しちまうんだから、始末が悪い」
　フィレーナは、男の言葉の中に闘技士の名が出てきたので、一瞬、身構えた。
「あ、あ、硬くならんでよろしい。少なくとも闘技作家のネスト先生と、その昔、この街で薬友達の俺様だ。こいつの手掛けた試合ぐらい見てやるのが友達ってもんさ。ま、最後の試合じゃ、ずいぶん儲けさせてもらったよ。闘技賭博でな。その闘技士が死んだと聞いて、がっかりしたよ。もう、もうけられんと思うとな。この先生が死んだってニュースよりも残念だった」
「知っていたのか？　やはり」

ネストに男はニヤリと笑った。
「闘技新聞だけは読んでいる。賭博の予想に必要でね。のみのフィレーナ。確かにチビだな」
「もう闘技士じゃありません」
「じゃ、のんびりやるんだな……。その目も時が解決してくれる」
「そうもしていられない。キル、話がある」
ネストはキルと呼んだ男の肩を叩き、建物の中へ入っていった。
ほんの一分もたたないうちに二人は出てきた。
医者は先刻とはうってかわった鋭い視線で、フィレーナを見つめた。
「中に入るがいい。君の目を診察しよう」
じっくりと時間をかけてフィレーナの瞳を診察したキルは、一同に言った。
「確かに、このままにしておけば、徐々に視力は回復する。だが、まともに見えるようになるには、少なくとも三年はかかるな」
「三年？……大丈夫よね。我慢できるわよね」
即座にリラが答えた。
長すぎるとは思った。でも、治る見込みがあると分かっただけ、喜ばなくてはならない。
なんだって良い方に考えれば、苦い薬だって甘くなる。
「それでは困る」
ネストが呻くように言った。

「三年間も、フィレーナが連中から逃げおおせるとは思えん。手はないのか？」
「自然に治すのが一番良い。だが、どうしてもというなら、手術する方法がある。だが……」
「だが？　なんです？」
フィレーナが訊き返した。
「失敗すると完全に失明する」
「やって下さい。手術を……」
フィレーナは、きっぱりと言った。
「できるだけ生身にメスは入れたくない」
キルは首をふった。
「自信がないんですか？　そうなんですね」
フィレーナは決めつけた。
キルは、明らかに気分を害したようだった。
フィレーナはさらに続けた。
「だったら、手術なんて言わなきゃいい。自信もないのにできそうなこと言って、患者に責任を被せて失敗を許されようとする。そうなんでしょ、お医者さん」
リラが慌てて止めた。
「ちょっと、フィレーナ。言いすぎとちゃう？　お医者さんを怒らせると恐いわよ。毒でも飲まされたらどうする気」

キルがぽつんとぼやいた。
「この娘の方が言いすぎだ」
ネストがニヤリと笑い、
「ま、もう少し言いすぎをさせて貰うと、薬に溺れるような医者は、相当腕に自信がないんだろうな」
「俺の手術は芸術だ」
「帝国人民の芸術でしょ。フィレーナ、やばいわ。あてになんないわよ、このお医者さん。やめとこ、手術なんて。目の見えないまま闘技試合に出た方が、まだ安全だわ」
リラに、フィレーナも頷いた。
「そ、だね。医者にとって、手術って試合でしょ。勝てる気もない奴は、みじめなだけだ」
「フフフ……」
キルは突然、笑いだした。そして、笑いは大声で爆発した。
「ハハハ。立場がないの。ここまで医者をめちゃくちゃ言う患者も珍しい。よろし、バッサリ、ぶった切ってやろう。覚悟せいよ」
フィレーナは、挑戦を受けた闘技士のような不敵な微笑をうかべ、
「本気ですか？」
「任せるがよい。このメスでな」
キルは埃だらけの机の上からメスを取りだした。

ブルブル手が震えている。
それを見せられ、リラはうろたえた。
「ち、ちょっと、本当に大丈夫。この方、お薬、飲みすぎみたいよ」
リラがフィレーナの耳元で囁いた。
「知っているよ。わし以外、こんな難しい手術ができるのは、帝国広しといえどもおるまい」
「さよう。気配でね。でも、他に頼れる人はいない」
キルは、メスにペッと唾を吐きかけた。
「そーとう、乗りすぎてるわ。本気でやばいわよ、このお医者様……」
「ほう、あれだけ罵詈雑言を並べたてて、今度は逃げ腰かな？」
リラはキルをにらんだ。
「わたしが手術されんなら、受けて立つわよ。でも、フィレーナだもん。フィレーナは一人っかいないんだもん」
「一人っかいないいんだもんなら、なおのこと、目を見開かしてやろう。このわしの手でな」
「お任せします。手術をして下さい」
フィレーナは決めていた。
「あ、あ、突っ張っちゃって……。もう、やだ……、ね、止めましょ」
ネストがリラの肩に手を置いた。
「リラ、この医者は信じていいよ」

「僕もそう思います」
フィレーナも頷いた。
キルは高笑いする。
「ハハハ。決まりだ、決まり。さあ、五年ぶりの大手術じゃ。燃えてきたぞ」
「五年ぶり……」
リラは天を見上げた。
ミリカはフィレーナの視力をなくさせた張本人だけに、肩を落としてうつむいているよりなかった。

＊

手術をすると言ってから、もう数時間が過ぎている。
だが、医者のキルは診察室の隣の部屋にネストとともに入ったきり出てこない。
いつの間にか、外は夕闇が迫っていた。
ときどき、隣の部屋から悲痛な呻き声が聞こえてくる。
何度か隣の部屋の様子を覗こうとしたが、二人は決して部屋に入ってくるなと言い渡されていた。
やがて夜が来て、部屋に明かりが必要になったころ、隣の部屋の扉が開いた。
「さ、フィレーナ君、手術を始めようか……」

リラとミリカは、思わず椅子から転げ落ちそうになった。
そこには、純白の手術服を着た精悍な眼差しのキルが、傷だらけのネストとともに立っていたのだ。
フィレーナ達は、隣の部屋に通された。
そこには、埃一つない手術台が用意されている。
手術用具も光り輝いている。
キルはメスを取り上げて、リラに見せた。
手の震えはまるでない。
「どうかな、娘さん……」
「大変身……。どうゆうわけ？」
「体の麻薬を薬で抜いた。久しぶりに抜いたので、ちと苦労したが、もう大丈夫じゃ。代わりに寿命が十年ほど縮まったかな」
「こちらも、苦しむこいつを押さえつけるので、二十年ほど寿命が縮まったがね。薬中毒で体がボロボロのくせに、体力だけは相当なもんだ」
闘技士養成所でも、下水道の中の戦いでも、傷ひとつつかなかったネストの今の姿を見れば、キルが薬を抜くときの苦しみ方、暴れ方は、凄まじいものだったろう。
リラは、もう何も言えなくなって、たった一言言った。
「すいません……」

ネストとキルは、互いの顔を見合って微笑した。
ネストはそれから、フッと息を吐いて、
「フィレーナ、私はこれからやらなければならぬことがある。これで別れかもしれない」
「えっ？　どっか行っちゃうの？」
リラが呆気にとられて訊いた。
「君達のことはキルに頼んでおいた。万事、上手くやってくれるだろう」
「ネストさん、やらなきゃいけないことって……、あいつらですか？」
「そう、あいつらだ。次に奴らがどんな手でくるか？　お前なら見当はついているね」
確かに、やりかねないことの見当はついていた。それをくいとめるとなると……、フィレーナは真剣な口調で、
「無茶はしないで下さい」
「無茶でもやらなければならん。助かるためにはな」
「でも、僕らのために、帝国人民のネストさんが……」
ネストはさえぎった。
「お前のためだけではない。これはもう、俺の戦いでもある。そして、キルの戦いでもあるんだ」
「さよう」
キルは頷いた。

「わしは付属病院に勤めていた。だが、あそこは助かるはずの者が死ぬ。助けるつもりだった者が殺されてしまう。心筋梗塞(こうそく)で入院してきた者が、わしが調べると水虫しか病気を持っていなかった。水虫は確かに不治の病だ。だが、水虫では人は死なん。それでも患者は死んだ。病名通り、心筋梗塞でな。それが、あの病院では多すぎた。助かる命は助けたい。それが医者だ。あの病院では、それがままならない。何かがある。だが、それは言えない。言えば、私が心筋梗塞であの世行きだ。あそこで助かるはずの人の命が消えていくのを見続けるより、薬に溺れたことにして、この街の浮き草(デラシーナ)どものクズな命でも、助かる者は助けた方がいい。そのうち、俺自身も薬にやられてしまったがな。なんで、こんなに才能ある男が、こんな落ちた街で医者をやらにゃいかんのかってな。だが、それ以上に、あの病院は耐えられなかった。それもこれも、あいつらが牛耳(ぎゅうじ)っているからだ……。あいつらは、人の命を救う医学をコケにしてやがる。許せんのだ。許せんといっても、俺の出来るのは、お前さんを治すぐらいのことだがね……。ま、ささやかな抵抗かな……」

「そう。そのささやかな突っ張りに出かけるとしよう」

ネストは出て行こうとした。

「ネストさん」

フィレーナが呼び止めた。

「も一度、顔を見たいな」

「それなら、お前は目を治すことだけ考えろ……。じゃあな」

フィレーナは、ネストの消えていく気配を、じっと胸の奥に刻みつけようとした。

もし手術に失敗して、一生目が見えなくなっても、いつかどこかでネストとすれ違ったとき、すぐにあの男だと分かるように……。気軽に、やあ、元気でしたか？　と話しかけられるように……。

なぜって……。ネストは、妻のリラの他では、フィレーナが初めて信頼出来るな、と感じた人間だったから……。その人間が、同じ奴隷ではなく、帝国人民なのは不思議といえないことはないのだが……。

「あいつは変わっとるのさ」

キルが、ネストが閉めた入口の扉を見つめながら言った。

「軍人の名門に生まれたあいつは、学力、体力、ともに抜群だった。将来、軍をしょって立つ人材だと嘱望されていた。だが、何を血迷ったのか、政治家の家柄の娘に恋をした。別に政治家が悪いわけじゃない。ただ、その一家の子供達は変わっていた。よくある話だが、親が一流だと、子供はプレッシャーを感じて親の職業に反撥するもんだ。だが、その子供達は極端だった。兄は闘技演出家を目指し、妹は画家を目指した。兄はいい。闘技は、帝国人民でも才能をふるえる唯一の芸術だからな。だが、妹はそうはいかない。帝国人民の女の描く絵など、たかが知れている。もともと才能がないのに、女は絵に夢中になってしまった。そんな女を好きになったネストは、女に才能がないのを知っているから、なおさら悲惨だ。ご多分にもれず、女はこの街に入り浸りだした。あいつも、この街に女を追ってやってきた。だが、女が薬に溺

れていくのを黙って見つめているしかなかった。才能のない者が才能のある振りをするのは何より辛い。女の苦しさを、あいつはよく分かっていた。だから、『お前には才能がある』と女を励まし続けた。やがて、女は薬でボロボロになって死んだ。ネストがまだ十代のころの話だ」

「暗いんだ、あのおじさん……」

リラが呟いた。

「そういう一言で切られては元も子もないのう……。全く、最近の若い者は、奴隷も人民も同じじゃ……。何事も一言で片をつけちまう」

「ごめんなさい」

リラは真面目に詫びた。

「ま、いい。そういう時代じゃ。とにかく、女の死を見とったあいつは、この浮き草地区から出て行った。気がついたら、あいつは芸術家になっていた。闘技作家という名のな。女の兄の演出家と組んで、少なくともこのドラでは一流になった」

「その演出家はバラバ……！」

フィレーナは訊くでもなく呟いた。

「ま、そういう名だったかもしれんな」

「きっと……」

突然、ミリカは口を開いた。

「バラバも、その妹を愛していたんだわ」

「えっ？」

フィレーナはミリカの方を向いた。

「だから、ネストと協力しながらも、いつも張り合っていたのよ。死んだ妹を、恋人を、闘技を借りて奪い合っていたんだわ。わたしにはよく分かるわ。わたしの夫は、そんな下らない二人の張り合いに捲き込まれて殺されたんだわ！」

ミリカは怒りで体を震わせた。

「僕にはよく分からない。何があったにしろ、今は、今さ……」

「フーン、奴隷と違って、帝国人民やってると、いろいろ繋がりがあるのね」

リラはなかば呆れていた。奴隷の方が、よほどあっさりしていて分かりやすいと思うのだ。

「そういうのは繋がりとは呼ばず、しがらみという。あいつは、帝国人民が芸術という分野で唯一、一流になれる闘技作家になることで、女が持っていた、本物の芸術家になる夢を、自分の力で実現しようとしたのかもしれん。ま、出身のまま、軍人になっていたら、今ごろ、この地区の軍司令官ぐらいにはなっていただろうがね。もっとも、司令官になったらなったで、あいつのことだ、何かをやらかして、俺の病院で心筋梗塞になって、とっくに死んでいたかもしれんがね。どっちに転ぼうと、結果は今と同じかもしれん。おかげで、俺はめったにない大手術をしなければならん」

リラは不安でたまらない。

「そんな大手術なんですか？」

「場所が場所だけにな。ただ、叩っ切るだけでいいというわけにはいかん」
「とにかく、お願いします」
フィレーナは手術台に横たわった。
フィレーナには、それも闘技試合かもしれなかった。
ただし、自分は何もすることがない試合。生きるも死ぬも相手に任せっぱなしの試合……。
フィレーナにとって初めての試合だった。

*

黒い悪魔は、長い会議の後、遂に結論を出した。
黒い悪魔の存在が露見するよりも、根こそぎ将来の禍根を絶ち切ってしまおう。
すなわち、浮き草地区全体の爆破――。
浮き草地区に住む者は、確かに帝国人民だ。だが、最下級、いや、階級づけすら出来ない、芸術家を気取る浮浪者だ。
市庁にとっても、働かぬ浮浪者救済金は馬鹿にならぬ額だ。いわば、消えてくれれば大助かりの地区なのだ。
だが、表向きは、あくまで事故でなくてはならない。
ことが明るみに出れば、現帝国支配者に不満を持つ者の火に油を注ぐことになる。
同じ帝国人民の大量殺戮は、さすがに黒い悪魔としても簡単には決定しきれなかった。

しかし、決まったとなれば行動は早い。

浮き草地区の地下道に大量のエネルギーを流出させ、火をつける。

下水道やエネルギーパイプの設計がずさんなドラ市では、起こっても不思議はない事故だし、事実、建設庁には、ドラ市の地下の危険性を訴えた陳情書がいくつも提出されている。

事故の責任は、都市地下管理局の役人の何人かの首が飛べばすむだろう。

深夜、都市地下管理局の業務が終わったのを待って、バラバ9の率いる黒い悪魔の五人は下水道に降りると、浮き草地区の地下に向かった。

浮き草地区の地下に来た黒い悪魔達は、下水道の壁を掘り、エネルギーパイプを剥き出しにして、下水道にエネルギーを流出させた。

一時間後には、浮き草地区の地下には、エネルギーが充満するはずだ。そして、時限装置で大爆発が起こり、他地区には被害を与えず、浮き草地区だけが粉みじんに空に吹き上げられるはずだ。

周到な計算が立てられ、まず失敗は考えられなかった。

だが、爆発は一時間後ではなかった。

エネルギーが地下に流出して、わずか十分もたたないうちに起こったのだ。

そのとき、作業を指示していたバラバ9は、剥き出しになったエネルギーパイプに向かって飛んでいく白熱光を見た。その光は、明らかに、白熱砲から発射されたものだった。

しかし、いったい、誰が……。

そこまで思ったとき、バラバ9の意識はなくなっていた。
それは、バラバ9だけではなかった。
予想もしない早い爆発に、地下にいた黒い悪魔五人は逃げられなかった。
そして、恐らく白熱砲を撃った本人も……。
爆発で吹き出した汚水の激流にのまれ、白熱砲を持った男の影は押し流されていった。
さらに、爆発はエネルギーを誘爆し、下水道を粉みじんに吹き飛ばした。
だが、十分足らずのエネルギーの流出は、とても地上を吹き飛ばす力はなかった。
地上は、かなり激しい地面の揺れを感じたものの、被害といえば、浮き草地区のマンホールの蓋のすべてがところ構わず宙を飛び回ったのと、逆流した下水道の汚水で路上に寝ていた薬物中毒者が何人か溺れかけただけだった。
爆発が起きたとき、フィレーナの手術は終わっていた。
フィレーナは麻酔でこんこんと眠っていて、爆発にまるで気づかなかった。
フィレーナは夢を見ていた。
それは、どこまでも広がる青さ、泡立つ波、ゆったりと揺れる浮遊感……、フィレーナのふる里、まだ見ぬフィロセラの海に抱かれる夢だった。
目が見えなくとも、フィレーナの脳裏には、目の見えた時よりもはっきりと海が見えていた。
……僕にこの海がある限り……
もし、このまま目が見えないままでも良いとさえ思えた。

白熱砲を撃った男……、それは、いうまでもなくネストだった。

＊

黒い悪魔が、あくまでフィレーナやネスト達を抹殺するつもりなら、浮き草地区全体を消すだろう。

なにしろ、わずかな人数を殺すために、奴隷養成所のすべてを灰にした連中だ。

たとえ帝国人民の住む浮き草地区であろうとも、同じことをやりかねない。

ならば、先手を取るよりない。

爆発を止めさせるのではなく、爆発を最小限に、しかし目立つ程度には起こさせる。

これで、市当局は蜂の巣をつっついたような騒ぎになり、原因を究明するだろう。

そして、事故対策に必死になるはずだ。

もし、同じ事故が浮き草地区で二度起こるようなことになれば、それこそ、浮き草地区の住民は不審を抱くだろう。誰かが浮き草地区を消そうとしているのではないかと……。

下手をすれば、暴動すら起きかねない。

となれば、黒い悪魔も二度目はやらないだろう。

やろうにも、エネルギーパイプと下水道は、修復まで数カ月かかるはずだ。

そして、ネストの思い通りにことは運んだのだ。

汚水に飲まれていく影だけを残して、ドラの街でネストの姿を見る者は誰もいなかった。

＊

黒い悪魔の上層部に、困惑の色は隠せなかった。
「わずか一日の間に、バラバ兵団の二人を失い、作業に携わった五人も生存の見込みはない。いったい、フィレーナとは何なのだ」
「もはや、浮き草地区を一撃で消滅させる作戦は使えません。こうなれば、残された方法は、バラバ兵団のみならず、ドラ支部の黒い悪魔のすべてを投入してでも、浮き草地区からフィレーナとその一味を探り出すしかありますまい」
「フィレーナの一味というが、いったい、何人いるというのだ」
「さあ。しかし、数は不明でも、徹底的にやるしかありません。中央本部に知られぬうちに処理しなければ、どうなるとお思いです？」
「分かっている。ドラが地方都市でよかった。もし、中央に近ければ、今ごろ、お前もわしも生きてはいまい」
「私は、もう、自爆装置を体に着けております」
「わしも……、とっくにだよ」
上層部の間に自嘲的なふくみ笑いが、低く流れた。
彼らにとって、まだ、フィレーナという名は、取るに足らなかった。
全帝国の黒い悪魔を統率する中央本部、その失敗を許さない規律こそ、脅威だったのだ。

第3章
ドラからの脱出

浮き草地区の地下で何が起こったのか、フィレーナは何も知らぬまま、一日中、麻酔のせいで眠り続けた。
傷つき疲れ果てた体は、深い眠りの中で、みるみる回復していった。
やがて目覚めたとき、キルが包帯を取り替えてから、フィレーナの肩を叩いた。
「よし、俺の腕は、まだまだ鈍っちゃいないようだ……」
フィレーナは、目を覆った包帯に手をやった。
「確かに痛みはないけれど、まだ何も見えません」
「当たり前だ。人形の目じゃあるまいし、生身の体だ。目が醒めたからって、パッチリとはいかん。いいか、その包帯は後、一カ月は取ってはならん。それまで我慢するんだ。もしも、その間に、お前の目ん玉に光が入れば、そのまま一生失明だ。分かったな」
「一カ月……、あと一カ月も……」
思わず肩を落とすフィレーナに、リラが、
「たった一カ月じゃん。一生、目が見えないことを思えば楽なもんよ……、ね」

「普通ならそうだけど……。でも……、ここに長居は出来ないよ」
キルは頷いた。
「そういうことだな……。この三日間、奴らにこの場所が分からなかっただけでも幸運といわねばならん」
「そうよね。これ以上、おじさんに迷惑はかけられないもんね」
リラが、珍しく殊勝に言った。
「これ以上もこれ以下も、迷惑は最初からだ。俺とて、引き返すわけにはいかん。俺もいずれ、奴らに目をつけられる」
「でも、私達が、今のうちにここを出れば……。おじ様だけは気づかれずにすむかもしれないわ」
キルはリラに首を振った。
「いや、奴らはそんなに甘くない。ネストと俺の繋がりはすぐ知れる。そして、俺は、二、三日もしないうちに行方不明になる。永久にな……。だから、その前に、お前達をこの街から逃がしてやらねばならん」
「どうやってこの街から？」
「俺には無理だが、お前達なら逃げられるかもしれん。これをつけるがよい」
キルは、机の上に三つの仮面を出した。
それは動物を形どった仮面だった。

「犬に狐に狼……。とりあえず、こんなものしか手に入らなかったがね。好きなものを選ぶがいい」

リラは狐の仮面を取りあげてかぶり、鏡に映してみた。

「派手ね。顔を隠すにしたって、こんなのをつけたら、かえって目立ちすぎないかしら」

「目立っていいんだ。それから、フィレーナ、お前も女の服を着ることだな」

「女の服？　僕、そんなの着たことないよ」

「着たことがないから着るんだ。小柄なお前だ。どこから見ても女に見える。この俺じゃ、女装して仮面をつけても、到底女には見えんがな」

「そんなあ！　フィレーナを女になんかに化けさせてどうするの？」

リラは、フィレーナが女であるのを忘れたような口ぶりだ。

「今夜は三日月の夜だ。街で神女どもの祭りが始まる。そして女どもは、踊りながらドラの街から出て、都のボーへ向かって長い旅に出る。まるで、海に落ちるまで行進を止めない動物達レミングの群れのようにな。女どもは、神に捧げる顔を男に見られぬよう、仮面をつける。市民も、その顔を見ようとはしない。上手くいけば、女達に紛れて街の外に出られる」

「でも、僕は神女の踊りなんか踊れない。第一、見たこともないよ」

フィレーナは、この街で女達の踊りの気配は感じていたが、どんな踊りか、見当もつかなかった。

まして、闘技士のフィレーナは、並の踊りすら経験がなかった。

「わたしが教えてあげますわ」
　それまで黙っていたミリカが言った。
「えっ？」
　フィレーナとリラは、ミリカの言葉が意外だった。
「もしも、あなたが私を信じるのならですけれど……。でも、もしかしたら、いい加減に教えて、失敗させ、奴らの目に止まりやすくするかもね……」
　リラが口をとんがらかした。
「なによ、今の言い方。そんな意地悪を言うんだったら、教えてくれるなんて言わなきゃいいでしょ。いいわよ。あたしだってね、踊りにゃ自信があるわ。フィレーナには、私が教えてあげます」
「あなたには無理ね」
　ミリカは、キッパリと言った。
「あの踊りは普通じゃないわ。何かにとりつかれたような、そう、まるで月にとりつかれたような恐ろしい踊り……、普通の神経の人が、ただ真似るだけではとても出来そうにない踊りなの。私は専門の踊り子だから、分かるけれど……」
「そうかもしれないな」
　フィレーナはぽつりと呟いた。
「確かに、あの踊りの気配は、いつものリラの踊りとは違うような気がする」

「踊りは踊りよ。問題はリズム感！」
リラがつっぱる。
だが、フィレーナは、ミリカに向き直って言った。
「お願いします。僕は目が見えない。おまけに踊りも知らない。頼れるのは、リラとミリカさんしかいません」
……フィレーナがそう言うのなら……
リラは、もう、何も言えなかった。
確かに、味方は一人より二人いた方が良い。
ミリカはフィレーナを見つめ返した。
「あなたがいなければ、今、私が生きているかどうかも分からない。あなたが憎いから、そう思うことで生き抜こうと思っていたわ。私が生き抜くためにも、あなたにも生きていて欲しいの」
……ずいぶん、回りくどいお喋りだな……。助けるなら助けると素直に言えばいいのに……
リラは、そう思った。そしてまた、そんな言い方しかできないミリカを、少しだけかわいそうにも思うのだった。
キルが咳払いした。
「さあ、そうと決まれば、着換えだ。女の衣装は隣の部屋に用意してある」
「ええ、でも……」

フィレーナは戸惑った。
いうまでもなく、キルの前で着換えをすれば、女であるのが分かってしまう。
キルはニヤリと笑った。
「覗きはせんよ。男が男の着換えを見ても、面白くもなんともない。それに、仮面をかぶるとはいえ、指先や足は化粧をしておいた方がいい。リラさん、お前が手伝ってやれ」
「了解……」
リラは、フィレーナを押し込むようにして隣の部屋に入った。
数分して、隣の部屋から、狼の仮面をつけた女がリラと一緒に出てきた。
ミリカは目を見張った。
頭の先から爪先まで、まさに女そのものが立っていた。
「この人がフィレーナ？」
「ああ、僕さ……。なんだか変な気分だ。腰のあたりが落ち着かない」
「無理もないわ。あなた、今まで男だったんだから……」
リラがクスリと笑った。
「そりゃそうだけどさあ……」
フィレーナは、見えない目で服の裾がもつれるように歩いた。
その格好に、リラとミリカは思わず吹き出した。
大股で、腰が低く、要するに男の歩き方なのだ。

リラは天を仰いで、
「あいた！　駄目だ、こりゃ……」
リラはフィレーナの肩を叩いた。
「ね、あなた、女なんだから、女らしく歩きなさい」
リラは、このからかい言葉に、少しだけスリルを感じて言った。
……だって、フィレーナは本当に女の子だもんね……
確かに、フィレーナの体は女そのままだった。
ふっくらと膨らんだ胸のあたりも自然だった。ミリカは、それが不思議だ。
フィレーナの胸元にいくミリカの視線を感じたリラは、慌てて言った。
「詰め物、海綿。フィレーナの胸じゃ、叩いたって腫れやしないもんね。それより、歩き方を何とかしなきゃ……。特訓、特訓！」
リラはフィレーナを隣の部屋に押し込んだ。
「わたしも手伝うわ」
立ち上がるミリカに、キルが言った。
「あんたは、フィレーナの女修行より、神女達の踊りをよく見ておいた方がいいんじゃないか？　女の歩きもろくに出来ないフィレーナに踊りを教えるんだ。しかも、時間はほとんど残っていない。夜はもうすぐ来る」
「そうして、お願い」

リラが、隣の部屋から首を出して言った。
「分かったわ。こんなときは手分けしてやらなければ……。キルさん、踊りはどこで見ればいいかしら」
「そろそろ、女達は路上に溢れているころだ。ここを一歩出れば、どこでも。そこが女達の踊り場だ」
キルが戸口を開いた。
確かに、そこに女達がいた。
それぞれ、動物の仮面をつけ、身を捩らすようにして踊っている。
音楽はどこにも流れていないのに、まるで夢遊病のように、目に見えぬ何かに導かれるようにして踊っている。
ミリカは、その動きをじっと見つめた。
その動きには、一定のリズムが感じられなかった。リズムは感じないが、何か不気味なエネルギーのようなものは感じた。
結婚を、そして人を愛することも諦めて、神に身を捧げようとする女達――。
ミリカは、女達にいいしれぬ恐怖を感じた。
隣の部屋では、リラがフィレーナに、足の出し方を教えていた。
「根本的にね、女は内股で歩くわけ。内股ですり合わせるようにね」
「そんなことをしたら、いざってときに腰砕けになって、敵にやられちゃうよ」

「闘技やるんじゃないのよ。女やるの。いきなり抱かれたら、なよって、倒れるようじゃなきゃ駄目。ただでさえ、あんた、頑丈に出来てんだから」
「なよっとね」
「そう。力を抜いて、たとえば、私が男で、あなたを抱くとするでしょ。女はね、体をあずけちゃうのよ」
リラはフィレーナを抱いた。
「こうかい」
フィレーナは体の力を抜いた。
「そうそう。それが女の基本。女って、抱かれやすいようにできてんの」
「なんだか、頼りないな。女って、こんなに頼りない気持ちでいるのかい？」
「そう。女は頼りないもの。だから、抱かれていたいわけ……。男は抱きたい、女は抱かれたい生き物なの、うん……」
リラは、妙に納得したように頷いた。
フィレーナは肩をすくめた。
「僕は抱きたくも、抱かれたくもない」
リラは、親が子を叱るように睨んだ。
「メッ！　半端じゃ駄目。あんた、女なんだから」
「そりゃ分かってるけどさ……。なんか、僕、情けねえなあ……」

「僕も駄目。わたしか私、あたいはちと下品……。いい、胡坐も足組みも止めた方がいいわ。足はキッチリと揃えてね」

リラの口数の多さで、ますますフィレーナは落ち込んでしまう。

「僕がわたしかい……。ほんと、分かっちゃいるけどさあ……」

……もともと女の僕が女をやるのが、こんなにみじめったらしい気持ちになるとは思ってもみなかった……

「あんたは女、忘れないで！」

リラがフィレーナを抱きしめて、強く言った。

まるで、今の姿は、リラが男で、フィレーナがかよわい乙女のようだった。

……男であるのがバレても困る。女であるのが分かっても困る……。じゃあ、いったい、僕は何なんだ？……

フィレーナは首をひねりながらも、少なくとも、ここ数日は女である努力をしなければと、しぶしぶ観念した。

夜がやって来た。

三つの三日月が浮き草地区を照らしている。

女達のすすり泣くような声が聞こえ、やがて、それはかん高い叫び声に変わり、歌声のようになった。

「デビス、デビス、デビスに祝福あれ。神女の踊りを召し上がれ」
街角や横丁で踊っていた仮面の女達が動き出した。
動き出しても踊り続けてる。
上半身と下半身が、まるで別々のような感じだ。
「いよいよ始まったな」
キルが呟いた。
「さあ、ここで別れだ。もう会うこともあるまい……。ま、最後に、出来の良い手術がやれたことでよしとせねばな」
フィレーナは訊いた。
「キルさんは、これからどうするつもりです？」
「奴らがわしを見逃せば、何年か後、街の路上で、薬を飲みすぎてのたれ死んでる俺が見つかるだろう。そうでなければ、二、三日の命……。ま、病院で心筋梗塞で死ぬ心配だけはなさそうだ」
キルは微笑した。
そして、フィレーナに囁いた。
「お前は、今の格好で女として生きれるなら、その方が良いと思う。せっかく助けた目だ。奴らと戦って、ろくに光も見ずに早死にされるのは残念だからな」
フィレーナは、見えない目でキルを見据えた。

「キルさん、あなたは……、僕が……」

キルは人指し指を唇にあて、黙れという合図をした。

「俺は医者だ。目だけを手術したとはいえ、患者がどんな人間だか、体を見なくても分かる。なぜ隠すのか、そのわけは知らんし、聞こうとも思わん。ただ、奴らと戦う以上、ほってはおけなかっただけだ」

「キルさん……」

キルは懐ろから袋を出した。

キラキラとしたクリスタルの貨幣がいくつも入っていた。

「これだけあれば、当分、金には困らんだろう」

「そんな、何から何まで……」

「それは、ネストから貰ったお前の手術代だよ。完治するまでは俺の責任だ。だが、このままでは、最後までお前達の責任をとれそうにない。それに、俺が持っていても、使いようのない金だ。気兼ねはいらん」

キルは、金の袋をフィレーナに押しつけるようにした。

だが、フィレーナは受け取れなかった。

「だったら、リラさんに渡しておくよ。リラさん、黙って受け取るんだ」

キルはリラに金の袋を渡した。

「どうしよう」

戸惑うリラに、フィレーナは何と言っていいか分からず、言葉に詰まった。
もし、フィレーナ達がキルの前に姿を現さなければ、事件に巻き込まれずに済んだのだ。
そして、キルは今、自分の死を確信している。
キルは、フィレーナの気持ちを見透かしたように言った。
「俺が好きでやったことだ。気にすることはない。俺もネストも同じだよ」
そして、もう一度言った。
「気にすることはない。さ、早く行け。おじさんは、もう若い連中の相手はくたびれた」
そして、後ろ髪をひかれる想いのフィレーナ達を追い出すようにして外に出し、扉を閉じた。
そして、浴びるように麻薬を飲んだ。
キルは、自分の体が、もう薬に冒され、再起不能なことを知っていた。
フィレーナを治した手術は、キルにとって、振り搾った最後の力だったのだ。

＊

仮面をつけたフィレーナ達は、女達に揉まれるようにして、浮き草地区の出口に来た。
女達の数は、ざっと見渡しても、数百人を越えている。
そこからドラの城壁まで、女達の列は踊り続けた。
「デビス、デビス、デビスに祝福あれ。神女の踊りを召し上がれ」
ミリカは、巧みに女達の踊りを真似ていた。

フィレーナにも、最初は手とり足とりして教えようとしたが、女達の数があまりに多く、その人混みの中ではとても無理だった。
事実、フィレーナは、踊る群れに押されて歩いているようなものだった。
踊りを教えるのを諦めたミリカは、リラの力を借りることにした。
二人は、フィレーナを囲むようにして踊りまくった。
二人の動きで、フィレーナの踊りの鈍さをカモフラージュしようとしたのだ。
やがて、二人の動きの気配から、フィレーナも踊りを真似し始めた。
両手を上げるときは両手を、腰を振るときは腰。
「いいわ。その調子……」
リラが耳元で囁く。
「そうか？　これでいいのかい？」
だが、フィレーナの目が見えていて、自分の踊りをもし鏡で見たら、開いた目を再び閉じたくなっただろう。
それほど不様でぎごちなかった。
女達の数が多いから、目立たなかっただけといっていい。
それに、女達の踊りにリズム感がなく、一見、それぞれがてんでんばらばらに踊っているように見えるから、まだましだった。
しかし、ミリカもリラも、フィレーナに踊りのひどさをいうつもりはなかった。

いっても仕方がなかった。
気にすればするほど、かえって踊りがぎごちなくなるのは目に見えていたからだ。
むしろ、このまま、上手く踊っているといって、自信を持たせた方がましだと思った。
だが、それでごまかせるときは長く続かなかった。
女達の列は、ドラの城壁にやって来た。
城壁の前で、警備兵達が検問している。
警備兵の中の一人は、先刻からじっと女達の踊りを見つめていた。
その男は、黒い悪魔のバラバ兵団の一人、バラバ7だった。
彼らも、浮き草地区の神女団の踊りは、目をつけていた。
もしも、フィレーナという男が生きていて、浮き草地区から抜け出し、ドラ市の外へ脱出しようとしたら、この女達の群れに紛れ込む可能性は十分にあった。
資料によるフィレーナの身長や体重で、女装すれば、はたから見れば女と見えぬはずはない。
だが、神女団の仮面を取ることは、どんな市民であれ、禁じられている。
女達の行列の中から、仮面を取らずに、男を見つけ出すのは難しかった。
もし、間違いでもして、本物の女の仮面を剝ぎでもすれば大騒ぎになる。
デビスの神殿に捧げられる女達だけに、その情報はただちに黒い悪魔の本部に伝わるだろう。
ドラ支部としては、失敗は許されなかった。

だとすれば、女達の中からフィレーナを見つけ出すのは、人間が四、五人しか通れない、狭い城壁の門の検問しかなかった。

とはいえ、神女団の検問はほとんどフリーパスといっていい。

神女達は着のみ着のままで、たいした物を街の外には持ち出さないし、持っていても、わずかな金銭だけだ。

唯一心配なのは奴隷の脱走だが、城壁までの道はしっかり警備されていて、脱走した奴が紛れ込む隙もない。

だいいち、奴隷達の中で、デビス人民の神女団の存在を知っている者すら少ないはずなのだ。

浮き草地区は、ドラ市民にとって恥部だったし、神女団の女達は、口では神聖なものとされていても、結局は結婚出来ない女達のヒステリー集団で、一般市民はあまり付き合いたい存在ではなかった。

仮に、女達の間で、市外に持ち出しが禁じられている武器類を持つ者がいたとしても、城門の探武器機が鳴り出すはずだった。

また、フィレーナが女達の中に紛れ込んでいたとしても、探武器機に感知されるような武器を身につけているはずもなかった。

だから、もし、紛れ込んでいるとしたら、それを見つけ出すのはバラバ兵団達の目しかない。

検問の兵の数は十数人。黒い悪魔達の何人もが紛れ込める数でもない。

まして、黒い悪魔達のほとんどが、今、浮き草地区に潜入して、秘密裏にフィレーナを捜し

ているのだ。

そちら側からの情報の方が、はるかに発見の可能性が強い。

それでも、バラバ7はじっと女達に目を光らせていた。

女達は踊りながらバラバ7の前を、三、四人ずつ並んで通り過ぎていく。

探武器機(アームセンサー)は、もちろん何の反応も示さない。

ときおり音がするのは、金銭探知機(マネーセンサー)だが、それも、女達が金の袋を警備兵に見せれば、すぐに通される。

やがて長かった女達の行列も残り少なくなった。

だが——。バラバ7の目が女達の列に釘(くぎ)づけになった。

……あれは？……

それは三人の女達だった。

狼と犬と狐の面をかぶった女達……。しかし、この女達の踊りは、どこか他の女達と違っていた。

形振(なりふ)り構わず踊り狂っている女達の中で、どこか乗り切れていない気がしたのだ。

踊りにはさほど興味のないバラバ7でも、この三人の踊りは妙だった。

……犬と狐の踊りはともかく、中央にいる狼の踊りはなんだ？　まるでぎこちなく、他の女にあるエネルギーのようなものが感じられない。いやいや、踊っているようなのだ。

神女団の女達に、踊りを嫌な女がいるはずがない。

そう思えば、犬と狐の踊りも、どこか変に思えた。
まるで、狼の下手さをカバーするように、無理に派手に動いているような気がする。
なぜ、そんなことをしなければならないのか？
踊れない女を守る……。バラバ7は、じっと狼の踊りを見据えた。
……踊れない……。なぜだ？……それは男だから……。そうか……、そうに違いない……
そのとき、金銭探知機が鳴った。
狐が警備兵に肩を叩かれる。
三人は踊りを止めた。
狐は懐ろから金の袋を出して、警備兵に見せた。
警備兵は頷いて、金の袋を狐に戻した。
狼は、狐と犬の間で立ちつくしている。
バラバ7は、狼の仮面に近寄っていった。
……この仮面の下は男だ……。しかし、もし違っていたら……。他に男を確かめる方法はあるか？……
バラバ7は、狼がフィレーナだった場合の反撃に注意して、剣に手をやり、狼の後ろに立った。
フィレーナは、バラバ7の気配に気づいていた。その手に剣が握られているだろうことも分かっていた。

だが、動かなかった。

後ろの男に、明確な殺気が感じられなかったからだ。

……この男はためらっている。何をためらっているのか？　少なくとも、今は僕を殺すより、別の何かを狙（ねら）っている。仮面か……、仮面を剝いで、僕の顔を見たら……。いくら女に見えても、異様さが分かるだろう。そして、僕を殺す。僕には応戦する武器がない……

フィレーナは、狐の仮面をつけたリラから金の袋を調べた警備兵の位置を、気配で確かめた。

警備兵の持つ剣を奪うしかない。

それも、後ろの男が警戒している今ではなく、仮面を剝いだその瞬間の間隙（かんげき）をつくよりない。

バラバ7は、フィレーナの後ろから声をかけた。

「女……」

……さあ、来るぞ……

フィレーナは振り返った。

バラバの手が伸びて来る。

だが、それは仮面にではなかった。

いきなり、フィレーナの衿元（えりもと）に手を突っ込み、胸元をまさぐったのだ。

……な、何を……

フィレーナは呆然と立ちすくんだ。

どうしていいか分からず、身を硬くしているよりなかった。

胸に男の指の感触がまとわりつく。
「うっ」
思わず、フィレーナの口から呻き声が洩れた。
……こんなときは、どうすればいいんだ。どう対応したらいいんだ……
「キャーッ!」
リラが、フィレーナの代わりに悲鳴をあげた。
「なにすんのよ、この人に!」
リラがわめいた。
……この感触は、やはり女だったか……
パラバ7は、フィレーナの胸元から手を出すと、照れ臭そうに笑った。
「いや、すまなかった。あまりきれいな胸元だったので……、つい、な、ま、勘弁、勘弁」
警備兵達の下卑た笑いが起こった。
「顔は見てはいけないが、体は触っていいってわけか……」
「なるほど、確かに決まりはない。なら、俺はここだ」
警備兵の一人が、ペロリとリラの尻に触った。
「キャーッ!」
リラは飛び上がると、いきなり警備兵の頬を叩いた。
「なんだと思ってんのよ。わたしは、あんた達にそんなことされるような奴隷じゃないのよ。

神殿に体を捧げる乙女なんですからね。舐めると承知しないわよ」
「おおこわ！……ま、悪く思わんでくれ。冗談だよ、冗談。はい、次の女の人達……」
警備兵達は、話題を替えてごまかした。
「失礼しちゃうわ」
リラはプリプリ怒りながら、フィレーナの肩を抱いた。
そして、バラバ7に狐の仮面をすりつけるようにしてわめいた。
「この人はうぶなんですからね。ほら、怖がって声も出ないじゃない」
「悪かった。これで何かうまい物でも食ってくれ」
バラバ7は懐ろから水晶貨幣を一粒出して、リラに渡した。
リラは、手の平の水晶貨幣をしげしげと見つめ、
「フーン、そういうことなら……。よろし、今日のところは勘弁してあげるわ、といっても、二度とこの街には帰っちゃ来ませんけどね」
「あんたのようなジャジャ馬に乗り込まれるんじゃ、神殿の神官様も苦労することだろう」
バラバ7も冗談めかして言った。
なるべくこの件は、穏やかに話を終わらせたかった。
……なにしろ、狼の仮面をつけた神女は、確かに女だったのだ。闘技士のフィレーナであるはずがない……
バラバ7は、念の為に、犬の仮面の女にも声をかけた。

「さ、後ろがつかえている。早く行きなさい」
「ええ、お金まで頂いて、かえって申し訳なかったみたいで……」
ミリカが答えた。
女の声に違いなかった。
少なくとも、狐や狼の仮面より、丸みのある大人の女を感じた。
狐の仮面はプイと横を向いた。
「お礼、言うことないわよ。さ、行きましょう」
狐と犬の仮面は、両側からよろける狼の仮面を支えるようにして歩き始めた。
パラバ7は、その後ろ姿を見つめながら思った。
……たかが、胸を触られたぐらいで、あんなにショックを受けるとは、今どき珍しいうぶな女だ……
そして、すぐにこの三人のことは忘れて、まだ続いている女の列の中からフィレーナを捜すことにした。
当然、何も見つけ出せはしなかった。

*

フィレーナは、確かにうぶな女かもしれなかった。
リラとミリカに両肩を抱えられ、歩きながら、かすかに膝（ひざ）が震えているのを感じた。

未だに男の指が胸にこびりついている気がした。
吐き気のする嫌な気分だった。
……女は、男に抱かれると、いつもこんな気分になるのか……。だったら、女なんて、願い下げだな。やっぱ、僕には男が似合ってる……。でも、もし、僕が女でなかったら、あの検問を通り抜けられなかったはずだ……。皮肉なもんだな……。まっ、僕が男だったら、胸を触れたって、どうってことないわけだし……、そうさ、気にしないことにしよう……
そう思いながらも、フィレーナの気持ちは複雑だった。
フィレーナの傍らで、ミリカが呟いた。
「でも……」
「えっ？」
「あの人、どうして、あなたを男だって気づかなかったのかしら」
「う、うん」
答えに困ったフィレーナに、リラが代わって、
「あの人も、女をあんまり知らないんじゃない。柔らかければ、詰め物も本物も区別つかないなんてさ」
そして、すぐに話題を変えた。
「けど、わたし、人民のほっぺた叩いたの初めて。当たり前だけどさ……。奴隷(クレチア)がそんなことしたら、ぶっ殺されちゃうもんね。それが、〝あんた達に、そんなことされるような奴隷じゃ

ないんですからね〃なんて言っちゃって、自分でも、よく言うよって思ったけど、うん……。気持ちいい。役者よねえ、最高！……」

「僕らは奴隷じゃないさ。もう二度とね」

フィレーナは、キッパリと言った。

「そう、そうなのよね」

ミリカが、しみじみ頷いた。

「奴隷じゃないかもしれないけど、それ以下かもしれない」

リラが答えた。

「ま、暗くならない、暗くならない。ともかくドラの街とは、おさらば出来たんだし、皆さんに混じって踊っていりゃ、そのうち、なんとかなるわよ。さ、踊ろ。踊らないと目立っちゃうわ」

リラは踊り出した。

ミリカも肩をすくめてから踊り出す。

踊っていれば、くよくよ考えている暇はなかった。

＊

神女団の行列は、一晩中、踊り続けた。

そして、夜が白みかけたころ、街道で、そのまま野宿することになった。

いつの間にか、女達は三十人ほどのグループに分かれ、火を囲んで固まった。
だが、互いに名前も訊かず、ろくに口も利かなかった。
ただ、いくら人民に素顔を見せてはならないとはいえ、眠るときと食べるときは、そうもいかない。
そのために、野宿の間は順番で見張りが立つことになる。
別に誰が決めたわけでもない。彼女達の暗黙の了解らしかった。
「見張りは誰がやります？」
女達の一人が、ぽつりと呟く。
すると、何人かが立ち上がって、火の前にいって坐り込むのだ。
それがその日の見張りで、次の日は別の女達が自発的に見張りを買って出る。
フィレーナ達のグループでは、最初にリラとフィレーナが進み出た。
まだドラの街からそう離れていないし、追手が現れないとも限らない。
それよりなにより、フィレーナは仮面を外したくなかった。
ミリカには明日の見張りを頼むことにして、今日は休んでもらうことにした。
これから先、旅は長い。
さまざまな街を、村を通り、各地で乗物を利用しても、ボーに辿り着くまで一年以上かかるという。
少なくとも、フィレーナの目が完全に見えるという一カ月後までは、リラとミリカのうち一

人は、見張りとして起きていなければ不安だった。

＊

陽の光は、もう真上にあり、正午も近いというのに、まだ女達は眠り続けている。
ミリカも疲れ果てたのか、泥のようになって眠りこけている。
焚火(たきび)の前で、フィレーナとリラは仮面をつけたまま見張りを続けていた。
フィレーナがミリカの寝息を聞きながら、言った。
「いつまでも隠しておけないね」
「えっ？」
「僕が女ってこと。一緒にいれば、いつか分かる。それに、ミリカさんに知っておいてもらった方がいいかもしれないな。あの人に、今さら隠しておいても意味ないもんな」
「駄目！　それはいけないもん」
即座にリラが答えた。
フィレーナは、リラがきっぱりと言いきったのが意外だった。
「どうしてだい？」
「もし、フィレーナが女だと知ったら、ミリカさん、あなたをどう思う？　夫のフィコスさんを殺した闘技士が同性の女だと知ったら、ミリカさん、どう変わるか分かんないわよ。せっかく収まりかけているあなたへの憎しみが、また火、ついちゃうかも……。いいえ、絶対、燃え

ちゃうわ」
「どうして、男と女で、そう違っちゃうんだい。殺したには違いないのに……」
「あんた、本当に女を知らないんだから……。相当、教育が必要よね。いい、わたしだってね、自分が一番、愛している者を奪っちゃったのが女だったら、頭に来るだけじゃ済まないわ」
「そんなもんかな」
「あのね、例えば、フィレーナがわたし以外の女の人を妻なんかにしたら、たまんないわよ。そりゃね、フィレーナが誰か男の人を見つけて、その人の奥さんにでもなるのなら、納得するかもよ。けど、けど、他の女にだけは、やだもん。だから……だから……、いい？　あんたが女だってこと、他の人に知られても、ミリカさんだけには知られちゃだめ」
「そんなこと、出来るかなあ……」
「できなくても、するの！　理屈じゃないの。女ってのはね……」
「確かに理屈じゃないかもな……。うん、女ってね……」
フィレーナは自分がたよりなくて仕方がなかった。
そのときだった。背後に人の気配がした。
フィレーナは、素早く振り返った。
「誰？」
リラも振り返る。
街道の傍らの木陰に、黒猫の面をかぶった女が立っていた。



リラが立ち上がって訊いた。
「どなたです？　あなた」
黒猫の女は木の陰から姿を現した。
「まるで、あなた達、後ろに目があるみたいね」
女は、二人の前の焚火に手をかざした。
「わたし、向こうのグループの見張りをしているの。退屈だったから、他のグループの様子を見に来たのよ」
女は、フィレーナ達のグループの女達の寝顔をチラリと窺って、
フィレーナは、出来るだけ女言葉を意識して言ってみた。
「別に異状ないみたいね」
「はい、私達がちゃんと見張っておりますから」
「そう、しっかりね。さ、わたしはわたしの持ち場に帰りましょう」
女はそう言うと、後ろも見ずに帰っていった。
リラはキョトンとフィレーナを見つめてから、パチンと指を鳴らして、
「あなた、結構、いけるじゃん、女の子の言葉……。上等、上等……」
だが、フィレーナはそれには答えず言った。
「僕が、あの人がいるのに気づいたのを知らせなきゃ良かったかもな」
「えっ？」

「あの人の服の中で、かすかな音がした。多分、アクセサリーが何かとぶつかった音だけど……」
「何の音……」
「かなり細い硝子（クリスタル）の針のようだった」
「針？　女ですもの、縫い物の道具を持っていても、不思議じゃないわ」
「かもしれない。でも、女の人には縫い物用でも、闘技士にとっては違う。武器さ。それも、探武器機（アームセンサー）に感知されないぐらい小さい、立派に人を殺せる武器さ」
リラは、不安げに女の帰っていった方向を見つめた。
フィレーナは、リラの不安が手に取るように感じられた。
だから、気遣いさせぬように慌てて言った。
「いや、きっと思い過ごしさ」
だが、フィレーナの危険に対する感度はとぎすまされていた。

*

午後になり、女達が起き始めた。
再び、踊りながらの旅が続いた。
街道の途中で、一行はドラ市と食品産地を結ぶ食品輸送車のキャラバンに出会い、便乗した。
なにしろ、百輛（りょう）を超えるキャラバンだ。数百人の神女団（ミメーズ）を運ぶのも、ものの数ではなかっ

た。

神女団は、いわば聖地へ向かう巡礼の群れともいえる。

便乗を頼まれれば、よほどのことがない限り断れないのが、帝国のしきたりになっていた。

輸送車は平原を猛速で突っ走り、夜には山間部に入っていた。

高度が上がるにつれて、山の冷気が身に滲(し)みてくる。

そう考えてみれば、フィレーナが闘技士になった初夏から、すでに秋をすぎ、季節は冬になっている。

帝国の北部にあたるドラ地方の冬は長い。

ドラ市の中ではさして気にならない季節の変化も、山の中ともなると、ひしひしと感じられてくる。

だが、輸送車の中でも踊り続ける女達にとっては、その肌寒さも感じられないようだった。

やがて、輸送車の旅商(キャラバン)は巨大なモータープール（駐車地区）に入った。

そこには、運転手や地区の人民に顔を見られては困る神女団のために、神女団用の巨大な宿舎がいくつも備え付けられていた。

フィレーナは、昼間から黒猫の女が気になっていたが、輸送車では別の車輛だったし、宿舎も違っていた。

フィレーナ達の前に、女の姿は現れなかった。

……やはり、思いすごしか……

その夜はフィレーナも、うつらうつらだが、眠ることが出来た。
もちろん、それでも仮面は取らなかった。
女達は踊りには熱狂するが、他人にはほとんど無関心で、仮面をつけて寝ているフィレーナを奇妙とも思わないらしかった。
……だが、だとすると……、昼に黒猫の女がフィレーナ達のグループに見せた関心は、何だったのだろうか……
夜中に、時々、人の気配で目を醒ますフィレーナは、それが、寝返りをうつ女の仕草だったり、洗面所に行く女達であるのを確認しながらも、黒猫の女が頭から離れなかった。
その日は何も起こらなかった。
見張りをしてくれたミリカも、怪しい人間は見かけなかった、と言った。
次の日も、一日中、輸送車の旅は続いた。
相変わらず女達は、単調に踊りを続けている。
女達は、ただ踊っているだけで幸福だった。
やがて、輸送車の群れは山奥の寒村に入ると、女達を降ろし、街道を通って本来の目的地へ向かっていった。
寒村は、数人の老婆達が世捨て人のように住んでいた。
老婆の一人が、女達に告げた。
「神女団（ミメズ）は、ただボーの神殿に辿（たど）り着くだけではならないのじゃ。神の巫女（みこ）たらん者は、それ

なりの試練を受けねばならぬ。楽な街道を使う道ではなく、この山脈を歩いて乗り越えねばならぬ。山脈の向こうには海があり、さらにさらに試練の旅が待ち受けておるじゃろう。が、それを乗り越えた者に、デビス神殿の栄光ある巫女の座が待っているのじゃ……」

話を聞き終えたリラが、フィレーナに囁いた。

「なんか、ずいぶん、最初に聞いた話と違うじゃん。要するに、踊りまくっているだけの楽な旅じゃなさそうよね」

「帝国のやってることって、いつも話通りにいきゃしないよ。考えてみりゃ、こんだけの数の女の人が帝国中から神殿に行ってごらんよ。いくら大きな神殿でも、女の人が溢れちゃうさ」

「要するに、人減らしをするわけか……」

「多分ね。でも、僕らにとっては好都合さ。人目につく街道じゃなく、山道を行くんだからね。そのうち、霧に紛れてこの人達からも逃げられるかもしれない」

「そうよね。お別れは早い方がいいわ。わたし、同じ踊りばっかで、いい加減頭がおかしくなりそうだもん」

リラはコツコツと頭を叩いて首を振った。

その夜、寒村で一夜を明かした女達は、次の日から山道を歩くことになった。

数百人分の食料は、一人一人に用意されており、それぞれが肩に背負って行くことになっていた。

「食べ物は七日分ありまする。七日で山脈の中ほどまでいけば、そこに村があり、そこでま

た食べ物を手に入れ、旅を続けるがよろしい。では、神女団にデビスの祝福があらんことを……」

老婆の声に送り出され、

「デビス、デビス、デビスに祝福あれ！　神女の踊りを召し上がれ！」

歌声を張りあげて踊りながら、山道を登っていった女達も、昼を過ぎるころには、さすがに疲れ、歌も踊りも次第に少なくなっていった。

ドラ市を出てから四日目の夜がきた。

山道ではくたびれ果てた女達が、ぼろ切れのように転がって眠っている。

見張りを立てているグループは、もうほとんどない。

確かに、この山奥では、見張りを立てようと立てまいと人に会うこともなさそうだった。

だが、それ以上に、浮き草地区の麻薬で興奮を煽りたてて踊りまくっていた女達の薬が切れ、エネルギーが枯れ果てたという方が正しかったかもしれない。

だが、フィレーナ達だけは、その夜も、見張りを怠らぬつもりだった。

今日の見張りはリラだった。

本当はミリカの番だったが、疲れの激しいミリカを見兼ねて、リラが代わったのだった。

ミリカは見張りをすると言い張ったが、

「最年長者には長持ちしてもらわなきゃ……。若いモンに任せなさい」

リリは譲らなかった。

結局、ミリカが折れてこうなったのだが、リラは欠伸とも溜め息ともつかぬ息を吐いた。

……あ～あ、変に突っ張んなきゃ良かったな。眠いもんは眠い……。睡眠不足は美容の敵だしね……

リラは、チョッピリ後悔していた。

リラは、重くなる瞼を何度もまばたきしながら、焚火を見つめた。

夜が来てから、どれほど時間が経っただろう。

樹木に覆われた山道では、空を見上げても星すら見えない。時間の流れを忘れたようでさえある。

眠い——。

しかも、焚火のほかは何も見えない闇だ。

自分が目を開けているのかどうかも分からなくなっていた。

見張りを続けているつもりのリラは、しかし、いつの間にか、坐ったまままゆっくりと船を漕いでいた。

フィレーナだけは、身を横たえてこそいたが、神経だけは研ぎ澄ましていた。

リラの居眠りには気づいていたが、何も言わなかった。

……リラだって疲れている……。そっとしとこう……

そのときだった。

「ん？」

フィレーナは耳を澄ました。
遠くで物音がしたのだ。
誰かが、こちらに近づいて来る足音だ。
足音が止まった。
そのとたんだった。
ヒュッ！
空気を切るような音がして、何かが宙を飛んだ。
……しまった……
フィレーナは唇をかんだ。
リラの坐っている方で、ピチッという、肉に突き刺さるような音がした。
かすかにリラの体が動いたような気配があった。
飛んできた何かが、リラに突き刺さった。
……それも小さな何かが……。いったい、何が……
フィレーナには思いあたりがあった。
それは、
……針……、武器としての針……、毒針……、リラが！……
フィレーナは飛び起きようとした。
だが、すぐにその気持ちを抑えた。

リラの気配に乱れがなかったからだ。

……寝息が変わらない――、ということは、リラに突き刺さったものは、リラの命まで奪うものではない――。今、飛び出しても、刺さった針が戻るわけでもない。だったら、今は、リラに針を放った誰かの出方を見極めるべきだ……

足音は、リラへ近づいていった。

リラの仮面の外れる音がした。

「チッ！」

女の小さな舌打ちが聞こえた。

女は黒猫の仮面をしていた。

黒猫の女はリラの仮面を元に戻すと、フィレーナ達の寝ている方へ目をやった。

暗くてよく見えない。

黒猫の女は、焚火から火の点いた枝を取り出した。

そして、ゆっくりとフィレーナの方へ近づいていった。

懐ろから針を取り出す。

それは、一時的に脳から思考力を取り去る針だった。

針を刺された者は、その間、全く意識がなくなるのだ。

針を抜いて意識が戻っても、その間のことは憶えていない。時が経ったことすら感じられないのだ。針の刺さった傷も痛みもないのだ。

それは、黒い悪魔の情報部員がスパイ活動によく使用する武器だった。
この黒猫の女は、バラバ兵団の一人、バラバ8だった。
神女団にフィレーナが紛れ込む可能性を感じて、黒い悪魔がとった手段は、城壁にいたバラバ7だけではなかったのだ。
あらかじめ神女団にバラバ8を忍び込ませ、もしフィレーナが紛れ込んでいれば、神女団ごと抹殺（まっさつ）するつもりだった。
なぜなら、神女団の中にフィレーナの仲間がいるかもしれないし、その人数も不明だからだ。
黒猫の女は、数百人の神女達を一人一人、確認していった。
だが、それぞれのグループの見張り女だけは仮面をつけていて分からない。しかし、一日ずつ見張りは交代していく。二、三日で全員の顔は分かるはずだった。
だが、輸送車の旅で神女達のグループが分乗したためと、泊まった神女の宿舎が幾棟もあったため、予想以上に確認に時間がかかってしまったのだ。
そして今、やっと、フィレーナ達のグループに、仮面の中をまだ見たことのない女達がいるのに気づいた。
最初の日の狐と狼――。
だが、さっきの見張りの狐の仮面は女だった。
残る狼は？……
燃える枝の明かりがあるものの、周りは暗い。焚火の傍らのリラを狙ったように、針を投げ

るわけにはいかなかった。
黒猫の女は狼の仮面の位置を確かめると、その首筋に針を突き立てようとした。
とたんに、フィレーナは寝返りをうった。そして、黒猫の女の足を払った。
黒猫の女は針をどこにも刺せず、隣に眠っているミリカの上に倒れた。
「キャー！」
ミリカが悲鳴をあげる。
黒猫の手から火のついた枝が落ち、他の女の服を焦がした。
ギャーッ！
どんなに疲れて眠っていても、熱いものは熱い。
服を焦がされた女の悲鳴は、けたたましかった。
しかも、何も見えない闇の中だ。
眠っていた他の女達にも恐怖の悲鳴は広がり、たちまちあたりはパニック状態になった。
こうなっては手のつけようがない。
黒猫の女は慌てて、その場から逃げ出した。
リラの首筋に突き立てた針を取り戻すのが精いっぱいだった。
リラはすぐに意識を取り戻したが、目の前の女達の騒ぎがなんなのか分かるはずもなかった。
「あの針の音がした女は、やっぱり黒い悪魔だ」
女達の騒ぎの中で、フィレーナはリラとミリカに告げた。

「黒猫の仮面？……」
　リラはすぐに、最初の日に二人の後ろに現れた女を思い出した。
「どんな仮面なのか、僕は見えないけれどね。多分、あいつは、僕の仮面の下を確かめに来たんだ」
「で、ばれちゃったの？」
「いや、すぐにこの騒ぎだ。そこまでは分からなかったと思う。でも、必ず明日の夜には確かめに来るさ」
「明日の夜まで？」
「それまでに何とかしなきゃ……」
「今すぐ逃げましょ。闇の中の大騒ぎでちょうどいいわ」
　ミリカは二人の手を握って駆け出そうとした。
「いや、今は人の中にいた方がいい。山の中で三人だけでいたら、逃げ出したと分かってしまう。ここはまだ、人里からあんまり離れていないもん、すぐ摑まっちゃうよ」
「じゃあ、どうすればいいっていうの？」
　ミリカが、じれたように言った。
「分かんない……。救いは、まだ、あいつが、僕をフィレーナだと確かめていないことだけどね」
「どうして分かるの？」

リラが訊いた。

「あいつは、最初、針でリラを狙った。それは殺すためのものじゃない。勘づかれずに仮面の下の顔を見るために使ったんだ。そして、僕にも針を使おうとした。僕がフィレーナだってこと確かめたかったんだ。ってことは、あいつらは、僕が神女団に紛れ込んでいることさえ、正確には知っていないと思うんだ」

だが、フィレーナの推理は甘かった。

バラバ8は、フィレーナに足を払われた瞬間、その衝撃に技術的なものを感じた。

……あの寝返りは、偶然の無意識のものではない……

バラバ8は女で、男の黒い悪魔ほど格闘技は強くなかったが、スパイ技術には自信があった。

格闘技に関しても、知識だけは豊富だ。

……あの足払いは、格闘技の心得のある者が意識的にやったことだ……。神女団の中に、そんな女がいるはずがない……。顔を見なくても、体を覗かなくても……、あいつはフィレーナだ……

バラバ8は確信した。

そして、狼の仮面の足払いが意識的だとしたら、フィレーナもこちらの存在を知っている。

ならば、やることは——。山を降りて連絡を取るか、山の中で神女団ごと抹殺するかだ。

どちらを取るか、バラバ8の心は一瞬揺れた。

すぐに、バラバ8は抹殺を選んだ。

フィレーナもこちらを知っている以上、時間を与えれば逃げられる危険がある。
そう判断したのだ。
もし、バラバ8がフィレーナの体を見て女だと確認していたら、連絡の道を取ったかもしれなかった。
だが、足払いだけで狼の仮面をフィレーナだと直感したバラバ8は、フィレーナを女装した男だと信じて疑わなかったのだ。
神女団を先回りするため、バラバ8は夜の闇の中を走った。
そして、山道の先にある谷川にかかる大きな鉄製の吊り橋に出た。
もし、神女団にフィレーナが忍び込んでいたら、神女団ごと抹殺するために、バラバ8が予定していた橋だった。
橋の下は千メートルを越す深い谷になっていて、神女団が渡る途中で橋を落とせば、まず助かる見込みがなかった。
万が一、虫の息で助かっても、そのときは、救助隊に忍び込んだ黒い悪魔達が息の根を止めればいい。
もちろん、吊り橋を落とすのに、爆破のような手荒な真似はしない。
あくまで事故に見せかけるのだ。
バラバ8は、仮面の裏側から粘土の固まりのような物を出し、吊り橋の柱に貼りつけた。
一瞬、粘土の固まりは赤く光った。

さびのような色あいの赤さだった。その赤さは、鈍く光りながら、すぐに橋全体に走った。

やがて光は消え、吊り橋は元の鉄製そのままの姿に戻った。

……これでいい……

バラバ8はほくそ笑んだ。

……あとは、この金属疲弊剤(メタルウィーカー)を特殊針で刺せば、この橋は金属疲労を起こしたように、橋を支える一番弱い場所から崩れ落ちるだろう……

バラバ8の持っていた粘土風の物質は、金属と融合して金属疲労を早める性質があった。

この時代の金属は強化され、滅多(めった)に鉄のような弱い金属は使われなくなっていた。兜(かぶと)や鎧(よろい)などは、特に強い合金が使われる。この世界では、剣など、さらに強さが必要とされるものは、硝子(クリスタル)が使われた。

それでも、鉄がこの橋で使われていたのは、山奥で滅多に使われない橋であり、鉄は最も安く、経済的な金属だったからだ。

バラバ8の持っている金属疲弊剤(メタルウィーカー)は、もともと金属疲労などほとんど起こさなくなったこの時代の金属に、わずか二、三年で疲労を起こさせ、破壊活動や暗殺を事故に見せかけるためのものだった。

例えば、最新鋭の戦車が一カ月も経たずに金属疲労を起こせば、誰もが奇妙に思うが、二、三年後なら、戦車の欠陥ということにもなる。

だが、そんな金属疲弊剤でも、鉄のように脆(もろ)い金属なら、一時間も経たずに疲労させること

が出来るのだ。

そして、特殊針の先の管から出る刺激剤で、鉄は一番弱い部分で弾け飛ぶ。

バラバは作業を終えると、何喰わぬ顔で、まだパニック状態で騒がしい女達の中へ戻り、そのときを待つことにした。

第4章

さすらいの山脈

女達の騒ぎは朝まで続いた。
騒ぎが治まったとき、女達は、何が理由でパニック状態になったか理解しているものはいなかった。
服を焦がされた女ですら、すぐに火を消した後、悲鳴をあげ騒ぎまくっていたものだから、服に火がついたことも忘れていた。
女達は我に返ると、疲れ果てた足を引きずるようにそれぞれの仮面をつけ、食料を持って山道をのろのろと上り始めた。
フィレーナとリラは、素知らぬふりで列の前の方を歩いていた。
後ろから黒猫の仮面が窺っていることは、十分、分かっていた。
だが、黒猫も見張られていた。
犬の仮面に……。ミリカだった。
最初の日にバラバ8に素顔の寝顔を見られているミリカは、比較的、マークされていなかったのだ。

おまけに、ありふれた犬の面は、他の家畜の中でも一番多かった。
最初の日と昨夜だけ、フィレーナのいるグループを調べたバラバ8は、三人が一緒にいるところさえ、ろくに見ていなかったのだ。

*

やがて前方に巨大な吊(つ)り橋(ばし)が見えてきた。
吊り橋といっても、幅は二十メートル近くある。一見、頑丈(がんじょう)そうな鉄の橋は、揺れる気配もない。
女達は、何のためらいもなく橋を渡り始めた。
研ぎ澄まされたフィレーナの感覚も、いつも鉄の吊り橋を渡り慣れているなら感触の違いに気づいたかもしれないが、初めての今は比較のしようもない。
こんなものかと思うしかなかった。
まだ、橋の上に乗っていない女達の後部で、ミリカは黒猫の歩みが次第に遅くなっているのに気が付いた。
どんどん遅くなり、ついに最後部になった。
……あの女は、何かを企んでいる……
ミリカは女の群れから離れ、橋を支える柱の陰に隠れ、黒猫の様子を窺った。
黒猫の女を残して女達は橋の上に乗った。

女達の前は、まだ、向こう側まで辿り着いていない。
……今だ……
黒猫の女――バラバ8は、特殊針を抜くと、金属疲弊剤を貼り付けたところに走っていった。
そこは、橋の柱の陰でもあった。
そこにはミリカがいた。
……あの女がこっちへ走って来る。ということは、ここに何かがある。ここは橋の柱……
ミリカの頭に瞬間、浮かんだのは、
……爆破！　この橋を……
ミリカには、金属疲弊剤など分かるはずもなかった。
だが、黒猫の女がこの橋に何かしようとしていることは分かった。
……それも、あんなに急いで……。爆破はすぐだわ！……
ミリカはとっさに叫んだ。
「みんな！」
バラバ8は呆然と立ちすくんだ。
さらにミリカは絶叫し、手を振った。
「戻れ！　みんな戻って来い！」
橋の上の女達は振り返った。
フィレーナの研ぎ澄まされた耳に、たとえミリカから離れた女達の前方にいたとはいえ、そ

の声が聞こえぬはずがなかった。
フィレーナは両手を広げ叫んだ。
「みんな、戻れ！　この橋は崩れる。リラ！　みんなを戻すんだ！」
「うん！」
リラも叫んだ。
「みんな早く！　橋が崩れるわ！」
何がなんだか分からなかったが、二人の剣幕に押され、女達は、今来た方向へ走り出した。
前方の女達は、橋を渡り切った方が早いのに後ろに走った。
全員が動き出したための集団本能だった。
リラとフィレーナも後ろへ走った。
もちろん、二人には前進した方が早いのは分かっていた。
だが、後ろにはミリカが残っていた。
……ミリカを放っておけない！……
その気持ちが、後ろに足を走らせたのだ。

ミリカとバラバ8は、一瞬睨み合った。
バラバ8は焦っていた。
……早くしないと、橋から逃げられてしまう……

だが、金属疲弊剤を背にして、ミリカは立っている。
バラバ8は、いきなり特殊針をミリカの首に突き立てた。
刺激剤しか入っていない針だ。毒としての効果は少なく、即死は期待出来ない。針一本で倒せる首の後ろの急所を狙う余裕もなかった。
ミリカは悲鳴をあげ、よろめいた。
今だ!
バラバ8は、針をミリカから抜くと、金属疲弊剤に針を突き立てようとした。
その瞬間、前のめりに倒れる。
ミリカが体当たりしたのだ。
二人の仮面が飛んだ。だが、互いの顔など見ている余裕はなかった。
二人は、上になり下になりしてもつれ合った。
ミリカの踊りで鍛えた体は、意外に強靭だった。
ミリカがバラバ8の上になった。
ミリカは懐ろからカプセルのようなものを取り出した。
バラバ8も、特殊針で下からミリカの胸を刺す。
ミリカは、もがきながらカプセルを口に入れると、バラバ8の唇に食らいついた。
二人の歯が音を立てて折れた。
……うっ……

バラバ８は、声をもらした。
まさか口にかみついてくるとは思わなかったのだ。
僅かに開いた口に、ミリカの舌で何かが無理矢理突き込まれた。
それは、表面が半分解けたカプセルだった。
バラバ８の奥歯が、思わずカプセルを潰した。
甘酸っぱい液体が口中にもれた。
……しまった……
スパイ活動をするバラバ８に、この味が分からぬはずがなかった。
……毒だ。それもかなり速効性のある……。急がなくては……
ミリカの力が急激に弱まっていく。
バラバ８は、ミリカを蹴り飛ばした。
ミリカの体がバラバ８から離れる。
バラバ８は、よろけながらも金属疲弊剤に近づき、ついに特殊針を刺した。
……やった……
鉄の吊り橋は、ぐらりと揺れた。
だが、鉄がぼろぼろと弾け落ちていくだけで、すぐには落ちてくれない。
……馬鹿な……。橋は一瞬で崩れるはずなのに……。だが現実は……。そうか……
バラバ８は、そのわけが分かった。

針の刺激剤が、あの女の体にずいぶん、もれ出してしまっていたのだ。
もう一本の特殊針を……。
バラバ8は、懐ろの針さしを出した。
針刺しには十数本の針が刺さっている。
そのうちのどれが特殊針だったか……。
そのときだった。
突然、バラバ8の眼がかすみ出した。
毒が効き出したのだ。
……いよいよか……。この毒は特別苦しむ薬だ……。楽には死ねない……
それでも黒い悪魔の一員であるバラバ8は、任務だけは果たそうとした。
バラバ8は、針刺しにあった針のありったけを金属疲弊剤に突き刺した。
そのうちのどれかは、確かに特殊針だった。
鉄の吊り橋は、一瞬のうちに崩れ落ちた。
だが、バラバ8はその結果を確認する気はなかった。
毒の苦しさを思えば、早く死んだ方がましだった。
バラバ8は、金属疲弊剤に突き刺した針の一本を抜くと、首の後ろの急所へ突き刺した。
どんな針であろうと即死の場所だった。
バラバ8の意識は、一瞬で無雑作に消えた。

バラバ8は、崩れた橋の結果を見なくて幸運だったかもしれなかった。
なぜなら、橋が崩れたとき、女達は皆、橋から戻っていて、誰も落ちた者はいなかったのだ。

＊

「ミリカさん……」
フィレーナとリラは、虫の息で横たわっているミリカの前にひざまずいた。
誰の目にもミリカは助かりそうになかった。
ミリカはフィレーナに、震える手を差し出した。
フィレーナは、ミリカの上半身を抱きあげた。
……しっかりしろ……といいたかったが、あまりにも気休めすぎた。
ミリカはかすかな声で言った。
「生きてんのね、二人とも……。よかった」
それから倒れているバラバ8に目をやった。
「あの人に飲ませた毒ね。ほんとは、あなたに使うつもりだったの。でも、使わなくて良かった。あなたは剣で夫を殺したけれど、心で殺せる男じゃない。よく分かったわ、わたし……。そんな男に抱かれて、一番好きだった夫フィコスのところへ行けるなんて、私……、幸福なのかもね」
「ミリカさん、でも、僕は……」

フィレーナは、こんなミリカに真実をいわずに死んで貰いたくなかった。
だが、ミリカはフィレーナの口を指で塞いだ。
「いいの、フィレーナ、何もいわなくて。こうして抱かれていれば、あなたがなんだか分かるわ。でも、あなたは男……。いい？　わたしにとっては……。そうさせておいてね」
それから深い溜め息をついた。
「でも、わたし、なんてことをしたんだろう。わたしの子、フィスを、わたしは闘技士の育児所に入れてしまった。あなたを倒すために……。あなたを良く分かっていたら、決してそんなことしやしなかったのに……。それだけが心残り……」
ミリカの目から涙がにじんだ。
ミリカはフィレーナとリラを交互に見つめた。
「二人とも、どんなことがあっても生きてね。これから、ずっと……。きっとね」
「僕、僕、ミリカさんの子供に、もし出会ったとしたら……」
……その子の好きにさせてあげるよ。たとえ僕を殺そうとしても……
フィレーナは、そういいたかった。
だが、伝えられなかった。
その前に、ミリカの体は冷たくなっていたのだ。
フィレーナは、何もいわず天を仰いでじっとミリカを抱いていた。
言葉の代わりに出た熱いものが、フィレーナの顔の包帯を、じわっと濡らしていく。

「みんな……、みんな死んでいってしまう……、僕の出会う人達は……」
リラがぽつりといった。
「でも……、みんな、生きろといってる……、フィレーナに……。ミリカさんさえ……」
それ以上、リラにはフィレーナを励ます言葉は見つからなかった。
リラの声はすぐにすすり泣きに変わった。

*

フィレーナとリラは、崩れた橋の傍に石を積み上げて、心ばかりの墓を作った。
空の涙が凍りついたような雪が、チラチラと降り始めていた。
神女団（ミメズ）の女達は、そんな二人に見向きもせず、谷に沿って山を登り始めていた。
橋が落ちて行く手が阻まれても、女達は旅を諦めなかった。
旅を続けてデビスの神殿に辿り着くこと、それしか考えていないようだった。
「僕達も一緒に行くしかないね」
墓の前に長居は出来なかった。
いつまた、追っ手が来るか分からないのだ。
山を降りて人目につく危険にさらされるよりは、山を登る方が良いのは明らかだった。
まして、目の見えないフィレーナとリラの二人だけになってしまったのだ。
神女団の人の群れに紛れ込んでいた方が、助かる見込みは多い、とフィレーナは思った。も

ちろん、橋が落ち、黒猫の女が死んだ今は、フィレーナ達が神女団に紛れ込んでいたのは知られてしまうだろう。

だが、知られたのを承知のうえで、まだ神女団の中にフィレーナ達が残っていると、黒い悪魔達は思うだろうか？

それに、黒猫の女の様子を見れば、黒い悪魔達はミリカとリラの存在をまだ摑んでいない様子だった。

だとすれば、仮にフィレーナが摑まってしまっても、リラだけは、神女団の中で生き残れるかも知れないという淡い希望もあった。

「行こう、リラ」

フィレーナは、リラの肩を借りながら、神女団の後について、山を登っていった。

＊

「ますます、困難な事態です」

黒い悪魔のドラ支部で、上層部が会議をしていた。

「人の目の少ない山中で、神女団を消すなど容易いことだと思うがね」

「いえ、橋の事故で神女団の抹殺に失敗した以上、さらに慎重に行動しなくてはなりません。浮き草地区の地下の爆発、さらに、神女団の行く手を阻む事故、これでなおかつ、山脈の中から誰一人、数百人いた女達が降りてこないとなれば、いくらドラから遠い中央本部でも、その

奇妙な繋がりに気づくでしょう。そして、神女団を消したとして、今さら、その中にフィレーナとその仲間が残っているとも思えません」

ここまでは、フィレーナの読みどおり、会議は進んでいた。

だが、上層部の一人が口を開いた。

「かといって、神女団をほっておけません。幸い橋が不通のために、山脈内の村や避難小屋に物資を運ぶ別の道が必要になります。その物資部隊を神女団と同行させたらどうでしょう。その中に我々のスパイが忍び込んでいれば、女達を絶えず監視できます。それに、いざとなれば、広い山脈の中には山賊や盗賊の群れもおります。盗賊どもは、何も持っていない神女団など狙いはせんでしょうが、物資部隊ならやりかねません。残忍な盗賊が物資部隊を襲うついでに神女団を皆殺しにした。こういう筋書きなら納得出来ぬこともない」

「ま、急には無理だが、橋の事故の熱がさめたころならな」

「女達が歩かねばならぬのは、通常の山道ではありません。女の足で山脈を越えるには、半年はかかるでしょう」

「半年も経てば、熱もさめるか……」

「人の噂も二十五日の時代ですからな」

「いよいよとなれば、その手か……」

一同は頷いた。

黒い悪魔はドラ市の運輸局を裏から動かし、さっそく物資部隊が編成された。

三日後、物資部隊は神女団に追いつき、旅を共にすることになった。

＊

雪に覆われた山々がどこまでも連なり、雪山の旅は終わりのないような気がした。
物資部隊が現れたときには――、
……もう逃げられない……
一時は、ひどい絶望感に襲われたフィレーナとリラだったが、三日経った今は違っていた。
むしろ物資部隊が有難かった。
物資部隊の男達の目があるために、女達は、絶えず仮面を付けていた。
夜は、部隊から人目を避けるための天幕(テント)が与えられた。
それでも、女達は警戒し、天幕の中でお湯で体を洗うときも、仮面を取らない女が多かった。
フィレーナの、決して仮面を外さぬ態度も、不自然には見えなかった。
それに、部隊といっても、かたい官庁が組織した一行で、兵隊ではない。規律が厳しく、軍隊の下級兵士のように、やたらと女に声をかけたり、天幕の中を覗(のぞ)いたりする輩(やから)もいなかった。
おまけに旅は、ただでさえ歩きにくい雪の中だ。目の見えないフィレーナの動きのぎごちなさも、さして目立ちはしなかった。
部隊の中に、黒い悪魔の何人かが忍び込んでいるに違いなかったが、今のところ勘づかれた

気配はない。

それは、フィレーナとリラにとって、まさに天幕(テント)一枚外は地獄、の奇妙な安心感があった。

＊

さらに四日が経った。

森林の木の枝に積もった雪が、雪煙をあげながら、重さに耐えられず、時折、ドサッドサッと音をたてて落ちてくる。

幾つかの尾根を越えた一行は、今、なだらかな谷の底を進んでいた。

その谷は、橋を壊されて行手を阻まれたあの大きな谷と同じものだったが、ここまで登ると、さすがに険しさが失せてくる。

だが、谷間を吹き抜ける風は強い。

女達は肩をすくめて、ただ黙々と歩き続けている。

ドラの街を出たときには、あれほど踊り狂っていた女達も、今は誰一人踊らない。

街を出てから、かれこれ二週間が経つが、人間がこれほど変わるとは、フィレーナには考えられなかった。

女達の気配の中に、二週間前の生気がまるで感じられなかった。

麻薬の力が消えたためか、それとも、また一カ月して三日月の時期になると、あのエネルギーが舞い戻ってくるのか――。

……でも、その三日月のころには、僕の目も開く……
フィレーナは、なんとなく微笑んだ。
だが、その微笑は、すぐに吹き飛んだ。
フィレーナは、あたりに異様な気配を感じたのだ。
輸送部隊の男達の持つ気配でもなく、もちろん女達のものでもなかった。
もっと攻撃的な、だが、闘技士の持つ悲しげな気配でも、黒い悪魔の持つ残忍さでもなかった。
攻撃的ではあったが、フィレーナが今まで感じたことのない開放感があった。
攻撃の対象がフィレーナ達であるのは分かっていたが、どこかフィレーナに……よし、いつでも受けてやる、かかってこい……と叫ばせるような爽快さがあった。
しかも、その気配は、地上ではなく頭上にあった。
それも、一つではなく、いくつもだ。
フィレーナはリラに囁(ささや)いた。
「気をつけろ。何かが来る！……」
「えっ？」
リラが訊き返したとき、頭上の気配は攻撃の姿勢に入った。
「伏せろ！　リラ！」
フィレーナは、リラを抱いて雪の中に倒れた。

ザザーッ!

木々の枝から、雪が輸送部隊の頭上に落ちてくる。

あたりは雪煙で、たちまち何も見えなくなった。

「イェーッ!」

次々に頭上で掛け声が上がり、木々の上から男達が飛び降りてくる。

雪煙の中で、男達の中の一人が叫んだ。

「俺達は山の主だ。荷物を置いていけ。置いていかなきゃ、二度と娑婆に戻れないぜ」

輸送部隊の男達は、武器を抜いた。

その中に、黒い悪魔のバラバ6とバラバ5そしてバラバ4の三人がいた。

だが、三人ともそれぞれの顔を知らなかった。それぞれ別々に、神女団を監視しろと命令されていたのだ。

ただ三人は、いずれ盗賊団の名を騙って、黒い悪魔が神女団を抹殺する計画のあることは聞いていた。そのときには、盗賊団に協力し、輸送部隊と女達を殺せと……。だが、それはずいぶん先の話のはずだ……。

三人は三人三様に思った。

……上層部の方針が変わって、今、決行されるんだ……。女達と輸送部隊を殺さねば……

バラバ4は、抜いた剣でいきなり女を斬った。

だが、バラバ5は違っていた。

……これは、俺達、黒い悪魔ではない。本物の盗賊だ。……戦わねば！……

バラバ5は、盗賊達に斬りかかっていった。

もう一人のバラバ6は、さらにうがった考えをした。

……方針変更なら、事前に命令があるはずだ。それがなかった。だとしたら、我々を殺すために誰が来る？　中央本部だ。ドラ支部の失態が伝わり、我々全てを抹殺に来た！　どんなことがあっても生き延びてやる！……

バラバ6は、剣を盲滅法振り回し、白熱光を連射し、逃げ場を探した。

谷間をかけ抜ける風が、ひときわ烈しくなり、雪煙がさらに舞った。

雪煙の視界のなさが、混乱をさらに大きくした。

輸送部隊の男達も、無我夢中で剣を振り回す。

雪煙の中、白熱光線が飛びかい、女の悲鳴、男の怒号が、至るところで渦巻いた。

ドサッ！

雪の中に倒れているフィレーナとリラの目の前に、輸送部隊の男の死体が転がった。

リラは、その男の持っている中型剣を素早くもぎとった。

「何がなんだか分かんないけどこれ！」

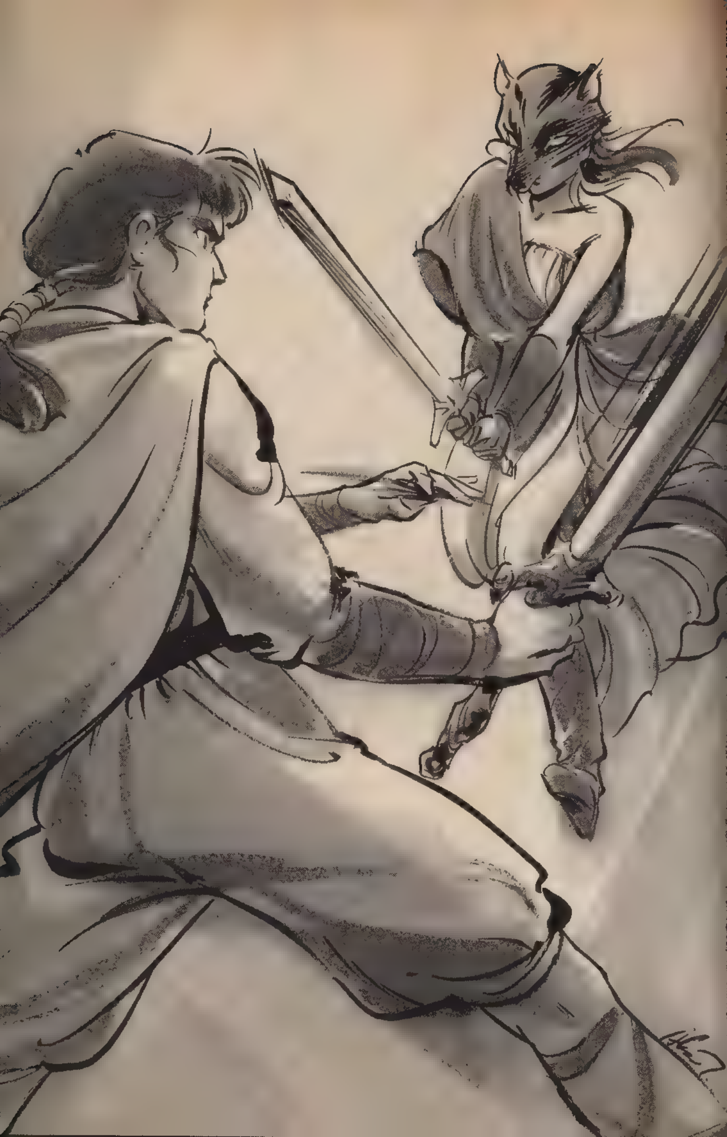
フィレーナに中型剣を握らした。

フィレーナはリラを庇うように立ちあがると、

「このままじゃ、やられる。リラ、逃げるぞ！　僕の後ろをぴったり離れるな」

フィレーナは雪煙の中、人の気配の間をぬって走った。
いきなり、目の前に男の影が立ち塞がった。
手にはもちろん、剣が握られている。
……先手必勝！……
フィレーナは、中型剣を叩きつけた。
男は、かろうじて受け止めた。
男は、ただちに反撃に転じた。
……強い。やはりこいつは黒い悪魔だ！……
男の剣を受け止めながら、フィレーナはそう思った。
男とフィレーナは鍔競り合いになった。
雪煙の中、男にもフィレーナの顔が見えた。
「女？　お前、女か……」
男の剣の力に、一瞬、変化がおきた。
……今だ……
フィレーナはジャンプすると、男の頭上に剣を叩きつけた。
斬ったと思った。
だが、フィレーナの剣は、一瞬早く受け止められていた。
二人は飛びすさった。

体勢を整え剣を構えるフィレーナに、男が言った。
「待て！　女、名前はなんという！　俺の名はラリスだ」
「黒い悪魔に名乗る名なんかない。それに、お前はもう僕の名を知っているはずだ」
だが、返ってきた男の答えは意外だった。
「黒い悪魔？　何のことだ。俺は、山の主の主領・ラリスといったろう」
「山の主？」
「お前達にいわせれば、山賊か盗賊だがな。さあ、俺が名乗った以上、お前も名乗れ」
フィレーナは戸惑った。
ラリスと名乗った男は続けた。
「お前、そんな格好をしているが、男だな」
「えっ？」
「女にお前のような剣は使えん」
そのときだった。
フィレーナに向かって、輸送部隊の服を着た男が斬りかかってきた。バラバ4だった。
フィレーナは、かろうじて飛びすさった。
バラバ4は、さらに、ラリスという男にも剣を叩きつけた。
剣を受け止めたラリスが呻くように言った。
「なんだこいつは、味方の女と、敵の区別もつかないのか？」



フィレーナは、そのとき、初めてラリスを信用した。
フィレーナは、バラバ4に突っ込んで行きながら叫んだ。
「こいつが黒い悪魔だ」
フィレーナの剣とラリスの反撃が、同時にバラバ4を襲った。
バラバ4は、別方向から叩き込まれる二本の、しかも、凄まじいスピードの剣を受け止められはしなかった。
叫んだフィレーナの剣は弾き飛ばしたものの、ラリスの剣は、胸に深々と突き立っていた。
バラバ4が倒れると、再びフィレーナとラリスは剣を向けあった。
「さあ、これで本来の敵同士だ……。名を聞こう」
「フィレーナ……」
そして、今、思いついた名を付け加えた。
「狼のフィレーナ。この仮面どおり……」
のみのフィレーナでは、なんとなく格好がつかなかったし、なにより、闘技士時代の名は、二度と使いたくなかった。
ラリスは頷いて言った。
「狼のフィレーナ……。俺が倒した強者のリストに乗せてやろう」
ラリスが剣を振り上げる。
フィレーナが身構える。

だが、二人の戦いは、そこまでだった。
輸送部隊と盗賊達の斬り合いが、二人の間に倒れ込んできたのだ。
さらに、バラバ５と盗賊達の戦い。そして、バラバ６のがむしゃらな相手構わずの剣。
雪煙の中、敵も味方もない大乱戦が続いた。
「今のうちだ、リラ」
「うん」
二人は、手を握ると、雪煙の中を走り出した。

*

どれほど走っただろう。
もう、あたりに人の気配は無くなった。
荒い息をつきながら、いったん立ち止まった二人は、それでも、黙って手を繋いだまま歩き始めた。
谷の森林を抜けたのか、周りはなだらかな雪の斜面が、どこまでも続いている。
風がさらに強くなった。
風に雪が混じり始めた。
空は白く曇り、地と空の区別も確かではない。
肌を刺す凍った空気に、さらに針に刺されたような痛みを感じる雪の粒が踊る。

やがて、皮膚は何も感じなくなった。
まるで、電気にしびれたような膜が、体中を覆っているようだ。
目の見えるリラすら、今は何も見えない。
フィレーナが闇なら、リラは、瞼を開いても開いても、暗い白しか見えない。
暗い白——灰色ではない。かといって純白でもない。
まさに暗い白としかいいようのない世界だった。
あれほど敏感だったフィレーナの感覚も聴覚も、凍えきって何も感じられなくなった。
風と雪は、さらに勢いを増した。
それすら、二人には感じられなかった。
凄まじい吹雪の中、二人は、ただただ歩き続けた。
やがて、どこまで踏み込んだら自分が支えられるのか分からないような頼りない雪の感触だった足元が、ゴッンゴッンと、まるで竹馬に乗ったように、硬く手応えのあるものになった。
どうやら、風で雪が吹き飛ばされて地表が剝き出しになっている岩場にやってきたようだ。
それだけに風は強い。
少しでも力を抜けば、そのまま宙に舞い上がりそうだった。
……それもいいかもな……
フィレーナは思った。
……両手を大きく広げ、風に身を委ね、木の葉のように空に吹き飛ばされてみたい。そして、

後は地面に叩きつけられようが、そのまま空に漂っていようが、風まかせ……。楽しそうだな……

そんな思いが、吹きすさぶ風の中で、ゆったりと甘く広がっていく。

……ああ、僕、死にたがっているんだね……

闘技試合のとき、苦境に立たされると、いつも自分の内側から、こんな甘い誘いが聞こえてくる。

でも、そんなとき目を開けばそこに対戦相手がいる。自分が生き残るために、殺意を剥き出しにした相手が……。するとむらむらと反撥力が起こる。

……冗談じゃない。こんな奴に……、こんな奴に殺されて、どうして楽しい気分になるっていうんだ。こんな奴のために僕は犠牲になりたくない！……

そして、戦い続けた。

だが、今は違う。

……敵はとてつもなく大きな自然——風と雪……。こいつに殺されるなら、誰も文句はいわないだろう。誰も僕のことを弱い奴だとかちっぽけな奴だとはいわないだろう。同じ殺されるなら、黒い悪魔なんかよりよっぽど格好いいじゃないか……

今回、甘い誘いに乗ってみませんか？

乗ってみましょうか……。

そんなときだった。

手を握っているリラの、凍えて呂律の回らない声が聞こえた。
「あ、あれ……」
「え？」
リラは、岩場に小さな洞穴を見つけたのだ。
……あそこなら、少なくとも風だけは凌げそうだ……
リラは黙ってフィレーナを引っぱっていった。
何かを喋ると、せっかく暖かい口の中が凍りついてしまいそうだからだ。
二人は、洞穴に入ると仮面をとってしゃがみ込んだ。
洞穴の中に風は少しも吹き込まず、空気は澱んでいる。
だが、寒いことには違いない。
このままここに居れば、こごえ死ぬことは確かだ。
だからといって、外に出ても同じだ。吹雪の中で死が早まるだけだろう。
やがて、洞穴の入口が暗くなった。
どうやら夜になったらしい。
フィレーナに明るさの変化は分からなかったが、じんじん体の芯に入り込んでくる寒さで、それを知った。
「もうだめかもな……」
フィレーナが、凍えてごわごわになった口で言った。上手く言葉になって出てこない。

「えっ？　何って言ったの？」
リラが訊いたが、それも上手く発音出来なかった。唇がかじかんでいるのだ。
……困ったもんだよな……
フィレーナは肩をすくめて微笑した。
そのときだった。
突然、生暖かいものが、唇の間から流れ込んできた。
「!!」
すぐに、フィレーナは、それがなんだか分かった。
かじかんで感覚のなかった唇に、生気が甦ってくる。
唇に触れ合っているそれにも、暖かさを感じる。
それはリラの唇だった。
……ちゅうことは、そか、僕とリラは口づけしているのか……。なるほどね……。これがキスっちゅう奴か……
フィレーナは、ごく冷静に受け止めて、それから、こういうときは慌てなくてはいけないことに気づいた。
「リラ……、何すんだよ」
フィレーナの声が言葉になった。
「ほら、やっぱり良かったでしょ？」

リラの声もはっきり聞きとれる。
「良かったって。いいわけないだろ、こういうの」
「ははあ、やっぱ誤解しているわけよね。あのね、わたし、別にしたくてしたんじゃないの……。口がかじかんで動かないでしょ。だからお互い、暖めようと思って……。でも、手も顔も冷たいし、暖かいとこは口の中しかないでしょ……」
「あ……、そういうこと……」
「こーいう色気のないキスも珍しいわね」
「色気があってたまりますか……」
「うん、そーいうことなら。フィレーナ、服を脱いで……」
「あん？」
「女の子の肌って暖かいの……。都合いいことに、フィレーナも女の子だし……」
「なんか困るよな」
「ここにはストーブないもん……。せっかく、お互い、体にストーブ持っているのに、もったいないでしょ」
「もったいないか……。そうだよな。たぶんもうすぐ死ぬのに、使わないのはもったいないよな」
「それに、ここじゃ裸になっても誰も見ないし、暗くて見えないわ」
「ああ……、そだね」

二人は裸になって抱きあい、互いの服を上にかけた。

信じられないほど、暖かかった。

そして、柔らかかった。だが、抱きしめて潰れてしまうような頼りなさはない。したたかに柔らかかった。

「こういうのか、女の体って……」

「うん、わたしも初めて……、女の人抱いたの……。いいもんね、わりと……」

「うん、悪くない……」

リラがポツンと言った。

「あんたが男だったら本当に抱かれたかった」

「男は、こんなに暖かくはないんだろ？」

「あの、そういうことじゃなくて」

「もっとごつごつ硬くて、髭なんてあるときっと痛いよ」

「そういうことじゃなくて……」

「いいたいことは分かる……。でも、女の方がいいな」

「そーいうの、やばいんだけどな」

「だって、抱いてるじゃん、もう」

「そういうことじゃなくて……」

「どういうこと？」

「……だめだ、こりゃ……」

「いいよ、僕は……。このままで……」

「あんたって……」

「え？」

「どうしようもなく正常なんだ」

「あん？」

「で、もって、わたしも正常だからして」

「どこも悪いとこなさそうだよ。見えないから、よく分かんないけど」

「分かんなくてよろしい……、こんなこと」

「どんなこと」

「……このままでいましょ」

二人は身動きせず、じっと抱き合っていた。

このまま眠って、死んでもいいな……とフィレーナは思った。

どれほど経ったろう。

外に、吹き荒れていた風の気配はなくなっていた。

フィレーナには分からなかったが、洞穴の外は次第に明るくなっていく。

朝が来たのだ。

「ん？」

うとうとと眠りかけていたフィレーナは、外の気配に、ぱっちりと目を醒ました。
何人もいる。
しかも、聞こえてくる金属製の音は武器だ。
フィレーナはうんざりした。
……またか……。ちぇっ、なぜ、昨日、凍え死んでしまわなかったんだ……。もう戦いはたくさんだよ……
だが、相手が人間。まして黒い悪魔だとしたら、むざむざ死ぬわけにはいかない。
フィレーナは、素早く服を着ると、仮面をつけ剣を握った。
リラも、すでに気づいて、黙ってフィレーナのする通りにした。
いきなり、外から声がした。
「出てこい！　いるのは分かっているんだ。岩場の足跡は吹雪では消えん。それとも、煙でいぶり出そうか？……」
その声はラリスだった。
ということは、少なくとも黒い悪魔ではない。
ラリスが続けた。
「勝負の結着をつけよう。あのままでは後味が悪い」
……そういうことなら……
「やるっきゃないね」

フィレーナはリラに肩をすくめて見せ、外に叫んだ。
「分かった！　今すぐ出ていく！」
外は、昨日が嘘のように晴れわたっていた。
フィレーナの後から外に出たリラが最初に思ったのは、
……やばい……の一句だった。
思い思いの武器を持った男達が十数人、洞穴を取りまいていた。
よく見れば、傷を負っている者も多いが、一時に攻撃を受けたら、いくらフィレーナでもひとたまりもないだろう。
「出てきたな、狼……」
ラリスが前に進み出た。
昨日は雪煙の中でよく見えなかったが、中肉中背で、しかし、がっちりした体の若者だった。
だが、顔を見たリラは、思わず息を飲んだ。
「どうした？」
フィレーナが訊いた。
「ううん、なんでもない」
リラはかぶりを振った。
下手なことをいって、相手を刺激したくなかった。
ラリスの顔は、目鼻立ちは整っていた。だが、半面が焼け爛れていたのだ。

ラリスは剣を抜き、フィレーナに言った。

「狼のフィレーナ。お前の腕前、なかなか見事だ。俺も久しぶりに燃えた。俺が勝つと分かり切っているなら見逃してもやるが、あれほど見せつけられては、引き下がるわけにもいかん。俺に勝ったら、どこへでもいけ。山を越えるなら、我々の仲間の中から案内人もかしてやろう。食料も分けてやる」

「願ってもない申し込みだね。ついでに一つ頼みがある」

「ほう、注文の多い奴だな。我々に囲まれているお前の立場を考えろ」

「僕の立場を考えたからさ。僕が勝っても、お前達が約束を守る気がなければなんにもならない。信用の出来ない奴には、頼みごとはいくら多くてもいいんじゃないか？」

「なるほど……、言えてる」

ラリスは、いきなり高笑いした。

男達も、それを合図にしたように、ゲラゲラと笑った。

ラリスはフィレーナを指さして、

「お前、相当暗い性格しているな」

「こんなときに馬鹿笑い……、明るすぎるんじゃないの」

男達は、顔を見合わせ、再びゲラゲラと笑った。

「よし、頼みを言ってみろ」

「笑い声が消えないうちに言っておく。もし僕が負けたら……」

男達の笑い声が止んだ。

「負けたときの頼みごとをするというのも珍しいな。負けたら、何をされても文句はいえまい。お前は死んでいるのだからな」

「だから、今のうちにいっておく。この娘に手を出さないで欲しい。この娘は男にうるさい。相手は誰でも良いという女じゃない」

リラは呆気にとられた。

「あんた、マジ?」

「当たり前だろ。こんなときに冗談やってられるか。リラはいつもいってたじゃないか。いい男に抱かれたいって……」

「大声でいわないで……」

ラリスが呆れていった。

「ごちゃごちゃ、そっちで揉めんな。分かった。約束する。約束破って狼の亡霊にうなされるのはたまらんからな」

ラリスは剣を構えた。

「いいか、誰も手を出すな。俺とこいつの一騎打ちだ」

ラリスが突っ込んでくる。

フィレーナは受ける。

二人は飛びすさる。

じっと対峙する。
ラリスの気迫がフィレーナの肌にひしひしと感じられる。
……やはり強い……。負けるかもしれない……
フィレーナに弱気が走った。
……それにここ二週間は、女の姿をして、ろくに闘技の練習をしていないし……。練習したことといえば、闘技の邪魔になることばかりだ……。やはり女に戦いは向かない……
フィレーナは、ラリスの足元の気配を窺った。
跳躍靴の気配はない。
ならば、ジャンプは僕の方が上のはずだ。
ラリスがかすかに動いた。
……ジャンプで勝負だ……
フィレーナはジャンプした。待ち受けたように、ラリスもジャンプする。
フィレーナは、そのとたん呆然とした。
ラリスは、フィレーナのさらに上にジャンプしていたのだ。
……馬鹿な……。跳躍靴もなしで……
体の軽いフィレーナは、誰よりも高くジャンプできる自信があった。
そして、上からの攻撃を得意としていた。
だが、その上をいく男がいる。

下で受ける立場になるのは、初めてだった。
空中でガシンと、剣と剣のぶつかる音がした。
フィレーナはかろうじて仮面の前で剣を受け止めた。
だが、防ぎきれなかった。
フィレーナ自身の剣が力に押され、仮面をしたたかに叩いた。
仮面が飛び、フィレーナは岩場に落ちた。
手から剣が飛んだ。
……負けた！……
フィレーナは、喉元に突きつけられたラリスの剣を感じた。
……死か……。これで終わりか……
だが、ラリスの剣は、すーっと引いた。
……？……。どうして殺さない？……
「呆れた奴だな……」
ラリスの声がした。
「目が見えずに戦っていたのか……」
ラリスは弾かれた仮面の下の包帯を見たのだ。
「その目が治る見込みは？」
「えっ？」

「包帯を巻いている以上、治る見込みがあるからだろう。治らぬ傷は、隠す必要もない。フフ……」

フィレーナは、ラリスの自嘲的な笑いの意味が分からなかった。

ラリスは自分の傷を思ったのだろうが、目の見えぬフィレーナに分かるはずがなかった。

「この目は……、二週間もすれば治る……」

フィレーナは答えた。

「よし、お前が完全な体になったとき、もう一度、戦おう。お前、これから急ぎの用でもあるのか？」

「いや……、別に……。ただ……」

「分かっている。何かに追われているんだな。男が女の姿をしているんだ。それなりのわけがある。よし」

ラリスは、フィレーナの手を持って立ちあがらせた。

「俺んとこへ来い。食い物と寒さだけはしのげる。その狐の姉ちゃんも一緒にな」

……姉ちゃん？……

リラが狐の仮面をいきなり取って言った。

「姉ちゃんじゃありません」

ラリスはチラリとリラを見て、

「ん、あ、ガキか……」

「ガキ……!?」

リラは、プッとふくれた。

*

フィレーナとリラは、雪の上を猛速で走る自走橇（オートスレッジ）に乗せられ、山奥深く連れて行かれた。

そして、半日も経ったころ、正面に巨大な雪の崖（がけ）が見えた。

自走橇は、崖にまっしぐらに突っ込んでいった。

目の見えないフィレーナはさほどではなかったが、リラは、それこそ、両手で顔を隠しながら、指の間から少しだけ、やっと覗けるといったスピード感だった。

そして崖にあわや激突という瞬間、そこに割れ目があり、橇は吸い込まれるように中へ入っていった。

そして、長い氷のトンネルを潜り抜けた先に、あでやかな原色の広がる、雪山とはまるで別の世界が広がっていた。

第5章

雪の中の花園

リラは目を見張った。
そこは、まさに原色の世界だった。
今まで、白一色の世界に慣れすぎていたからなおさらだ。
リラは、まるで色盲の検査をされているのかと思ったほどだった。
そこは、ほぼ十キロ四方もあるだろうか――。
あたり一面、名の知らぬ真っ赤な花が咲き乱れ、花畑をとり囲む木々の林の色は五月の新緑だ。
まわりは真っ白な雪の崖（がけ）。空はどこまでも青い。その空を映して、池の水もまっ青だ。
まるで、そこは雪原に絵の具を散らした調色板（パレット）をおいたように思えた。
そして、なによりこの空気のあたたかさが不思議だった。
ラリスがリラの疑問に答えるようにいった。
「驚くにはあたらない。ここは昔、火を吹く山だった。俺達の祖先はその火の口にふたをしてその上に温度調整金属（ヒートバイメタル）をしきつめた。たえず地上が一定の温度になるようにな。そして、さら

に、豊かな土を運びこんでしいた。氷はまわりの雪からとった。ここらの雪は一年中とけない」
「いったい誰が、何のために？」
「俺達の祖先……、山の民(ラリテニアン)と呼ばれていた。連中は花から薬を作るのが得意だった。今、帝国の薬といえば金属物質から合成したものばかりだが、昔は違っていた。薬は、自然の中の生きた植物や動物から作られていたんだ。今、動物から作られた薬といったら、蜂蜜ぐらいしか使われていないがね」
自走橇(オートスレッジ)から降りたリラは、赤い花に手をやり、
「これもなにかの薬の素(もと)ですか？」
ラリスがふっと笑った。
「薬といえば薬かな。自忘芥子(じぼうけし)（フォゲッピー）といって、麻薬の素だ」
「麻薬？　こんなにきれいな花が……」
「花はきれいなものほど毒がある。これを、秘密の通路でこの山脈の外へ運び出し、闇で帝国に売りつける。ただのような値段でな。麻薬は帝国に広まり、自忘芥子を栽培する奴もふえ、やがて帝国は滅びる。いつのことやら気の長い話だ」
リラが頷(うなず)いて、
「はーん、するとあなた達、ただの盗賊屋さんじゃないんだ」
「盗賊屋さんか……。俺はただの盗賊屋さんでいたいがね。皆がそうさせてくれん」

「皆って？」
目が見えなくて、見ず知らずの花の話に参加できなかったフィレーナが、やっと口を開いた。
「この盆地に住んでいるみんなさ。みんなは、ここをリトル・ラリテニアと呼んでいるがね」
「リトル・ラリテニア？」
「小さな山の国という意味だ」
そのとき、薬袋を持った老人が、そそくさとやってきた。
「どうじゃった？　収穫は……」
「死者十人で獲物ゼロ。輸送部隊に妙な奴が三人いてな。こいつにいわせると黒い悪魔って連中だそうだ」
老人の顔色が変わった。
「黒い悪魔？……今、黒い悪魔と言ったの」
「知っているのか？」
「噂になった……。昔、わしらの国を滅ぼしたのも、陰で帝国の黒い悪魔が暗躍したからじゃといわれとる。存在するかどうかも分からんかったが、本当におったのか……」
「じゃあ、俺達の敵ってわけだ。それなら、みんな叩き斬ってやりゃよかった。二人まではやったが、一人は逃がしちまった」
「二人までやったって……。あの後、もう一人を？……」
フィレーナはラリスに舌を巻いた。確かにフィレーナとラリスの二人がかりで一人は倒した

が、もう一人も倒しているとは……。これじゃ、目が開いたってラリスには勝ち目がないかもしれない……。

「こっちは十人もやられ、けが人続出だ。計算が合わん。とりあえず引きあげたが……、惜しいことしたな」

ラリスは、まだ黒い悪魔を取り逃がしたことを悔やんでいた。

ラリスは老人に言った。

ラリスはフィレーナの肩をポンと叩いた。

「黒い悪魔のことなら、こいつが詳しいらしいぞ。こいつもそうとう強い」

「その話はあとにしよう。わしゃ、けが人を見にゃならん」

ラリスは、フィレーナ達を連れて、花畑をつっきっている並木道を歩き始めた。

「あれはリトル・ラリテニアの長老さ。今は医者もやってる。お前も、その目を見てもらえばいい」

「とんでもない！」

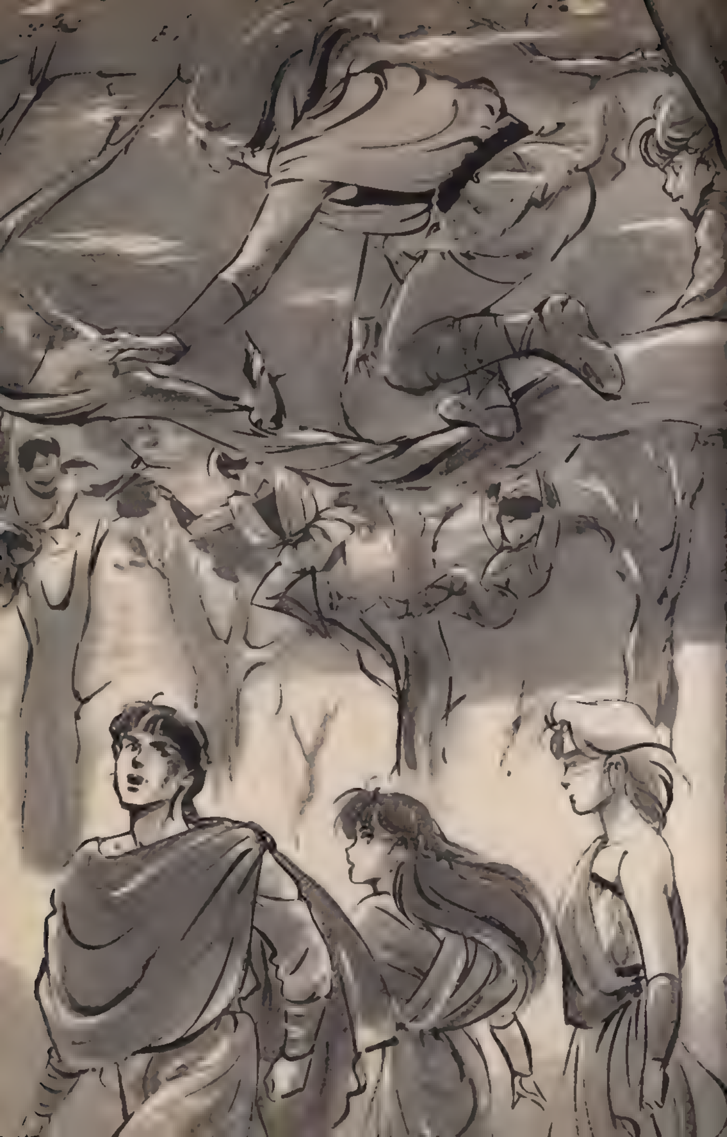
フィレーナは、医者のキルに女であるのを見破られたことを思い出して、あわててかぶりを振った。

「あん？　腕はいいぞ。あのじいさん」

「いや、これはもう治るって決まっているから……」

そして、話題を変えた。

「神女団の女達はどうなりました？」
「生き残った連中は、旅を続けるだろうさ。あいつらは、何を言っても神殿に行くのを止めない。俺達も、あいつらだけは狙わない。あいつらから物をとるほど、みじめに落ちたくないんでね。俺達が狙ったのは輸送部隊がいたからさ。あの馬鹿な三人がいなきゃ、血も流さずに済んだかもしれん」
「………」
フィレーナは唇を噛みしめた。
……その三人がいたのは僕がいたからなんだ……。僕の行くところ行くところ、どうしてこうなるんだ……
そのときだった。
「ラリス！」
「ラリス！　おかえり！」
小径をかこむ並木の上から、子供達の声が聞こえた。
「おう、ガキども、帰ってきたぞ。残念ながら土産はなしだ……」
ラリスは子供達に肩をすくめて見せた。
「いいよ、そんなの。それより、お話、聞かせて！」
「ね、何人やっつけたの？」
「ね、聞かせて」



子供達が、木の上をぴょんぴょんはねながらついてくる。
「おう、土産が話でいいなら、なんぼでも聞かせてやる！」
ラリスがそう叫ぶと子供達は歓声をあげた。どうやらラリスは子供達の英雄らしい。
ラリスはニヤリと笑って、
「今日のガキの相手は安上がりにすみそうだぞ」
木の上を跳びはねる子供達を見て、呆気にとられていたリラがラリスをつっついた。
「ねえ、危なくないの？　あんなことさせて」
「あいつらは訓練しているのさ。山の民は空気の薄いところで自由に跳びはねる。木の上を走った方が下をいくより早い。俺達もガキんころはああやって育てられた。そして、闘技を憶え、山で最強の兵隊を作る。で、もって、盗賊やってりゃ世話ないがな」
ラリスの口調は投げやりだった。
……どうやら、この男は、盗賊の暮らしを気に入っていないらしい……
あれだけ豪快に戦っていた男だけに、フィレーナは不思議な気がした。
やがて、ラリスとフィレーナ達は丸太で作られた小屋が建ち並ぶ集落に来た。
中央の広場では、若い男達が剣をまじえて闘技の練習をしていた。
フィレーナは、剣の響きだけで、彼らの闘技の水準がかなり高いのがよく分かった。
少なくとも、フィレーナの育った闘技士養成所とはくらべようもなく高かった。
だが、目の見えるリラにとっては別のことが気になった。

それは、ラリスと同じように顔に焼けただれた痕のある若者が何人もいたことだった。
……大火事でもあったんだろうか？……でも、聞くのも気の毒みたいだし……
そんなとき、ラリスがフィレーナとリラを見較べながら言った。
「ときに……、二人の関係はどうなっとるのかな？」
「えっ？」
「住むところを決めなければならん。兄弟ならば一緒のところでもいいが、友人ならば男女別々。この土地は風紀にうるさくてな。どうだ？　フィレーナ、俺と住まんか？　俺は独身だ。きがねはいらんぞ」
「わたし達は夫婦です。はい」
リラがあわを食って宣言した。
ラリスはポカンと口をあける。
「フーフ？　フーフってあの夫婦か？」
「他にフーフがありますか？　熱いお茶飲んでいるわけじゃあるまいし、わたしが奥さんです」
ラリスは目を丸くした。
「帝国じゃ、こんなガキと許されるのか？　そんなみだらなことが……」
ラリスは絶句してしまった。
絶句したのはリラも同じだ。

「み、み、みだらとはなによ。非行少女じゃあるまいし、私達、一度は法律で認められたのよ」

ラリスは何度も首を振った。

「やはり帝国は乱れている。こんなガキと……、あってはならんことだ。フィレーナ、お前、腕はいいが、そういう趣味とは……。ウーン。うん。人間だれしも欠点はある。しかし、ガキとなあ……」

ラリスは考え込んでしまったが、それでも一応、二人のための小屋を用意してくれた。

だが、リラは二日間は丸々機嫌が悪かった。

＊

フィレーナとリラは、知っている限り、黒い悪魔についてラリス達に話した。

そして、フィロセラの王家の血を引く女だという秘密だけは隠して、闘技士のころの話をした。

フィレーナはさらにこう言った。

「これ以上、ここにいれば迷惑がかかります。僕らはすぐに出ていきます」

「いいんじゃよ、フィレーナさん。わしらとて帝国や黒い悪魔と戦っておるんじゃからな」

長老が遠くを見つめるようにして話しはじめた。

「昔、この山脈にはラリテニアという小さな山国があった。勇猛な山岳民族じゃったが、国が

小さい。帝国がやって来たときには、戦わずしてやむなく属国となった。だが、帝国はラリテニアを属国にするだけでは満足しなかった。属国化は侵略の足がかりで、結局は滅ぼすつもりだったのじゃ。帝国はこの国の特産の自然薬に目をつけ、帝国の薬事法に反逆するものと決めつけた。そして、ついに戦いが始まった。しかし、山岳戦や森林戦となればラリテニアの兵は強い。戦いは勝敗がつかず泥沼になった。さて、ラリテニアが帝国の属国だったころは、帝国人との間に生まれた二世も数多くおった。彼らの働き口は帝国軍の二世部隊になるしかなく、まだ、帝国が世界制覇(せいは)する前は、帝国のために世界各地で戦っておった。彼らは勇猛なラリテニアンの血を引いているから強い。絶えず危険な最前線に回され、戦い続けた。帝国は彼らに目をつけた。帝国は、ラリテニアとの戦いに、ラリテニアンの二世部隊を投入したんじゃ。命令に従わなければ死刑が、帝国軍の規律だ。母国と戦うのが嫌(いや)で死ぬ者、妻子のために戦いに加わる者、この二つしか道はなかった。こうして、母国の中でラリテニアン同士の戦いが始まった。二世達は、妻子が帝国の人質になっているから戦わざるを得なかった。だが、同じラリテニアン同士だ。どうしても戦いに勢いが出ない。双方、一進一退だった。そこで登場するのが黒い悪魔じゃ。もっともこれは、黒い悪魔がやったという噂でしか残っていないがな……。彼らは双方にスパイを送り込んだ。そして、たくみに情報を流し、この山脈の一部分に両軍の全軍が集結するように仕組んだ。そこは、なんの資源も利用価値もない不毛な荒れ地だった。戦いは、入り乱れての激戦になった。

そんなある日、その戦場で大爆発が起こった。それは超爆弾(ウルボム)だった。それを使うと、その地

域は千年以上、何も生まれない不毛の地になるので、帝国法でも使用禁止の爆弾だ。だが、それが爆発した。帝国は隕石（いんせき）か何かが落下した謎の爆発と発表したが、少なくともラリテニアの民は信じなかった。超爆弾で受けた傷は、一代限りでは消えないのじゃ。例えば、やけどの痕（あと）は子々孫々まで残り続けるのじゃ……」

フィレーナは、そのとき、ラリスが肩をすくめた気配を感じたが、それがなぜだかは分からなかった。

長老は続けた。

「ラリテニアの軍は全滅した。そして、ラリテニアは滅びた。ラリテニアの民は、殺されるか奴隷（クレチア）にされるか、いずれにしろ、今は誰も生きてはいまい。だがな、超爆弾を受けながら、かろうじて生きのびた小隊が一つだけあった。彼らは帝国への復讐（ふくしゅう）を誓った。そして、彼らの中の一人が薬草研究所のあることを知っていた。彼らはここに住みつくことにした。薬草研究所は、当時のラリテニアでは最高の秘密だった。帝国も、ここには気がつかなかった。我々は薬草の代わりに白忘芥子（フォゲッツピー）を育て、麻薬を作り、帝国へ復讐しようとした。戦士を育て、帝国人を襲い続けた。三代目になった今も、それを続けている」

長老はフッと息をついた。

「だから、帝国にさからう者は友じゃ。いや、今やここにしか生きていないラリテニアンにとっては兄弟でもある。二人ともここにいなさい。わしらはそれがうれしいのじゃ」

帝国にさからう者は兄弟……。フィレーナはその考え方に胸をつかれた。

……今まで僕は、奴隷のこと、フィロセラのことで頭がいっぱいだった。でも、ここにはこんな人もいる。考えてみれば、帝国人の中にだって、ネストさんが、キルさんがいた……。そういうことか……。そういうことなんだ……
フィレーナは目の前が開けていくような気がした。

*

それから十日あまり、フィレーナとリラにとって信じられないほど平穏な日々が続いた。
リトル・ラリテニアの人々は、誰もが二人に親切だった。
親切――この簡単な言葉を、奴隷のフィレーナ達は身を持って受けたことがなかった。
「女の体もあったかいけど、親切もあったかいんだね」
フィレーナは、リラに、そうしみじみと言った。
「あん？」
リラは呆気にとられてから、プーッと吹き出した。
「おかしいかい？」
「わたし、このごろのフィレーナが頭いいんだか悪いんだか、こっちの頭がごちゃごちゃになっちゃうとき、あんだけどさあ……」
リラは真顔に戻って、
「うん、あったかいね。親切って……」

しみじみと頷いた。
フィレーナは、せめてその親切のお礼として、子供達に闘技を教えた。
なにしろ、小さいくせに強いし、目が見えないのに、大人と練習してさえ勝ってしまうのだから、まるで魔法使いだった。
やがて、若者達も目が見えなくても相手の動きをさぐる方法を教わりに来だした。
リラはリラで、踊りや歌や女らしい行儀作法などを女の子達に教えた。女らしい行儀作法なんて苦手のはずだが、ラリスに非行少女あつかいされた以上、意地でも女奴隷時代の行儀の教習を思い出すことにした。
闘技の練習を終え、池の前で一休みしていたフィレーナに、盗賊稼業から帰ってきたラリスが声をかけた。
「いい酒が手に入った。飲まんか？」
ラリスは、酒瓶を持ってフィレーナの横に坐った。
「いや、僕は酒は……」
断るフィレーナにラリスは肩をすくめた。
「盗んだ酒は飲めんか？」
「弱いんだよ。すぐ目に出ちゃう」
「目にね……」

「あ、目に出ても分かんないか……」
二人はどちらからともなく笑った。
「俺も、そろそろ盗っ人は止めようと思ってはいるんだ」
ラリスがぽつりと言った。
「えっ？」
「帝国への復讐といえば聞こえがいいが、戦いがあれば人も死ぬ。人も殺さにゃならん。この土地は盗みなぞやらなくても、十分、自給自足で食べていけるんだ。けちな麻薬の畑を食べ物に変えればな。ま、老人どもの思い込みにつきあっていままでやってきたが、早かれ遅かれ、盗賊やっていりゃ、ここが見つかるときが来る。俺達、三代目や四代目にとっては、もう帝国も属国もラリテニアもない。それより、この土地で生まれた子供達が長く生き続けられることの方が大事だと思うんだ。戦いは戦いしか生まん。後に残るは死人ばかりさ」
「僕もそう思う……」
フィレーナの正直な気持ちだった。
「そうか、お前もそう思うか……。どうだ、お前もこの土地で一緒にやらんか？　あの子供の奥さんだって子供を生むときだって来る。落ち着く場所が必要になる」
フィレーナはそれには答えず微笑した。
「ラリスさんはいい。小さくてもここにラリテニアがある。でも、僕のフィロセラはない」
「フィロセラ？」

フィレーナはラリスにならフィロセラのことを話してもいいと思った。いや、話したいとすら思った。

「十七年前に滅ぼされた僕の国。ラリテニアのようにね」

「たった十七年前にか？……」

「うん、だから、まだフィロセラの人達は奴隷になって世界中に生き残っていると思うんだ。フィロセラは国はないけど、まだ人の心から消えちゃいない」

「確かに消えちゃいないな、それじゃ」

「フィロセラってね、海で生きた国なんだ。僕はもう憶えちゃいないけど、この見えない目でも、閉じてみると海の青さが見える気がするんだ」

「海か……。俺は海を見たことがない」

「フィレーナってね、ありふれた名前なんだけど、海の魂って意味なんだ」

「お前が、海の魂なら、ラリスという俺の名は、ラリテニアの言葉で山の魂という意味だ」

フィレーナはぽつりと言った。

「おんなじだね、僕たち」

「ああ、同じだ。海の魂には海の国が必要だな……、たとえどんなに小さくともな……」

「うん、僕もそう思っている」

フィレーナは唇を噛みしめて頷いた。

ラリスはフィレーナの表情に本気を見てとった。

帝国にさからって国を作る。……本来なら、冗談を通りすぎた病人の戯言である。

……しかし、フィレーナならやりかねない……

ラリスは、なんの根拠もなくそう思った。

そう思う自分がおかしくもあった。

ラリスは突然、大声で笑った。

「ハハハ、気に入った。お前、小さいわりにゃ、どでかいことをまあ、よく考えてくれるよ。よし、何かあったらいってくれ。必ず助けにいくからな」

「ありがとう……」

「がんばれ」

ラリスは豪快にフィレーナの肩を叩いた。

ラリスも本気だった。

そして、二人はどちらともなく笑いだし、笑いが止まらなくなり、腹をかかえて転がった。

そして、二人の見あげたリトル・ラリテニアの空は、フィロセラの海のように青かった。

だが、その空の片隅、雪の崖の端に、黒い点のような人影があるのを、二人は気づかなかった。

人影は電望鏡でリトル・ラリテニアを窺っていた。

フィレーナをドラの城壁で引き止めたバラバ7だった。

バラバ7は、電望鏡に見えるフィレーナが、あのとき、胸をつかんだ女と同一人物だとは思

わなかった。

だが、資料通りの男、フィレーナが、リトル・ラリテニアにいることだけはしっかりと確認した。

輸送部隊の戦いから逃げたバラバ6は、山中で黒い悪魔の別動隊に発見された。命令違反でただちに処刑されたが、その際の情報で盗賊団を徹底的にマークした。

そして、おとりの輸送部隊を仕立て、ラリスに襲わせた。

ラリスはいい酒を奪った代わりに、尾行するバラバ7も連れてきてしまったのだった。

第6章

瞳の中に燃えつきて

――フィレーナが見つかった。

しかも、盗賊団の隠れ家のおまけ付きで――。

ドラ支部の上層部に安堵の空気が広がった。

「盗賊団の本拠地となれば話は早いですな。正規軍の討伐隊で全滅させられます。その中にバラバ兵団がまぎれこみ、フィレーナの息の根を確実に止めればいい」

「山中をさまよっている女達はどうします？」

「一応、マークしておけ……。なにも盗賊団は山中に一つだけではあるまい。さらに不穏の空気があれば、そのときは抹殺すればよい。女達が山から出てくるまでには十分、時間がある」

「しかし、たかが奴隷一匹の脱走で大変な騒ぎでしたな」

「たかが一匹ではない。一匹でもあってはならぬのだ。特に黒い悪魔のかかわる事件ではな」

「だが、フィレーナと『帝国機密』の間に本当に何もかかわりはないのでしょうか？」

「『帝国機密』の内容は我々も知ってはならない。我々は、ただそれを守ればいいのだ。それとも、君は『帝国機密』をのぞいて、また今回のような騒ぎを起こす気かね？　いったい、今

回、何人の黒い悪魔が消えたと思っているんだ」

「すみやかに補充し、数を合わさねばなりません。中央に知れたらことですぞ」

上層部の一人が溜(た)め息(いき)をついた。

ドラ支部の上層部はみんな黙りこくってしまった。

＊

ドラ市駐屯のデビス陸軍が城壁から出ていく。

ドラ市のどこにこれだけの数の兵隊がいたのか、不思議に思えるほどの数だ。

おそらく五十万は越えるだろう。

それぞれが金や銀や硝子(クリスタル)をちりばめた鎧(よろい)をつけ、まるで武具の品評会(ファッションショー)だ。

帝国の威厳を見せつけるような大群は、しかし、実際の討伐隊ではなかった。

彼らは、通常は一般市民なのだ。

だが、国民皆兵のデビス帝国では、ことあれば誰もが戦いに参加できるのだ。

盗賊団討伐は、地方都市ドラにとって数十年ぶりの出動だった。

軍隊曲(マーチ)が鳴り響く。

彼らの胸は高鳴っていた。

戦闘が見られる。それも大規模な戦争に近い戦いが……。

今回の戦いは市民の全員に召集がかかったわけではなかった。

しかし、これだけ集まってしまったのだ。

熱狂的な行進が終わると、彼らはそれぞれの自家用車や乗合車(バス)や団体旅行車に分乗して山に向かった。

山への道は、二日間、混雑(ラッシュ)でほとんど身動きができないほどだった。

山には臨時の高速架空索道(ロープウェー)、綱引鉄道(ケーブルカー)、単一道車(モノレール)、宙動揺籃(リフト)が架設され、兵士たちをどんどんリトル・ラリテニア付近へ運んでいった。

彼らにとって、盗賊討伐は、いわば大型の闘技試合なのだ。

しかも、少しだけ参加する気分にもなれた。

これだけの数の兵士がリトル・ラリテニアを取り囲めば、確かに蟻(あり)のはいでる隙(すき)もなさそうだった。

そういう意味では、彼らも討伐作戦に参加していた。いわば、観客兵団だった。

本当の討伐隊はバラバ7の報告の一日後に用意され、リトル・ラリテニアの雪の崖(がけ)の各所に待機していた。

彼らのほとんどが、属国人かその血を引く二世部隊だった。

彼らの攻撃は、後方の観客兵団が全て間に合う三日後の三日月の日まで待たされることになった。

*

「これから、我々のとる道を決めねばならない」
集落の広場に五百人ほどのラリテニアンが集まっていた。
彼らがこの土地を帝国人に発見されたのを知ったときには、もう、リトル・ラリテニアの雪の崖には討伐隊が配置されていて、崖の外に抜け出すのは不可能だった。
「僕のせいだ！　僕が来なければ……」
呆然と立ちすくむフィレーナに、ラリスは静かに言った。
「いいや。俺がつけられたのがいけない。いつかこうなると思っていた」
「でも……」
フィレーナは言葉につまった。
どんなに自分の責任を叫んでみても、もうどうしようもなく、それは自分を責めてみせることで自分自身をなぐさめているにすぎないのを分かっていたからだ。
「もう何もいうな。闘技をする奴は自分の失敗を悔やんでいる暇はない。お前の闘技はフィロセラだろ。それを考えろ」
フィレーナはやるせなく、それでも何かがいいたかったが、
「いいな、これ以上ごちゃごちゃいうのは女々しいぞ」
それっきりラリスは、それについて一言もふれなかった。
そして、ラリテニアの人達も、誰一人、フィレーナを責めなかった。
いや、憎む気配すら感じられなかった。

フィレーナとリラには、それがなおさら身にしみた。
「死んでご免って謝ってみても、今じゃ死体の置き場に困るだけだもんね」
一緒にお茶を飲みながら、リラがぼそりとそう言って溜め息をついた。
「………」
フィレーナは黙っていたが――、
パリン！
手の中の茶碗が握りつぶされて割れた。
広場の会議は続いていた。
小屋の中のフィレーナに、ラリスがみんなに話している声が聞こえてくる。
「女、子供は逃げろ。子供は自分の生き方を決められないし、女は子供を育てなければならん。いいか、ラリテニアの名は帝国では死語だ。もう誰も知らんだろう。だが、今日まで生きていたのは確かだ。子供達は生きろ。ラリテニアを忘れるな。奴隷にされてでも生きつづけろ。これも死んだ言葉だが、フィロセラのフィレーナが生きているように……。元奴隷だったあの男がお前達の見本だ。いいな！　ガキども！」
「ハイ！」
「ウン！」
子供達の元気な返事が聞こえてくる。
フィレーナは思わず立ちあがった。

「フィロセラのフィレーナのように！」

ラリスが叫んだ。

子供達が続く。

「フィロセラのフィレーナのように！」

フィレーナは唇を噛みしめてこぶしを握りしめた。そうしないと泣き崩れてしまいそうだった。

そっと窓辺に寄り、見えない目で広場を見ようとした。

後ろで、フィレーナにすがるようにリラが立っている。

すすり泣いている。

悲しいのだ。でもうれしいのだ。どうしていいか分からないから涙が出てしまうのだ。

フィレーナはリラの肩を抱いた。

「さあ、もう一度！」

ラリスが叫んだ。

「フィロセラのフィレーナのように！」

子供の声がひときわ大きくなった。

「よーし、そして、ちっとはこのラリテニアのラリスのこともな」

「ラリテニアのラリスのように！」

子供達が叫ぶ。

「泥棒にゃなるなよ」

子供はころがるように笑ってもう一度——、

「ラリテニアのラリスのように！」

「もういい、もういい。照れるぜ」

頭をかかえて逃げ出すようにしてフィレーナの小屋に来て、戸口を叩いた。

「おい、フィレーナ。ガキどもを見送ってやってくれ。ちったあ、景気づけになる」

戸口が開いた。

「もちろんさ。僕にできることなら！」

フィレーナはめいっぱい明るさを作って答えた。

みんなを連れたラリスは、集落の中でもひときわ大きな倉庫の中へ入っていった。

そこには、大きな袋詰めの荷物が山のように並んでいた。

「こいつが全部、麻薬ってわけだ。こんなにたくさん、どうやって運び出すか不思議とは思わないか？」

「雪の壁の通路じゃないの？」

リラが訊いた。

「あんなところを通ってたんじゃ、らちがあかないし、見つかったらおしまいだ。別の通路があるんだ」

ラリスは倉庫の地下へ降りていった。

そこには、直径三メートルほどの雪の穴がいくつも開いていた。
「こいつが通路だ。この穴の一つ一つが山のふもとのいろんな場所に通じている。一カ所に麻薬を運ぶのは危険だからな。穴はつるつるにすべって絶えず下へ向かっているし、長い穴になると百キロ以上のものもあるから、下の穴の出口にいる奴が登ってこれやしない。つまり、麻薬の製造元は不明ってわけだ。出口は人気のない寂しいところばかりで、月に一回の取引の日しか人は来ない。ここを、運搬橇(トロッコスレー)ですべり降りれば、外に逃げられる寸法だ」
子供と女達は、次々に、思い思いの橇(そり)に乗り始めた。
「さあ、ガキどもに握手でもしてやってくれ」
フィレーナは一人一人に握手した。
生き抜いてほしいと何度も何度も胸の中で繰り返した。
子供達は、はしゃぎながら、まるで遊園地の狂気鼠(マッドマウス)に乗るように穴の中へ消えていった。
やがて、子供達を乗せた最後の橇が穴の中へ消えた。
「さてと……、にぎやかなのがいなくなったところで……と」
ラリスは男達に、
「橇はいくつも残っている。行きたい者は行け。残りたい者は残る。それだけだ」
ラリスはそれだけ言うと倉庫から出ていった。
ラリスは、池のほとりでぼんやりとほおづえしていた。

倉庫の扉が開いた。
男達が出てきて、ラリスの後ろに並んだ。
長老が進み出た。
「ここは、わしらの最後のラリテニアじゃ。わしはここを離れんよ」
若い男が苦笑しながら、
「じいさんにゃ、後生大事なラリテニアだろうが、俺ぁ、関係ねぇ。だが、やってくるのは盗賊の討伐隊だろ。盗賊がいねえんじゃ話になんねえ。俺ぁ、残るぜ」
「俺達ゃ、山の主だ。山の主が山から逃げちゃ、おしめえだ」
「売られた喧嘩は買うのがラリテニアンだぜ」
男達は、誰も逃げようとはしなかった。
ラリスは額を指でぽりぽりかきながら立ちあがった。
「ちぇっ、困ったもんだね。お前らがそれじゃ、俺だけトンズラ出来ないじゃないか。あ〜あ、俺ぁ、お前らに殺されたよ。では、では、やるか！」
「オーッ！」
一同は勝ちどきをあげた。
そして、肩を叩きあいながら、武器庫へ向かった。
だが、ラリスの足がピタリと止まり、振り返った。
フィレーナとリラが立っていた。

「なぜ、行かないんだ？」
フィレーナは肩をすくめた。
「行けるわけないだろ」
「拘わるなといったろう」
「拘わっちゃいない。だけど逃げない」
「馬鹿野郎！」
ラリスは、駆け寄ると、いきなりフィレーナを張り倒した。
「フィロセラを忘れたのか？」
「忘れちゃいない。だけど逃げない」
「こいつ！」
ラリスはフィレーナを蹴った。
「行けッ。目ざわりだ」
フィレーナは為すがままだ。
「僕はいかない」
リラはフィレーナに駆け寄り、抱き起こした。そして、ラリスに叫んだ。
「分かって下さい。この人は逃げられないんです。こんなときは絶対に……。そういう人なんです」
ラリスはフィレーナを見降ろした。

そして頷いた。
「勝手にするさ……」
それだけいって、武器庫に向かって行った。
攻撃の前夜がやってきた。
雪の崖の周囲は、帝国陸軍の夜営の光が、夜空の星より多く思えるほどだった。
後方の観客部隊は陽気だ。
飲めや歌えのどんちゃん騒ぎが続いている。
討伐に要する時間を賭けの対象にして、金を集めている者もいる。
電望鏡は針の山のように雪山に向けられ、観賞の準備に怠りはない。
リトル・ラリテニアの中も、陽気さでは引けを取らなかった。
もともと、命知らずの盗賊団である。
おまけに、勇猛なラリテニアンの血をひいている。
集落の酒場で、明日の戦いまでに一滴も酒を残すまじと、どんちゃん騒ぎの声が夜遅くまで続いた。
深夜——。
ラリスは、酒を片手にベッドに横たわり、本を読んでいた。
植物栽培の本だった。
自忘芥子の花畑の代わりに植えるつもりだった野菜について書かれた本だった。

扉がノックされた。
「ドアは開いている」
扉があいた。
フィレーナが立っていた。
「まだ出て行くには十分間にあうぞ」
「行く気はないっていったろう」
フィレーナはベッドの横の椅子に坐って言った。
「とうとう、戦う機会をなくしちゃったね。明日の夜なら、僕の包帯、取れるのに……」
「間にあいそうにないな、それまでには……」
フィレーナは呟いた。
「ああ……。だから、今日のうちにいっておきたいことがあるんだ」
「なんだ」
「お礼をしたい。僕の出来ることならなんでもする」
「フィロセラを忘れるなってことだけさ、お前に出来ることはな。お前にとって、こいつは逃げることじゃないんだ。戦うことなんだ」
「闘技士の僕は、戦うことしか出来ない。でも、もう一つの僕なら出来そうなことがある」
「もう一つの僕？」
ラリスはフィレーナを見返した。

「僕は女なんだ」
「ん？」
「僕は女っていったんだ」
ラリスはじっとフィレーナを見つめた。
「俺の殴った、打ちどころが悪かったのか？」
フィレーナは肩をすくめ、溜め息をついた。
「いっても信じないんだね」
「信じられるか。馬鹿馬鹿しい」
フィレーナは、立ちあがるとあっさりと服を脱いだ。
「これでもかい？」
ラリスは声もでなかった。
「あ……、あの……」
「今、僕の出来ることって、これぐらいだ。抱いてくれよ」
ラリスは目をそむけた。
眩しいぐらい美しい肢体だったからだ。
そして、あまりに抵抗感なく自分の前に立っていて、目のやり場がなかったからだ。
それよりなにより、頭が混乱していた。
……フィレーナが女？　この俺と五分に戦ったあの狼のフィレーナが……

俺は酔っているのか？
いや、そんなはずはない。今日ぐらいの酒で酔うはずはない。
「僕って、変かな？　女として」
フィレーナが訊いた。
「いや、そんなことはない」
「じゃあ、抱いてくれ。僕に何をしてもいい。僕は何もいわない。ラリスのしたいようにしていい」
「あのな……」
ラリスはやっと落ち着いてきた。
「女であるのはよく分かった……」
「うん」
フィレーナは頷いた。
ラリスは、なるべくフィレーナの体を見ないように、包帯をつけた顔を見つめて話した。
「だがな、それとこれとは違うんだ」
フィレーナが訊いた。
「なにが違うんだ？」
「つまり、抱くとか抱かれるとかだ……。要するに、好きでなきゃ抱かれちゃいけない」
「分かっている」

「分かってない」
ラリスが強く言った。
フィレーナは、包帯の奥からラリスをじっと見つめて言った。
「僕はラリスが好きだ。男では一番好きだよ」
ふとラリスは、フィレーナの包帯の奥の目に吸い込まれていきそうな気がした。
「その、好きだけではなく、愛するとか……、その男の子供を生みたいとか……」
フィレーナは、ちょっと考えていたが、
「愛していると思う。それにラリスの子供が生めるなら生んでみたいと思う」
ラリスは、息を飲んでフィレーナを見つめた。
「きっと強い子が生まれると思うから……」
「違う、違うんだ」
ラリスは何度も、首を振った。
「お前の思っている好きとか愛とか、子供を生みたいとかは違うんだ」
「分からないよ、いっていることが……」
フィレーナは、椅子に坐って頬杖をついた。
ラリスは、裸の女を前にしてこんなことをいっている自分が切なくなってきた。
「お前なあ、男に抱かれたことないのか？」
「ない。だから、ラリスに抱かれたいんだ。初めてのときは大好きな人に抱かれたいんだろ、

女は……」

「お前はね、男としての俺が好きなんだ。お前は知らないんだ愛って奴を……。お前は立派な女だよ。女だけど……。もっと女として好きな男に抱かれることだな。そして、男へのお礼のためじゃなく、ただ愛だけで抱かれたい男を見つけろよ……」

フィレーナは情けなさそうにラリスを見た。

「要するに抱けないんだ僕を……」

「ああ……」

「ラリスは、僕を好きじゃないの」

「好きだよ。だけれど、だけれど……」

ラリスは再び混乱してきた。

ラリスは立ちあがると、フィレーナの服を拾って肩にかけさせた。

「さ、おいき、フィレーナ。俺は抱けないんだ、お前を……」

フィレーナも頷いた。

「ああ、嫌なのに無理にとはいわない。おやすみ、ラリス。ほんとにありがとう」

フィレーナは出ていった。

ラリスはしばらくの間、呆然と立っていた。

そして、呟いた。

「最後の晩に女か……。抱けるはずないじゃないか、あいつを好きでも……」

ラリスは、酒を呷り飲んで、ベッドに仰向けに倒れこんだ。
リラはベッドの中でパッチリと目を開けていた。
フィレーナが小屋に入ってくる音がした。
「リラ、起きているね」
「ええ」
「僕、抱かれに行ってきた」
「そうだと思った」
「で……、さ」
「うん」
「抱かれなかった」
「えっ？」
リラは信じられなかった。
「僕ね……」
「うん」
「好きだったんだけどね……」
「うん」
「駄目な女なのかな、僕」

「な、ことないない」
「まいっちゃったな」
「ついてないね、お互いに……」
「ついてないのかな……」
「うん、そう思うことにしようよ」
「ああ、明日は男に戻んなきゃな」
フィレーナの声は落ち込んでいた。
リラは、急にフィレーナがいとおしくなった。
……あなたのいい人は、私が見つけてあげます……。でも……
リラは肩をすくめた。
明日は助かる見込みのない戦いが待っている。それを、フィレーナはけっして逃げないだろう。
……そして、わたしだって、フィレーナから離れない。絶対に！……

陽が昇ると同時に攻撃は始まった。
盗賊団を恐れる討伐隊は、雪の崖の上から徹底的に白熱砲をぶち込んだ。
真っ赤な自忘芥子が、散り散りに吹き飛び、赤い雪のように散った。
集落は、影も形もなく吹き飛んだ。

そして、生き物などひとかけらも残っていないほど、破壊しつくした後になって、やっと討伐隊はリトル・ラリテニアに入って行った。
静寂だけしか残っていなかった。
討伐隊は作戦完了を報告した。
どっと、後方の観客部隊が入ってきて、リトル・ラリテニアは兵隊で溢れた。
本来の討伐隊は、もうお役御免だった。
帰隊命令がでて、疲れきった重い足で、雪の壁の通路を通って外へ出てきた。
そのときだった。
占領したリトル・ラリテニアから爆発音がした。
雪の壁の割れ目から、パニック状態になった兵士達が逃げ出した。
討伐隊は戻ろうとしたが、人の波で前進できなかった。
一体、何が起こったのか？
討伐隊は理解出来なかった。
ラリス達は死んではいなかったのだ。
彼らは、雪の崖の壁面に貼りついていた。
そして、リトル・ラリテニアが兵士でいっぱいになり、身動き出来ないほどになったとき、雪の崖から飛び降りて、肉弾戦を始めたのだ。
帝国軍はあまりに数が多く、白熱光線は同士撃ちの危険があって使えなかった。

いや、実際は、恐怖にかられた兵士達からの発砲で、かなりの兵士が倒れていった。
ラリス達の思いどおりに戦いは始まった。しかし、どんなに飛び回り、跳ね回っても、帝国兵士の数は多い。
一人、また一人とラリテニアンは倒れていった。
やがて、戦いは治まった。
無数といっていい数の兵士の命と引き換えにしたラリテニアンの数は十数人だった。
少なすぎる。
まだ、どこかにいるはずだ。
帝国軍は探査機で、今度は注意深く、地下を探り出した。
反応があった。
集落のあった場所に、無数の地下道があったのだ。
だが、地下道に無防備に入りこもうとする部隊はいなかった。
先刻の戦いで懲りていたのだ。
戦いは、特殊部隊が来るまで待たねばならなかった。
だが、待っていられない者もいた。
バラバ兵団の生き残り達だ。
彼らは、ただちに地下道に潜入した。

そのころ頭上の帝国軍では、頭の痛い問題があった。
観客のつもりで来た兵士達に犠牲者が出すぎたことだ。
責任は誰がとるのか。
軍の上層部は会議をはじめた。
彼らにとって、今は戦いより会議が得意だった。
地上の会議が白熱しているころ、地下でも熾烈な戦いが行われていた。
たった四人のバラバ兵団だが、用意した武器が違っていた。
瞬時に百メートル先まで蒸発させる小型白熱砲が、最大の武器だった。
ラリテニアンの持つ武器は所詮、闘技に使われる軽量なものだ。接近戦に持ちこまなければ勝てない。
そのためには、白熱砲を潰さねばならない。
誰かが的になり、その反対側から、硝子手榴弾を持った男が、白熱砲に飛びつき、身をもって爆破するしかない。
それが結論だった。
そして、何十人も失敗し、四人のバラバ兵団の白熱砲を使用不能にしたときには、ラリテニアンの数は二十人もいなかった。
だが、バラバ兵団とまともに戦えるのは、ラリスとフィレーナしかいなかった。
フィレーナとラリスはコンビを組んで戦うことにした。

それの方が、一人を倒せる確率が高い。
だが、一人と戦っているうちに、別のバラバ兵団にラリテニアンは次々に倒されていった。
「分かった！」フィレーナが答えた。
「いくぞ」ラリスが叫ぶ。
目の前に、バラバ１が仁王立ちに立っている。
ラリスとフィレーナは、地下道を並んで走り出す。
並んで来る二人を倒すには、横なぎにするに限る。
バラバ１は剣を横に構える。
瞬間、フィレーナはヘッドライディングするように滑り込み、ラリスは、バラバ１の頭上と地下道との僅かな隙間めがけてジャンプする。
上下に飛んだ二人の間を、バラバ１の剣が空を切って通りすぎる。
フィレーナは下から上へ剣を突き上げ、ラリスはバラバ１の頭部に剣を叩きつける。
バラバ１は、上下からの攻撃をかわし切れず血煙を上げて倒れた。
……あと三人……
フィレーナとラリスは地下道を駆ける。
前方に小山のような黒い影が見える。
黒い悪魔か！

二人は剣を構える。
だが、影は動かない。
フィレーナは気配を感じようとした。
何もなかった。
しかし、人間であることは確かだ。
近づいていったラリスが、思わず呻き声をあげた。
「みんな……」
そこには、六人の男達が一人の黒い悪魔、バラバ2を押し潰すようにし、死んでいた。
六人は剣を持っていなかった。
剣では勝てないと知った六人は、素手で飛びかかったのだ。そして、彼らの重量で押し潰し、窒息させたのだ。
だが、その間に、死にもの狂いで反撃するバラバ2の剣を体のいたるところに受け、誰も生き延びることが出来なかった。
「みんな、よくやった……」
ラリスは、呻くように呟いてフィレーナに言った。
「他にいう言葉があるか?」
フィレーナのいえるのは一言だけだった。
「あと二人だ」

フィレーナとラリスは、麻薬倉庫の地下にやってきた。
全ての地下道は、ここに通じていた。
「フィレーナ」
リラが駆けよった。
……生きてて良かった……、とはとてもいえなかった。
勝ち目のない戦いだ。むしろ、今は、会えて良かった、だった。
フィレーナは気配を窺った。
あと二人、どこかにいる。
並んでいる橇の陰に気配を感じる。
「リラ、橇の上には何がある？」
リラは答えた。
「麻薬の袋がいっぱい」
「分かった」
フィレーナは、ラリスに指で合図すると、そしらぬ顔で橇に近づいていった。
明らかに自分を狙って構えている気配がわかる。
……さあ、おいで。いつでもいいよ……
橇の陰から剣を振りかざしたバラバ3が立ちあがる。
フィレーナは跳躍する。

頭上の麻薬の袋に剣を突き立て、引きずりおろす。
袋が破れ、麻薬の粉が飛ぶ。
粉を頭からかぶり、目の見えなくなったバララバ3が、よろけながら出てくる。
バラバ3の周りは、粉の煙だ。
「白熱光を！」
フィレーナとラリスは、同時に剣から白熱光線を放った。
白熱光は、粉の粒一つ一つを燃し、
ドカーン！
たちまち粉の煙ごと、爆発を起こした。
バラバ3の体は跡形もなかった。
「あと一人」
フィレーナがラリスに指一本を見せた。
「あと一人じゃない。上には帝国軍が山ほどいるんだ」
「そりゃそうだけど」
「ここの様子を見ると、俺達も三人だけになっちまったようだ。さ、橇で行け。お前はやるだけはやった」
「僕は行かない」
フィレーナは横を向いた。

「そうか……」

ラリスは、フィレーナの肩に手をおいた。

「フィレーナ、俺はお前が好きだ」

「えっ?」

「だから、生きていて欲しい」

ラリスは、いきなりフィレーナの鳩尾(みぞおち)を叩(たた)いた。

気を失ったフィレーナを橇に放り込むと、どうしたらいいか分からないリラを抱きあげ、橇にのせた。

「フィレーナの行くところが、お嬢さんの行くところだろ」

「ラリス……」

「もう、君はガキじゃないんだから……、フィレーナをよろしく頼むよ」

橇が動き始めた。

ラリスは、壁に備え付けられたハンドルのついた計器盤の傍に行った。

……これで、リトル・ラリテニアもサヨナラだ……

それは、火山口の上に敷き詰められた温度調整金属(ヒートベイメタル)を破壊する装置だった。

ラリスはハンドルを回し始めた。

そのとき、その後ろ姿に向けて剣を構え白熱光線の狙いをつけている男がいた。

バラバ7だった。

フィレーナ達を乗せた橇は、ゆっくりと穴に入っていく。
そのとき、フィレーナは目を醒ました。
「ラリス……。ラリスは？」
橇のスピードが早くなっていく。
「どこにいるんだ。ラリス！」
ラリスは振り返って叫んだ。
「さようなら、フィロセラのフィレーナ、生き続けろ！」
「ラリス！」
フィレーナは、目の包帯に手をやった。
まだ半日早い。今、取れば失明するかもしれない。
でも、ラリスをこの目に焼き付けたかった。
フィレーナは、包帯をひき千切った。
明かるい！
次第に見えてくる。
治っている。
ぼんやりと見える人影は……。
あれがラリスだ。



人影がはっきりとしてくる。
あれがラリスなんだ。
そのときだった。
バラバ7が白熱光を放った。
ラリスの体が、白熱光の渦の中で消えていく。
フィレーナの瞳に焼きついたのは、白熱光の光の中で蒸発していくラリスの影だった。
開いたばかりだというのに、もうフィレーナの瞳には涙が止まらなかった。
ガシン！
橇が揺れた。
後から来た橇がぶつかったのだ。
そして、いきなり男が飛び移ってきた。
ラリスを撃ったバラバ7だった。
三人は、橇の上で揉みあった。
橇のスピードはぐんぐん上がっていく。
急カーブの連続だ。
揺れも烈しい。
体を支えるのがやっとだ。
バラバ7が、フィレーナに摑(つか)みかかってくる。

……こいつが、こいつが、ラリスを……
フィレーナはもがく。
そのときだった。
バラバ7の手の平が、フィレーナの胸を握った。
……!!……
フィレーナは、この手の感触に憶えがあった。
……こいつは!……あの城壁で僕に触った奴だ……
畜生!
フィレーナは、渾身の力を振り絞ってこぶしを男の鼻に叩きこんだ。
一発、二発、三発。
こぶしが潰れても構わなかった。
バラバ7は、半身を上げてナイフを抜き、突き立てようとした。
フィレーナは、身を縮めて足を胸の前にたたむと、力いっぱい蹴りあげた。
バラバ7の体は伸び上がった。
その瞬間、氷のトンネルの天井が急に低くなった。
バラバ7の顔面は天井に激突し、こすれ、弾け飛んだ。
そして体はゆっくりと橇の後部から落ちていった。

そのころ、リトル・ラリテニアの地下の温度は急速に上昇していった。
それまで地熱を抑えていた温度調整金属が弾け飛んだのだ。
突然、轟音をあげて雪の崖が崩れ落ちた。
雪の崖は、帝国軍を、そしてリトル・ラリテニアを、みるみる雪で埋めつくしていった。

フィレーナとリラを乗せた橇は、一時間近くかかって山の麓（ふもと）の洞穴の中に着いた。
洞穴の外は林で、人影は見えなかった。
二人は陽の光を見て、南を目指して歩き始めた。
帝国の北部にドラはある。南にさえ行けば、ドラから遠ざかるはずだ。
フィレーナはポツリとリラに訊いた。
「ラリスって、どんな人だった？」
「ん、うん、いい人よ」
「そういうんじゃなくて……。目に見えるとこ、全部……、教えてくれないか？」
リラは、ラリスの顔が焼けただれていたなんて、一生、口が裂けても言うつもりはなかった。
「うん、わたしとしては……、せっかく見つけた最高の男だったのに……。フィレーナもわたしも惜しいことしたなあ……」
「そう……。そうだろうな……」
フィレーナは何度も頷いた。

＊

そのころ、ドラ市の帝国病院の最上階で、上層部の面々の前に、黒い鎧が現れていた。

「今回の失態は、中央本部により、ドラ支部上層部全員の責任と決した。処分は分かっているね」

上層部の一人が訊いた。

「どの時点で失態が明るみに出たのです？　最後にお訊きしたい」

中央本部の男は答えた。

「リトル・ラリテニアの存在を、我々は昔から知っていた。知っていて見逃していたのだ。良質の麻薬は、利用価値がある。表では禁じていても、裏では黙認しているものもある。それを、諸君は、たった一人の奴隷を追いかけまわして、破壊してしまった」

「なぜ、それを教えてくれなかったのです。リトル・ラリテニアの位置は、ドラ支部の管轄ですぞ」

「諸君に教えるようなものは、帝国機密とは呼べないじゃないかね」

ドラ支部の上層部は、何もいえず黙っていた。

その日から一週間、帝国病院で心筋梗塞（しんきんこうそく）の死者が数多く出た。

＊

どれほど歩いたろう。

林がとぎれ、足元にはざらついた砂が目立つようになった。

「ん？」

フィレーナは、ふと立ち止まって耳を澄ました。

「どうしたの？」

フィレーナは、黙ってリラの手を取った。

いきなり走り出す。

「なに？　どうしたのよ」

「いいから早く！」

フィレーナは、砂地の丘を、リラを引きずるようにして駆け上った。

そして、その場で立ちつくした。

フィレーナが聞いたことがなくて、いつも子守り唄のように聞いていた音が、そこにあった。

嗅いだことはないが、いつも鼻をくすぐっていた香りがそこにあった。

そして、閉じられた闇の中で、いつも見つめていた風景がそこにあった。

見える。

今、確かにフィレーナの瞳には海がうつっている。

海は、フィレーナを待っていた。

第2部　完

あとがき

おぼえていてくださいましたか。
「永遠のフィレーナ」と、そのあとがきを――
……フィレーナの戦いは、もう始まっています……。
そんなあとがきで、おわかれしてから、秋が来て、冬が過ぎ、春になり、長い冬眠で、寝ぼうしすぎたなまけものの小熊が、穴ぐらの中から顔をだし、知らないうちに春の桜が散っていたのにびっくり仰天し、目をぱちくりしているかのように、永遠のフィレーナは、今、やっと目を醒ましました。
などと、フィレーナに、この長いどぶさたの責任をなすりつけていますが、早い話が、作者が、のろまで書けなかっただけの事です。ごめんなさい。
最近、どうも、あっちこっちで、ごめんなさいばかり言っていて、くせになりそうで、こわい今日このごろです。
(とっくにくせになっとるわい。こっちもな……編集担当のつかれはてた寝言……)
……くせになったついでにくせになった弁解をさせていただくと、
……フィレーナの戦いはもう始まっています……と、書いたものの、どう始まっているのか……これでも考えに考え続けたのです。
僕の作品では、登場人物が動きだすと作者の思惑を超えてストーリーが変わってしまうこと

がよくあります。

案の定、ＰＡＲＴ２で、フィレーナやリラが動きだした今、どうやらフィレーナの戦いは、奴隷の抵抗や、滅ぼされたフィロセラ再興などという当初のストーリーとは、違う方向に進んでいきそうなのです。

えらいこっちゃ、……作者への作品の反乱です。

一度は、視力を失ったフィレーナの瞳に光がよみがえった時、新しい何かが見えだしてきたのです。

それが何であるか、作者が、あとがきなどで説明するのではなく、読者のみなさんが、作品の中、そして日常の生活の中から見つけだしていただければ、これ以上のことはありません。

フィレーナとリラの生きている世界はどこなのか、そしてフィレーナとリラは、日常の僕達のまわりにいる誰なのか……。

おっとっとと、あとがきは、蛇足ならぬ熊の尻尾、短いほうがよろしいようで……。

今は一九八六年、四月。あいもかわらず、子供達の間では、いじめは続いているわ、あっちこっちで戦争はやっているわ、ついでに、アイドル歌手は降ってくるわ、みんな、なんだか、くたびれ果てているようで……。「永遠のフィレーナ」が、僕達にとって元気のでる作品になってくれるとうれしいのですが……。

な、訳で、やっぱりくたびれはてた作者は、もうちょっとがんばってみようと思うのです。

原稿の遅れに怒るのにもくたびれ果てた、絵の高田明美さん、編集さん、そして何より読者

のみなさん、もう少しおつきあいいただけますか？
ハァハァハァと息切れしながらも、元気、元気！
なにしろ、フィレーナの戦いは、今も続いています。

首藤　剛志

アニメージュ文庫

永遠のフィレーナ 2
光への脱出

N-015

1986年5月31日 初刷

作者 首藤剛志
発行者 尾形英夫
東京都港区新橋四―一〇―一〒一〇五
発行所 株式会社 徳間書店
電話〇三(四三三)六二三一(大代)
振替 東京四―四四三九二番
印刷
製本 大日本印刷株式会社

〈編集担当 高橋 望〉

ISBN4-19-669555-8C0174.(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。

アニメから小説へ

無限に広がる首藤剛志ワールド

1 痛快冒険活劇
戦国魔神ゴーショーグン シリーズ

'81年にテレビ東京で放映された人気ロボットアニメを原作者みずから小説化。

戦国魔神 ゴーショーグン
絵　なにわ♡あい

テレビ版を完全ノベライズ。これがすべての原だ！

その後の戦国魔神 ゴーショーグン
絵　グループ・コーヒートウニウ他

レミー・ブンドルら6人組の新しい冒険が始まる。

またまた戦国魔神ゴーショーグン 狂気の檻
絵　天野喜孝

天野喜孝のイラストを得て、よりハードな世界へ

4度戦国魔神ゴーショーグン 覚醒する密林
絵　天野喜孝

密林の惑星でレミーたちは、本当の敵をついに知る。

戦国魔神ゴーショーグン 時の異邦人
絵　天野喜孝

'85年に発売された同名のビデオアニメのノベライズ。

戦国魔神ゴーショーグン はるか海原の源へ
絵　天野喜孝

海の惑星に降りた6人組が、人類創造の謎に挑む。

②美少女ファンタジー

魔法のプリンセス ミンキーモモ シリーズ

全国の男性アニメファンを狂喜させた究極のヒロインが、AM文庫で大活躍。

いつかきっとピーチブック

絵／わたなべひろし他

写真・イラスト満載のバラエティ・ブック。

それからのモモ

絵／わたなべひろし&けいこ

絵本形式で贈る魔法を失くしたモモの物語。

魔法のプリンセス ミンキーモモ 夢の中の輪舞

絵／わたなべひろし&けいこ

これが最後のモモ。ビデオアニメの小説化。

③初のオリジナル ヒロイニック・アドベンチャー

永遠のフィレーナ シリーズ

「クリィミーマミ」の高田明美との最強コンビで生み出したオリジナル小説。

永遠のフィレーナ①

絵／高田明美

レミー・モモに次ぐ第3の首藤ヒロイン登場。

永遠のフィレーナ② 光への脱出

絵／高田明美

まだまだつづく首藤ワールド。はたして次は？

定価はすべて380円

首藤剛志作品

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
またまた戦国魔神ゴーショーグン
　狂気の檻
４度(たび)戦国魔神ゴーショーグン
　覚醒する密林
いつかきっとPEACH BOOK
(『ミンキーモモ』より)
それからのモモ
(絵／わたなべひろし&けいこ)
魔法のプリンセスミンキーモモ
　夢の中の輪舞(ロンド)
戦国魔神ゴーショーグン
　時の異邦人(エトランゼ)
永遠のフィレーナ[1]
戦国魔神ゴーショーグン
　はるか海原の源へ

カバーイラスト＝高田明美
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱

徳間書店
アニメージュ文庫
ISBN4-19-669555-8 C0174 ¥380E(0) 定価380円

